

靈界物語 第七七卷 天祥地瑞 辰の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十七卷』天聲社

1982(昭和57)年06月01日 六版發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第六章 田族島着陸（一九三八）

第二篇 十一神將

第七章 萬里平定（一九三九）

第八章 征魔の出陣（一九四〇）

第九章 馬上征誦（一九四一）

第一〇章 樹下の雨宿（一九四二）

第十一章 望月の影（一九四三）

第一二章 月下の森蔭（一九四四）

第三篇 善戰善闘

第一三章 五男三女神（一九四五）

第一四章	夜光の眼球 <small>やくわうめだま</small> 〔一九四六〕
第一五章	笹原の邂逅 <small>ささはらかいこう</small> 〔一九四七〕
第一六章	妖術破滅 <small>えうじゆつはめつ</small> 〔一九四八〕
第一七章	劍槍の雨 <small>けんさうあめ</small> 〔一九四九〕
第一八章	國津女神 <small>くにつめがみ</small> 〔一九五〇〕
第一九章	邪神全滅 <small>じゃしんぜんめつ</small> 〔一九五一〕
第二〇章	女神の復命 <small>めがみふくめい</small> 〔一九五二〕

第四篇 歡天喜地くわんでんきち

第二一章	泉の森出發 <small>いづみもりしゆつぱつ</small> 〔一九五三〕
第二二章	歡聲滿天 <small>くわんせいまんてん</small> 〔一九五四〕
第二三章	歡聲滿天 <small>くわんせいまんてん</small> 〔一九五五〕
第二四章	會者定離 <small>あしやじやうり</small> 〔一九五六〕

序文

近來漸く世間に日本魂の發揚と國民精神の高調を計らむとする種々の團體が發
生したるを聞く。まことに慶賀すべき現象である。

吾人は明治三十一年より今日に至る前後三十六ケ年間、日本魂の高調と皇道宣
揚のために一大獅子吼を續けつつ萬難を排して進んで來たが、天の時到りて現代
の日本國は超非常時に直面したれば、國民の各階級を通じて日本精神の作興、國
民精神の高調を云爲する者の日に月に多きを加ふるに至りたるこそ皇國日本更生
の先驅として結構なことであると思ふ。併し日本には日本固有の精神があり、歐
ロッパにはヨーロッパの精神があり、亞米利加にはアメリカ精神と言ふものがあつ
て、建國の大精神として國民の傳統性を象徴すべき事は言ふまでもないことであ
る。

殊に東方に國し、萬世一系の國家として萬邦に冠絶する日本國とすれば、われ
われのみの有する國民精神、即ち日本魂でなくては、我文物制度の諸々の特異性

が、世界萬邦に強記され驚嘆さるる筈はないのである。

特に日本魂の高調によつて、國民の覺醒を求めなければ、わが日本魂は光暉もなく徳澤もないと主張する人々もあるやうだが、而もわが日本國民には牢固たる日本魂、純乎たる國民精神なるものは、決して脆く消磨し又は喪失すべきものとは斷じられない、のみならず、この精神には益々高く清く且つ明澄に常住坐臥、磨きをかけられ光暉を放ちつつあるものと觀なければならぬ。

日本魂なるものは忠孝、信義、友愛、大俠、義勇、正義、自由の各自純眞な意識行動によつて發勵さるるを本義とする。我萬邦に比類なき國體を護り國家を支持する精神は、咸く皆これら國民性の固有する負誇矜持であつて、他の國民の模し且つ奪ふべからざる獨占的所有權である。この占有權には絶對の保障がなくてはならない。即ち日本魂の約束する一つの手形である。この絶對不可侵的手形は既成宗教的信仰心の裏書によつて容易に手放されぬ。もし手放すものがありとするならば、茲に日本魂即ち國民精神は奪ひ去られて、國民の持つ處の精神的財産、精神的衣糧は跡形もなく消え亡せるであらう。然り、この精神的亡者、精神的自

殺者が現代日本國に生を享け生を營みつつありとせば、それは日本精神を賊し且つ冒瀆するもので心外千萬の沙汰である。

顧みれば歐米の文明なるものは果して日本に何物をもたらしたか、只その文明の心酔者が先走り上迂りたる理智本能と物質的機械的なる盛装に眩惑し、愛溺し、重寶がただだけの事象は認められようが、得るところ残さるるものは、思想の偏傾と荒類とを擧げ得る位のもので、この間動もすれば思想の變遷を助長し促進して、あらぬ方面への脱線、奔放を體現する一部の國民なしとは斷言されない。

歐米文明の長を採り短を補ふと言ふ本來の意義は、如何に固陋な舊道學者と雖も否認すべき道理がない。けれども短を補ふの程度を踰え、餘りに長所を盲信した機械と物質のロボット化せしことによつて、脱線的思想家を生じ、自恣奔放なる似而非自由主義者の怪物がのさばり出すやうになつた。これで見ると、凡そ世に變態と稱し得べき範圍に於て、啻に政治の上に經濟組織の上のみ時に變態の稱を冠し得る事實の發生を記憶する以外に於て、人間の思想の上にも亦變態的事實の存在を否認されぬこととなる。洵に呪はしい世相であり人間世界である。

何をか人間の思想に變態事象ありと言ふか。いはゆる歐米文明のあまりに廣範圍に無際限にとり入れられた爲に、その長所の標識が狂ひ出して、終に脱線奔放のありの儘のすがたをさらけ出してしまった。即ち國民思想の一部に、左傾し赤化する事實の認定を首肯するものは、これを思想の荒蕪的變態事象として指摘するに敢て憚らざるべしと思ふ。資本主義是正、統制經濟確立、これらの組織的努力は、組織構成の歪曲を正す上には一の努力には相違ないが、高所大局から見て我日本魂はこれと共に發揚し豐潤味を示しつつあるであらうか。一部の左傾赤化の歪曲精神から報本反始的是正に努力せなければ、我日本國民精神の全體を滅亡せしむるに至るやも計り難いのである。

斯かる事態にある皇國日本の眞精神と、天壤無窮の皇室の尊嚴とを普く國民に示現し、以て非常時に直面せる同胞に對し迷夢を醒まさしめむがために、茲に『天祥地瑞』の神書を著はしたる次第である。東洋特に皇國日本の天地開闢宇宙創造説と西洋諸國の説とを比較し見るも、海外諸國の論説は根據なき神話物語にして、非文明極まれる理由を覺り得るであらう。

切本卷は八柱の御樋代神の^{ひと}一柱なる朝香比女神の^{えいゆう}英雄的活動より、^{にし}西方の^{くに}國土を^{じゆんせい}巡生中なる^{おほもと}太元顯津男の^{かみ}神とスウヤトゴルの^{やま}山に^{くわい}會し、^{おほま}大曲津見を^{ことむ}言向け和し、^{うら}美しき^{あた}新しき^{くに}國土を^{けいえい}經營し、^{くに}國魂神を^う生み出でますといふ^{しびてん}紫微天界に^お於ける^{だいくわつ}大活動の^{じよまくてき}序幕的物語である。

昭和八年十二月十日

舊十月二十三日

於大坂分院

口述者識

第一篇 萬里の海原ま で うなばら

第一章 天馬行空てんばかうくう（一九三三）

高地秀山の聖場にたかちほやまのせいぢやうに
八柱神と仕へたるやはしらがみつか

朝香の比女は唯一騎あさかのひめただいっき
諸神等の諫言をももがみたちかんげんを

耳にもかけず雄々しくもみみにもかけずをを
曲津の猛る大野原まがつのたけおほのはら

果しもしらに縹渺とはてはへうへうと
雲霧わけて種々のくもきりくさくさの

艱みの坂を越えながらなやのさかをこえながら
由緒の深き榮城山ゆゑしよふかささきやま

尾の上に登り顯津男のおほのぼのあきつを
神の遺跡を追懐しかみのゐせきをつあぐわい

主の大神の大宮にすのおほかみのおほみや
神言宣らせやうやうにかみことのかみ

榮城の山に仕へたるさかきやまにつか
諸神等に暇乞ひももがみたちいとまご

又もや獨り大野原

駒に鞭うち出でたまふ

日も黄昏になりし時

八十の曲津見驚きて

比女の前途をさやらむと

曲の力のありたけを

盡して廣き沼となり

横はれるぞ忌はしき

朝香の比女はこれを見て

天津祝詞を奏上し

生言靈を發射して

沼と變りし曲津見を

永遠無窮に封じこめ

曲の化身の大巖を

忽ち舟と變ぜしめ

駒諸共に悠々と

月照りががよふ夜の湖

彼方の岸に着きたまひ

再び御舟は巖となり

名さへ目出度き御舟巖

南の岸邊にそばだてり

頃しもあれや東の

空はやうやく東雲めて

遠く聞ゆる家鷄の聲

國津神等の住む家の

近づきけりと勇み立ち

沼を變じて湖となし

眞賀の湖水と名づけつつ

岸邊きしべを鞭むちうち進すすみます 雄姿ゆうし水面みのもにさかさまに

駒こま諸もろ共ともに寫うつらひて 其雅そのみやびなる御姿みすがたは

名畫めいぐわもかくやと思おもはれぬ 朝香あさかの比女ひめは勇いさみ立たち

大野おほのの奥おくに霞かすみたる 丘をかの麓ふもとに駒打こまうたせ

急いそぎたまへば狭野さぬの里さと ここに住すまへる諸々もろもろの

國津神等くにつかみたち諸共もろともに 天津空あまつそらより比女神ひめがみの

降くだらせたまふと喜よろこびて 誠まことの限かぎりを盡つくしつつ

いと懇ねもころに迎むかへけり 朝香あさかの比女ひめは駿馬はやこまの

背せなより下くだらせたまひつつ 國津神等くにつかみたちに生せい活くわつの

道傳みちつたへまし火ひを切きりて すべてすべてのものを焼やきて食くふ

火食くわしよくの道みちを傳つたへまし 國津神等くにつかみたちの酋長かしらなる

狭野彦さぬひこ一人ひとりを伴ともなひて 再ふたび廣ひろき荒野あらの原はら

雲霧くもぎりわけて出いでませば 前途ぜんとを擁ようして横よこはる

東あづまの河かはの河岸かはぎしに 黃昏たそがるる頃ころやすやすと

辿りたまへば新月の光は空にきらりきらり

輝きわたり比女神の前途を守らせたまふなり

ああ惟神々々 恩頼こそ畏けれ。

八十曲津見は、眞賀の湖水の計略に破れ、部下の曲津見は、朝香比女の神の生
言靈に封じ込められて、大部分魚貝と身を變じ、永遠に湖底の住所を與へられ、
國津神等の日常の食物と定められければ、八十曲津見は憤慨の極、無念骨髓に徹
し、如何にもして比女神の前途に遮り、災禍を加へむと千思萬慮の結果、高地秀
山の峰より落つる東河の岸邊より、無数の大蛇となりて比女神を艱ましまつるべ
く、手具脛ひいて待ち居たるなりけり。

東河の激流は折から輝く新月の光に照らされて數多の星を流せしごとく、浪頭
はキララキララと光り輝き渡る美しき流れなり。

比女神はつらつら透かし見給へば、東河の水面一帯に大蛇横はり、浪頭に星の
輝くよと見えしは何れも大蛇の鱗なりける。鱗の一枚々々に月光輝き得も言はれ

ぬ美しき光の流れなりけり。狭野彦は大蛇の横はり鱗の光れりとは夢にも知らず、
さも美しき流れやと歎美しながら歌を詠む。

美しき東の河の流れかな

浪のまにまに月かがよへり

比女神の御共に仕へまつりてゆ

かく美しき夜河を見るも

たうたうと流るる東の大河の

夜の眺めはまたと世になし

駿馬の背に跨りてこの流れ

渡ると思へば心清しも

「いざさらば、狭野彦瀬踏み致さむ」と駒に鞭うち出で立たむとするを、
朝香比女の神は厳しく止めて、御歌もて知らせ給ふ。

𠄎 狹野彦の眼は廣き河浪の

月にさゆると見ゆるなるらむ
河浪と見ゆるは何れも曲津見の

變化の蛇の鱗なるぞや

數限りなき蛇の鱗に大空の

月のかがやく光と知らずや

此河に駒を入るれば忽ちに

大蛇の餌食となりて亡びむ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

百千萬千萬の

神等ここに出でまして

八十の曲津の曲業を

科戸しなどの風かぜに吹ふき散ちらし
追おひやらひませ惟かむながら神
朝香あさかの比女ひめが誠心まごころを
捧ささげて祈いのり奉たてまつる
□

かく歌うたはせ給たまふや、四方しはう八方はつぱうより、ウーウーウーとウ聲ごゑの言靈ことたまひび響ひびき渡わたり、大河おほかは
の面おもを群むらがり塞ふさぎたる幾いく千せん萬まんの大蛇をろちは次第しだい々しだいに姿すがたを細ほそめ、見みる見みる影かげも形かたちも消き
えうせて、青あをみだちたる水滔みづたう々たうと月つきに照てらされ深ふかく廣ひろく流ながれゐる。狭野さぬひ彦こは驚おどろき
て、

□ 朝香あさか比女ひめ神かみの神言みことの珍めづらしき

智慧てりに大蛇をろちは看破みやぶられける

かくのごと尊たふとき神かみとは知しらずして

御供みともに仕つかへし吾恥われはづかしも

曲津見は數萬の大蛇と身を變じ

禍せむと待ち居たるはや

吾は今この河岸に黄昏れて

八十の曲津の曲業を見し

曲神の八十のたくみは賢しくも

眞言の神には叶はざりける

大河の流れと見しは曲津見の

大蛇に化けし姿なりける

かくならば吾は恐れじ朝香比女の

神にしたがひ河渡るとも

駿馬の勢如何に強くとも

御稜威ならではこの河渡れじ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

高^た地^か秀^ちの^ほ峰^みより^ね落^おつる^は東^あ河^つの^ま

水^み瀬^なは^せ強^つく^よ駒^こは^ま進^すまず

神^{しん}力^{りき}は^りい^きかに^き強^つく^よも^ひ東^むの^{がし}

この^お大^ほ河^かは^は駒^こな^まや^なむ^なり

吾^{われ}は^い今^ま生^い言^く靈^{こと}の^{たま}光^{ひかり}に^て

大^お空^ほか^ぞけ^らり^か河^は渡^{わた}ら^むと^お思^もふ^ら

狭^さ野^ぬ彦^{ひこ}は^う歌^たふ。

如^い何^かに^かし^て御^み空^そを^をか^けり^り渡^{わた}り^ます^か

吾^{われ}國^{くに}津^つ神^{かみ}は^せ詮^ん術^ずな^しも

公^{きみ}こ^そは^あ天^ま津^つ神^{かみ}な^り大^お空^ほを^を

渡^{わた}ら^せた^まふ^はさ^ぞ安^{やす}か^らむ

國^{くに}津^つ神^{かみ}狭^さ野^ぬ彦^{ひこ}わ^れは^に肉^く體^{たい}の^の

重きを如何に空渡るべき』

☞ 朝香比女神の御尾前守りつつ

しのびしのびて御供につかへぬ

今宣りしウ聲の清き言靈は

鋭敏鳴出の神のすさびなりしよ』

と空中に御聲聞えて間もあらず、霧の中より白馬に跨り、朝香比女神の御前に
悠悠と下り給ひし神あり。よくよく見れば御言靈にたがはず、高地秀の宮の神司
と任けられし英雄神鋭敏鳴出の神の雄姿なりける。

朝香比女の神は一目見るより、

☞ 汝こそは高地秀の宮の神司

われを守りし功をよるこぶ
狭葦河の曲津のなやみを言向けし

著き功は汝が神守りけむ

曲神の醜の奸計は破れけり

鋭敏鳴出汝の生言靈に

いざさらば此廣河を向つ岸に

進みて月の下びをすすまむ

鋭敏鳴出の神は御歌詠ませ給ふ。

朝香比女神の神言の危さを

悟りて吾は追ひしきにけり

主の神の神言畏み御尾前を

かくれて吾は守り居しはや

西方にしかたの國土くには遙はろけしこの前さきに

曲津まがの砦とりでは許こ々こ多だありつつ

曲神まががみの醜しこの砦とりでを悉ことごとく

はふり行きゆませ西方にしかたの國土くにへ

いざさらば吾われは姿すがたを隠かくすべし

道みちの隈手くまでもやすくましませ
『

かく歌うたひ給たまふと見みるや、鋭敏うな鳴出りづの神かみの御姿みすがたは、忽たちまち煙けむりとなりて消きえ失うせにけ
る。

狹野彦さぬひこは驚おどろきて、

☐ 天界かみくには怪あやしき事ことの重かさなれる

國土くにと思おもへど驚おどろきにけり

久方ひさかたの天津神等あまつかみたちの活動はたらきを

見つつ吾魂ゆるぎ初めけり

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

狭野彦の驚きうべなり國津神の

夢にも知らぬ神業の國土は

國土を生み國魂神を生みてゆく

神の神業はことさら怪しき

國津神の眼ゆ見れば吾も亦

怪しき神の群にぞありける

かく歌ひ終り、

吾乗れる駒よ狭野彦の駒よ

翼生せよ大なる翼を
生えよ生えよ大なる翼
此駿馬の天馬となりて
空をゆくまで」

と幾度も繰り返したまひ、

「タトツテチ、ハホフヘヒ」

と聲爽やかに宣らせたまへば、不思議やこの駒は大なる翼を生しける。

比女神は狭野彦と共に駒に跨り給へば、天馬は巨大なる翼を空中に搏ちながら、見も届かぬ廣河の激流を遙か眼下に眺めつつ、月の光は翼をキラキラと光らし、得も言はれぬ愉快さに満されて、向つ岸邊に難なく着かせ給ひける。狭野彦は驚歎措く能はず、

☞ 吾駒は翼生せて鳥となり

御空を翔けて河わたりせり

比女神の生言靈の功績に

わが乗る駒は鳥となりけり

比女神の駒は天馬となりかはり

御空に清くかがやきたまひし

天國の旅なる吾の樂しさを

語り傳へむ國津神等に

鋭敏鳴出の神現れまして河の瀬に

満つる大蛇を退けたまへり

比女神の影につき添ふ鋭敏鳴出の

神の功の尊きるかも

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

銳敏鳴出の神の功に守られて

吾つつがなく此處に來しはや

吾駒に翼生ひしも銳敏鳴出の

神のかくれし功なりける

銳敏鳴出の神の功を今更に

われは悟りて恥づかしみ思ふ

今よりは主の大神の神宣

力と頼みて荒野を進まむ

國津神狹野彦伴ひ吾伊行く

旅の行手を案じつつ居る

天津神は御空をゆけど國津神は

荒金の地ふみゆく身なれば

吾駒の翼はいつか消え失せて

野邊の草葉に嘶き初めたり

狭野彦の駒も翼をひそめつつ

息をやすめて草はみて居り

東の河は漸く渡りぬれど

わが行くさきに海原横たふ

この海は魔の大海とたたへられ

八十曲津見の群がれると聞く

吾伊行く道の曲津見悉く

言向け和して岐美許進まむ

初夏の風は吹けどもどことなく

この國原はうすら寒きも

狭野彦は歌ふ。

どこまでも比女神の御供に仕へむと

心の駒の勇みたつかも

いかならむ曲津見の禍さやるとも

吾は恐れじ比女神の功に

かく狭野彦は、朝香比女の神の神徳を讚美しながら、駒に跨り御後より果しなく霞立ち籠むる稚國原を進み行く。

(昭和八・一二・一二 舊一〇・二五 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録)

第二章 天地七柱 (一九三四)

朝香比女等が乗らせませす

天馬は地馬と還元し

翼收めてかつかつと

未だ國土稚き青野原を

進ませ給ふ勇ましき

吹き來る風は初夏ながら

曲津の水火の混じ交りて

心地は餘り良からねど

太元顯津男の神の

御許に到る樂しさに

勇氣益々加はりて

生言靈を宣りながら

進ませ給ふぞ勇ましき。

狹野彦は馬上より歌ふ。

高た地か秀ち山ほのや聖ま場のゆせい

此處こに朝香あの比女神ひめがみは

光ひかりとなりて降りまし

稚わかき國原くに固はめむと

女神めがみながらも唯一ただ騎い

天^あ降^もり給^{たま}ひし雄^を々^をしさよ
曲^ま津^がの沼^{ぬま}を言^{こと}向^むけて
水^{みづ}の底^{そこ}まで澄^すみきらふ
眞^ま賀^がの湖^こ水^{すゐ}を固^{かた}めまし
國^{くに}津^つ神^{かみ}等^と年^{とし}普^{まね}く
生^{いの}命^ちの食^ゑ餌^ばを與^{あた}へまし
火^{くわ}食^{しよく}の道^{みち}を教^{をし}へつつ
再^{ふた}び曲^ま津^がのすさびたる
稚^{わか}國^{くに}原^{はら}を拓^{ひら}かむと
進^{すす}ませ給^{たま}ふ健^{けん}氣^げさに
感^{かん}じて吾^{われ}は御^み供^{とも}となり
千^{せん}里^りの荒^あ野^{らの}を涉^{わた}り來^きて
東^{あづま}の河^{かは}の河^{かは}岸^{ぎし}に
漸^やく空^{そら}は黄^た昏^それぬ

御空を渡る月舟は
鋭き光を地の上に
投げ給ひつつ大河の
波をきらきら照らしまし
曲津の大蛇の鱗まで
隈なく照し給ひけり
恵は深し月讀の
露の光の幸はひに
吾魂線はよみがへる
折しもあれや鋭敏鳴出の
神の言靈幸ひて
天地も割れよと響きまし
曲津の大蛇は忽ちに
怪しの姿消え失せて

清きよけき深ふかき河かはとなり

いや滔たう々と永とこ久しへに

流ながれ果はてなき東河あづまがは

渡わたると駒こまに鞭むちうてば

比ひめ女がみ神われ吾とどを止とどめまし

この荒河あらかはは駿馬はやこまも

渡わたらむ術すべは無なからむと

宣のらせ給たまひつ言こと靈たまを

清すがしく淨きよく鳴なり出いでて

駒こまに翼つばさを生はやせまし

わが駒こま諸もろ共とも天てん空くうを

翔かけりて難なんなく大おほ河かはを

南みなみの岸きしに渡わたり終をへ

やつと呼い吸きする間まもあらず

ふたつの駒はいつとき

翼收めて元の如

地上の駒となりけり

嗚呼惟神々々

神の御稜威の尊さよ

生言靈の活用を

今日の前り拜みけり

嗚呼惟神々々

神の功ぞ畏けれ。

見渡せば果しも知らぬ野の奥に

小黒き雲の峰は立ちたつ

雲の峰湧きたつ邊りは霧の海の

中なかに浮うかべる魔ま島しまなるらむ

霧きりの海うみに曲ま津つ見み數あまた多す棲すむと聞きく

吾われ比ひ女め神がみの案あな内ないせむかも

霧きりの海うみの魔ま神がみのすさぶ世よの中なかは

國くに津つ神かみ等たちおびやかされつつ

心こころ安やすく住すまむ望のぞみは無なかりけり

曲ま津つの荒あびの絶たえぬ限かぎりは

比ひ女め神がみに從したがひ曲ま津つを言こと向むけて

國くに津つ神かみ等たちの安やすきをまもらむ

朝あ香さ比ひ女めの神がみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

主すの神かみと銳う敏な鳴り出づの神かみの守まもりあれば
如い何かなる曲ま津つも吾われは恐おそれじ

狭野彦よ心安けくあれよかし

生言靈にさやる曲津なれば

主の神の清き御水火に生れたる

わが言靈は光なりせば

曲神は光を恐れ常闇を

永久の棲處と猛り狂ふも

曲神の籠れる島に打ち渡り

この天界を清めむとぞ思ふ

月も日も曲津神の水火に閉されて

地上に光の届かぬ世なり

眞つ先に醜の雲霧吹き拂ひ

月日の光を地上に照らさむ

面白き天界の旅を重ねつつ

樂しみ深き吾なりにけり

八十曲津力限りに刃向ふも

われには言靈劍ありけり

鋭敏鳴出の神の守りに吾伊行く

道の隈手は安けかるべし

上も下も右も左も雲湧きて

薄ら寒かり初夏の空は

漸くにして朝香比女の神は、非時深霧の籠むる八十曲津見の永久の棲處なる、

霧の海の岸邊に着かせ給へば、主の大神の大神言以て、比女神の征途を守り補く

べく待ち構へ居たる五柱の神は、比女神の出でましを今や遅しと待構へ居給ひけ

る。其神々の御名は初頭比古の神、起立比古の神、立世比女の神、天中比古の神、

天晴比女の神にましましける。

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

久方ひさかたの高地たかちほやま秀山ゆ降りくだます

比女神ひめがみむか迎むかふと待まち居ゐたるはや

主スの神かみの神言みことかしこ畏こみ比女神ひめがみを

守まもり補たすくとわれは待まちつつ

われこそは初頭うぶが比古みひこの神司かむつかさ

朝香比女神あさかひめがみの御前みまへに仕つかへむ

霧きりの海うみの曲神まがみの數かずは五月さば蠅へなして

言ことむ向け和やはさむ神業わざの難むづかし

朝香比女神あさかひめがみの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。

神々かみがみの眞言まことの諫いさめ踏ふみにじり

來きたりしわれをまもらかみす神かみはも

主スの神かみの恵めぐみの深ふかさ今いまとなりて

われは嬉しく覺らひにけり

初頭比古の神々等よ聞し召せ

われは顯津男神の御樋代よ

大野原駒に跨り曲神の

艱み拂ひて此處に來しはや

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

健氣なる朝香比女の神の雄心に

主の大神の御言葉くだりぬ

力なき吾にはあれど朝香比女の

神よ御供に仕はせ給へ

何事も吾起立の神なれば

比女に艱みをかけじと思ふ

主スの神かみの才ご聲ゑに生あれし吾われなれば

心こころ許ゆるして御み供ともに召めしませ

起お立き比た古ひの神かみは朝あ夕ゆ々々起おき立たちて

天あ津ま日つの光ひにかけよみがへるなり ㊦

朝あ香さ比か女ひの神かみは御み歌う詠たませ給たまふ。

㊦ 起お立き比た古ひの神かみいますとは聞きながら

珍めづしき國くにに逢あひにけらしな

起お立き比た古ひの神かみの功いはかなてより

高た地か秀ちの宮みや居やにありて聞き居ゐし

起お立き比た古ひの神かみの守まもりのある上うは

われは勇いみて進すすみ行ゆくべし

未まだ稚わかき國くに土つを包つつみし雲くも霧きりも

起立比古とともに拂はむ

あらたふと主の大神は吾爲に

かかる尊き神を生ませり

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

吾こそは榮城の宮居に仕へたる

立世比女の神恵ませたまへ

朝香比女神の御供に側近く

侍りて神業に仕へまつらむ

朝夕に四方に雲霧立世比女の

神の力に拂ふ術なき

朝香比女神の現れます今日よりは

四方に塞がる雲霧晴れなむ

主スの神かみの工ご聲こゑの言こと靈たまに生なり出いでし

われは愛エロスを守まもる神かみはや

朝あさ香か比ひ女め神かみの神かみ言ことの顔かむばせを

清きよく守まもりて永と久はに盡つくさむ

いつまでも其その顔かむばせの若わか々わかしさを

守まもり仕つかへむ愛エロス神かみわれは

顯あき津つ男をの神かみに見み合あはせ給たまふ折をりは

一ひと入しほ清きよく美うるはしく守まもらむ

御み子こ生うみの神かみ業わざに仕つかふる比ひ女め神かみの

清きよき尊たふとき御み姿すがた守まもりてむ

朝あさ香か比ひ女めの神かみは再ふたび御み歌うた詠よませ給たまふ。

立た世つよ比ひ女め神かみの現あれまます今け日ふよりは

吾われは一人ひとしほ若わかやぎ生きむ

願ねがはくは吾われのみならず神々かみがみの

眉み目め容かたち姿たちまで清きよく守もりませ
『

天あめ中な比か古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☐ 吾われこそは主すの大神おほかみの御依みよさしに

筑つくし紫しの宮居みやをはるばる出いで來こし

幾いく萬まん里りの荒野あらのを涉わたり先立さきだちて

比ひ女め神がみ守もると此處ここに來こしはや

朝あさ夕ゆふを霧きり立たち昇のぼる霧きりの海うみの

曲津まがを退やらふと此處ここに來きつるも

朝香あさ比か女ひめ神かみの言靈ことたま補おぎひて

霧きりの海原うなばらを清きよめ澄すまさむ

果^{はて}しなきこの海原^{うなばら}に浮^{うか}びたる
島^{しま}の悉^{ことごと}魔神^{まがみ}の棲^す處^{みか}よ
□

朝^{あさ}香^か比^ひ女^めの神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。
□

□ 天^{あめ}中^な比^か古^ひ神^この御^{おん}名^なはかねて聞^きけど
□

今^け日^ふを初^{はじ}めて見^まみえけるはや

雄^を々^をしくて優^{やさ}しくいます汝^{なが}神^{かみ}の

進^{すす}まむ道^{みち}に曲^ま津^がなかるべし

吾^{われ}は今^{いま}力^{ちから}の神^{かみ}を得^えたりけり

八^や十^そ曲^ま津^が見^みを言^{こと}向^むけ和^{やは}すと
□

天^{あめ}晴^は比^れ女^{ひめ}の神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。
□

☐ 朝香比女神の神言の出でましと

聞きつつ吾は勇みて待てる

主の神の八聲の言靈鳴り鳴りて

筑紫の宮居に生れし吾なり

魔の海に叢る雲霧吹き拂ひ

此處に天晴比女神とならむ

朝香比女神の神言の草枕

旅なる空を晴らし仕へむ

朝香比女神の神は笑を湛へて御歌詠ませ給ふ。

☐ さやけおけ天晴比女の神なれば

吾旅守らす神にましける

吾伊行く旅の先々塞がれる

雲霧晴らせよ天晴比女の神

明日されば霧の海原晴らしつつ

曲津見の砦に打寄せ進まむ

言靈の水火を凝らして御舟造り

明日は渡らむ魔の棲む島へ

狹野彦は歌ふ。

稜威高き朝香の比女に仕へ來て

力の神にまたも逢ひぬる

國津神狹野彦は身も魂も

よみがへりつつ勇み立つなり

此處に現れし五柱の神よ國津神の

狹野彦吾を恵ませ給へ

あまつかみむはしら ひとはしら
天津神六柱と一柱の國津神は、霧の海の岸邊に生言靈を各自に奏上し給へば、
たちま あたり
忽ち四邊の巖は大なる御舟となりて、岸邊に軽く浮びける。
ここ かみがみ こま もろとも
茲に神々は駒諸共に此の御舟に乗り移らせ給ひ、四方八方の話に時の移るも知
らで一夜を明し給ひける。

（昭和八・一二・一二 舊一〇・二五 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録）

第三章 狭野の食國（一九三五）

あまつかみくにつかみななはしら
天津神國津神七柱は、磐楠舟に身を寄せ四方八方の珍しき話に時をうつし給ひ
つづ、東雲近くなりければ、この霧の海原に數多棲める百千鳥の囀る聲漸くひび
き渡り、時々大いなる鷺の聲は、神々の耳を敬たしめたりける。
ここに朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 霧きりの海うみの波なみにうかびて吾わが立たてる

東雲しののめの空そらはほの明あかりせり

百千鳥ももちどり啼なく聲こゑさえて霧きりの海うみの

波なみは漸やうやくしののめにけり

天晴あめはれ比女神ひめがみの現あれます今日けふよりは

天津日あまつひの光かげ清きよく照てりまさむ

ほのぼのと明あけ方がた近ちかくなり行ゆきて

俄にはかに吾魂わがたまかがやき初そめたり☐

初頭うぶがみ比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☐ 東雲しののめの空そらほの明あかりつつ霧きりの海うみの

霧きりはつぎつぎうすらぎにけり

朝香あさか比女神ひめがみの光ひかりに霧きりの海うみの

霧は御空にうすらぎ消ゆるも

東の空ほのぼのと明らみぬ

やがて昇らむ天津日の神は

明け方の舟に浮びて吾魂は

よみがへりつつ澄みきらひたり

曲津神の永久にひそめる霧の海の

島ことごとく言向けやはさむ

いさぎよき朝香の比女の御尾前に

仕へてわれは功を立てなむ

アの聲の生言靈に現はれし

初頭比古吾は力なりけり

限りなき水火の力を現はして

曲津の砦を碎き破らむ

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

東の空明らみぬいざさらば

起立の神言宣らむ

天界は生言靈に生りし國土よ

朝な夕なを神言宣らむ

一日だも神言の水火忘れたる

日は曲津見の襲ひ來るも

非時に生言靈を宣りつづけ

醜の砦に向ひて進まむ

もうもうと霧立ちのぼる海原を

明し進まむ起立の神吾は

東の雲霧わけて天津日は

大地の限り照らして昇れり

やうやくに諸神等の言靈の

水火幸ひて天晴れにけり

この海を十重に二十重に包みたる

霧うせにつつ天晴れにけり

わが水火は幸ひ助けて大空に

天照り渡らす日の大御神よ

斯くならば如何なる曲津の潜むとも

伊吹きに拂はむ生言靈に

四方八方を包みし雲霧晴れにつつ

見渡す限り光の野邊なり

果てしなき霧の海原に浮びたる

島ことごとく目にうつりけり

いや先きに蟻の棲むとふ魔の島に

舟漕ぎよせて上らむとぞ思ふ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

㊦ 朝香比女神を守りて立世比女吾は

生言靈に水火を放たむ

吾舟は次第々々に魔の島を

指して進めり岸とほみかも

艚も楫もなけれど生ける言靈に

進み行くこそ不思議なるかも

西北の風吹き起りわが舟は

魔の島さして進み行くなり

駒よりも形大いなる蟻の群

魔の浮き島に集へりと聞く

狭野彦は歌ふ。

□ 大いなる蟻の棲むてふ魔の島は
容易に近づき得ざる島と聞く
さり乍ら力の神々ましませば
今日は安らに島に上らむか□

斯く神々は御歌詠ませ給ふ間もあらず、
數十里の波を渡りて御舟は魔の島近く
着きにける。

ここに朝香比女の神は魔の島を間近に眺めながら、
舟を止めて暫しを休らひ、
島の様子を窺ひ給ひつつ御歌詠ませ給ふ。

□ 黒々と島一面に群がりて

動ける影は蟻にやあるらむ
吾乗れる駒より大なる蟻の群
正しく曲津見の化身なるらむ

この島しまに上あれば忽たちまち數十萬すじふまんの

蟻ありは襲おそはむ驚おどろきにつつ〇

朝香比女あさかひめの神かみは舟ふねの上うへより、御水み火いさわやかに、

曲津神まがつかみの蟻ありと變かはりて寄より集つどふ

この魔まの島しまよ海うみに沈しづまへ

蟻ありよ蟻ありよ姿かげをひそめて消きえ失うせよ

吾われこの島しまを今いまに沈しづめむ〇

斯かく歌うたひ給たまへば、曲津見まがつかみは驚おどろき騒さわぎ、前後ぜんご左右さいうに先さきを争あひ島山しまやまを驅かけ廻めぐる様さま、
百萬ひやくまんの大軍たいぐん一度いちどに襲おそひ來きたりし如ごとく響ひびきを立たて、狼狽らうばいのさまありありと目めに映うつりけ
る。

さてこの魔まの島しまは八十曲津見やそまがつかみの地中ちちうに潛ひそみ、ただ頭あたまのみを水上すゐじやうに浮うかせゐたる

ものにして、あまた 數多のあり 蟻はいづれもまがつ 曲津見のあたま 頭にわけるしらみ 蟲なりける。

朝香あさかひめ 比女のかみ 神は『島しま よ沈しづ め』との 宣の らせしこと 言靈も、一時いちじなん 何のいさを 功もなく、まがつ 曲津神は
ますますくる 狂た ひ立ち、島しま は次第しだい に高たか く浮う き上あ りてまがつ 曲津見のきよたい 巨體は水上すゐじやう に浮う び、め 目鼻
口くち の不ふ 規律きりつ に附ふちやく 着やく せるかほ 顔は雲くも を壓あつ して高たか く、あし 足のひざがしら 膝頭より中した は海かいちゆう 中にあり、そ 其の
大おほ いさ形けいよう 容よう すべからず。カラカラと不ふ 規律きりつ なるはなみ 齒竝くち の口より笑わら ふ聲こゑ は百ひやく 雷らい の一時いちじ
に轟とん くかと思おも はれにける。その聲こゑ、

『ガアー―ハハハハ　ギアー―ハハハハ　ギュー―フフフ　ゲエー―へへへへ
ギョー―ホホホ　ものものしや朝香あさかひめ 比女のかみ 神とはしん 眞の神かみ にあらず、てん 天界かい を偽いつは
るにせがみ 贗神にせがみ ならむ。待ま て、今いま に此この やそま がつみかみ 神がしんりき 神力を現あら はし、ひと 一柱はしら も残のこ らずわが 吾泥どろ
足あし に踏ふ み躡にじ りくれむ。てもさてもこ 心地こち よやな。ギアー―ハハハハ、ギュー―フフ
フフ、ギョー―ホホホホ、さてもさてもいぢらしいものだわい』
と言い ひつつきよだい 巨大きよだい なる口くち よりしはう 四方はつぱう 八方はつぱう に吹ふ き散ち らす唾つばき は瀧たき の如ごと、よ 四方よも 八方やも に散ち り亂みだ
るるさま、何なに ものを以もつ ても言い ひ現あら はし得え ざる光景くわうけい なりき。萬まん 一いち この口くち より出い づる
唾つばき の一い 滴てき だも身み に觸ふ るる時とき は、ぜん 全身しん 固着こちやく して、手て も足あし も動うご く能あた はざるに至いた る、ま 曲ま

津神つかみの魔術ましゆつの奥おくの手てをつくしたるものなりける。

朝香比女あさかひめの神かみは少しすこも恐おそれず、

☐ 曲津見まがつみの神かみの雄猛をとけびものものし

わが生靈いくたまに滅ほろぼしくれむ

汝なれが吹ふく醜しこのみ水い火きは雲くもとなり

霧きりとなりつつこの世よを濁にごせり

一ひと二ふた三み四よ、五いつ六む七な八や九この十たり

曲津見まがつみの神かみよ

巖いはとなれなれこのまま巖いはと

手足てあしも動うごくな口くちも利きくな

曲津神まがつかみの體からだは立巖たていはとなれ

その口鼻くちはなは洞穴ほらあなとなれ

ふた 二つの目玉は池となれ
あり 蟻も蟲もことごとく
つち 土となれなれその土ゆ
くさき 草木は萌えよ花は咲け
かぐ 香具の木の實は非時結べ
むす

ことたまの と言靈宣らせ給へば、
やそまがつつみ 八十曲津見の巨體は其儘海中に固まり、
きよだい 巨大なる巖島と固
められける。

うぶがみひこ 初頭比古の神は驚きの餘り、
おどろ 御歌詠ませ給ふ。

ひめがみ 比女神の生言靈の功績に

まがつつひ 曲津神は遂に巖となりける
しま 島の上に蟻と見えしは曲津見の
あたま 頭に生ふる蟲なりける

比女神の生言靈に閉ぢられて

曲津神は遂に巖となりける

今日よりはこれの巖島に國津神

永久に住ませて拓かせむと思ふ

天界は生言靈の御水火より

成りし國土とは今悟りけり

比女神は御樋代神にましませば

如何なる神業も果し給へり

比女神の神業助くと吾宣りし

生言靈の恥づかしきかな

今日よりは畏れ慎み比女神の

神業謹み仕へむと思ふ

主の神のア聲の言靈に生れし吾も

比女の功に驚きしはや

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 掛巻も畏し朝香比女神の

今日の功におどろきにけり

雲霧を四方に拂ひて魔の島の

曲津神を永久に巖となせり

沼をかため島をかためて比女神は

新しき國土を生ませたまひぬ

魔の島は次第々々にふくれつつ

見る見る草木は生ひ立ちにけり

國津神の永久の住處と比女神は

曲津神の島を固め給ひぬ

今日よりは國津神等の食物を

育つる國土と榮えますらむ

いやらしき曲津神の聲に恥づかしも

われは一時ふるひ居たりし

起立の吾神ながら震ひ立ちて

生言靈も出でざりしはや

主の神ゆ御樋代神と選ばれし

神にしませばかくもありなむ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

かくの如尊き神の側近く

仕ふる吾の幸を思へり

比女神よ立世比女神の眞心を

嘉して永久に仕はせ給へ

吾はいま朝香の比女に仕へむと

樂たのしみ待まちし女めが神みなるはや」

天あめ中な比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐
比ひ女め神がの生いく言こと靈たまに固かたまりし

この島しまヶ根がに舟ふね寄よせむかな

大おほいなる蟻ありと見みえしは曲ま津が神かみの

頭あたまにわける蝨しらみなりしか

斯かくならば一ひと度たび島しまに上あり行ゆきて

生いく言こと靈たまの種たねを時まかばや

朝あさ香か比ひ女めの神かみよ許ゆるさせ給たまへかし

草くさ木きの種たねを吾われ時まかむと思おもふ」

朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み歌うたもて答こたへ給たまふ。

☐ 天中比古神の神言にこの島の

總てをまかせて國土拓かせむ

この島は周圍百里に餘る相當に廣き島なりける。ここに天中比古の神は國津神
狹野彦を譲り受け、諸々の草木五穀を生言靈に生み出でましつ、遂に狹野の食
國を生み出で給ひ、永久に鎮まり給ひける。

(昭和八・一二・一二 舊一〇・二五 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録)

第四章 狹野の島生み(一九三六)

神々は朝香比女の神の生言靈の功に、いたく感じ給ひつつ讚美の御歌詠ませ給
ふ。

初頭比古の神の御歌。

☐ 掛かけ巻まくも綾あやに畏かしこき朝香比女あさかひめの

神かみの言こと靈たまに曲津まがは亡ほろびぬ

曲津神まがの災わざはひせむと待まち居ゐたる

島しまは忽たちまち天國みくにとなりける

善よき事ことに曲事まがこといつき曲事まがことに

善よき事こといつく神世かみよなりける

御樋代みひしろの神かみと現あれます朝香比女あさかひめの

神かみの功いさをに戦をのきにけり

曲津見まがは力ちからの限かぎりを搾しぼり出だして

魔まの島しまヶ根がねとなり居ゐたりける

朝香比女あさかひめ神かみは曲津まがの奸計たくらみを

悟さとりて言こと靈たま宣のらせ給たまひぬ

魔まの島しまも比女ひめの神言みことに敵てきし得えず

宣のらすがままに固かたまりにけり

八柱やはしらの御樋みひしろ代神がみの中なかにして

朝香あさかの比女ひめは勝すぐれましけむ

かくの如ごと生言靈いくことたまの光ひかりある

比女ひめ神がみこそは御樋みひしろ代なるよ

御樋みひしろ代と御名みな負おひませる功績いさをしは

生言靈いくことたまに現あられにけり

アこゑの聲こゑの生言靈いくことたまに生あれ出いでし

われ驚おどろきぬ比女ひめの光ひかりに

海原うなばらを包つつみし雲霧くもぎり晴はれにつつ

目路めぢの限かぎりは波なみかがやけり

魔まの島しまは次第しだい々しだいに擴ひろがりて

天界みくにの光ひかりとなりにけらしな

曲津まがつかみ神の潛ひそみし島しまも比女ひめ神がみの

御水み火いきに生いきて光ひかり充みつるも

今日よりは樹々の木の實も穀物も

いや茂らひて神を生かさむ

國津神の永久の樂土と今日よりは

生れ出でにけり狹野の島ヶ根

魔の島の名を改めて狹野の島と

朝香の比女は名を賜ひけり

朝香比女神の功に包まれて

わが神魂さへかがやきにけり

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

狹野の島の真中に立てる山脈は

今日より朝日の山となりけり

朝日照り夕日輝く朝日山に

生おふる草くさ木きは永と久はに榮さえむ

駿はや馬こまの丈たけより高たかき黒くろき蟻ありの

姿すがたはいづく跡あとかたもなし

曲まが津かみ神かしろの頭しらみの蝨すがたの姿すがたぞと

聞ききてゆわれは驚おどろきにけり

魔まの化け身しん蟻ありの棲すみたる浮うき島しまも

生いく言こと靈たまに天み界くにとなりけり

國く土にを生うみ國くに魂たま神がみを生うまさむと

旅たびに立たたせる比ひ女めの功いさをよ

比ひ女め神がみの功いさをは今いまや目まの前あたり

狹さ野ぬの島しま根ねに拜をろがみにけり

天あめ中な比ひ古こ神かみ永と久はに鎮しづまりて

狹さ野ぬ彦ひこの神かみと世よを拓ひらきませ

國く土にを生うみ八や十そ島しまを生うみ國くに魂たまを

生うみます旅たひを尊たふとしと思おもふ

御み樋ひ代しろは八十やそは柱しらませど比ひ女めの如ごと

雄を々をしき神かみはなしと思おもふも

眉み目め容かたち姿うるは美はしき朝あさ香か比ひ女め神がみの

貴うづの言こと靈たま澄すみきらへるも

立た世つよ比ひ女め神かみの神み言ことの側そば近ちかく

侍はべらしまして光ひかりますらむ

久ひさ方かたの御み空そらは清きよく澄すみきらひ

朝あさ日ひは照てれり生いく言こと靈たまに

かかくの如ごと天あま津つ日ひののかかげ照てり渡わたる

天み界くにに曲ま津がは影かげを止とどめじ

今け日ふよりは國くに津つ神かみ等たち悉ことく

世よを樂たのしみて立たち働はたらかむ

山やまも海うみも生いく言こと靈たまの幸さちひに

榮え果てなき神の食國よ

波の秀を右や左に飛びかひて

百鳥千鳥も世をうたふなり

大空の晴れ渡りしゆ眞鶴は

翼揃へて舞ひ遊ぶなり

鳳凰は翼を朝日にかがやかせ

わが頭邊を靜かに舞へるも

大いなる鷺の一群雲の如

伊渡り來りて御空に勇めり

晝月の光さへ白く冴えにつつ

狹野の天界の榮えを照らせり

朝香比女神の御水火に生れたる

この神島は榮え果て無けむ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

わが公は四方の天地を包みたる

醜の雲霧拂はせ給へり

榮城山神の御水火に生れたる

われは工聲の愛の神なり

わが公の御身の廻りを朝夕に

守りて其の美を保たせまつらむ

何時までも花の粧ひ顔を

保たせ給へと朝夕守らむ

顯津男の御前に進ますわが公の

若き姿を照らし守らな

幾萬年の末の末までやさ姿

このまま若く居ませと祈るも

朝夕あさゆふに生言いくことたま靈たまを宣のりあげて
公きみの若わかさを永と久はに守まもらむ
立世たつよ比ひ女神めがみの神言みことは神々かみがみの
よき面おもざしを守まもる神かみなり
𠄎

天中あめなか比古かひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。
。

𠄎
御樋みひ代しろ神がみ生言いくことたま靈たまに定さだまりし

狭野さぬの島しま根ねは清きよく生うまれし

狭野さぬの島しまの柱はしらとわれは任まけられて

永と久こしへに世よをひらく樂たのしさ

比ひ女神めがみの生言いくことたま靈たまに生うまれたる

この狭野さぬ島しまを清きよく守まもらむ

國津くにつ神かみ狭野さぬ彦ひこあれば百も千ち々の

種たねを隈くまなく蒔まきて育そだてむ

朝香比女神あさかひめかみの神言みことの御供みともせむと

思おもへど詮せん無なきわれとなりけり

永とこしへ久のちたもの命保いのちたもちてこの島しまの

主あるじと仕つかへ光ひかりとならむ

曲津見まがつみの頭かしらに生おひし大おほ蟻ありも

今いまは残のこらず土つちとなりける

この島しまの土つちはことごとく黒くろけれど

やがて拓ひらかば眞ま土つちとならむ

幾いく萬まんの蟻ありはことごとく土つちとなりて

狭野さぬの島根しまねの肥料こやしとならむか

地つち稚わかく國くに土つち稚わかけれど言こと靈たまの

水い火きを凝こらして固かためひらかむ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 主の神の帕聲になりしわれ故に

天晴比女の神といふなり

大空はパツと明るくなりけり

四方を包みし雲霧はれにつ

朝香比女御樋代神に従ひて

われは御空をはらしゆくべし

地稚き稚國原は霧たちて

八十の曲津の棲處にはよき

霧こむる稚國原をことごとく

パの言靈にはらし進まむ

限りなき尊き神の御恵みに

天晴比女と生れしわれなり

天^{あめ}も地^{つち}も清^{きよ}くはらして御^み尾^を前^{さき}に

仕^{つか}へまつらむ神^み業^{わざ}たすくと

勇^{いさ}ましくやさしくいます御^み樋^ひ代^{しろ}神^{がみ}の

生^{いく}言^{こと}靈^{たま}は光^{ひか}りなりけり

六^{りく}合^{がふ}を照^てらし清^{きよ}むる比^ひ女^め神^{がみ}の

水^い火^きの力^{ちから}にさやるものなし

心^{こころ}清^{きよ}く神^み魂^{たま}の清^{きよ}き比^ひ女^め神^{がみ}の

御^み水^い火^きは光^{ひか}りとなりて出^いづるも

か^かくの如^{ごと}尊^{たふと}き神^{かみ}は天^{あめ}地^{つち}の

中^{なか}にあらじとかしこみ敬^{つや}ふ

天^{あめ}地^{つち}を晴^はらし清^{きよ}むるわれながら

御^み樋^ひ代^{しろ}神^{がみ}の光^{ひか}りに劣^{おと}れり

主^すの神^{かみ}ゆ御^み樋^ひ代^{しろ}神^{がみ}と選^{えら}まれしは

實^げに實^{じつ}に宜^うべよと悟^{さと}らひにけり

大いなる國土生みの神業をあちこちに

ひらかせ給ふ比女神かしこし

狹野彦は歌ふ。

天津神の^{なか}中に^{まじ}交はり國津神われは

よき^{ことたま}言靈を^き聞きにつるかも

狹野の島を^{しま}ひらけと^の宣らす^{ことたま}言靈を

われ^{うれ}嬉しみて^{いそ}勤しみ^{つか}仕へむ

狹野の島は^{しま}未だ^{わか}稚ければ天津神

朝^{あさ}な夕^{ゆふ}なに^{ちからそ}力添へ^{たま}給へ

朝香比女神の^{みこと}神言を^{かしこ}畏みて

束^{つか}の間^まさへも^{わす}忘れず^{つと}勤めむ

この島に^{しま}國津神^{くにつかみ}々^{がみ}移し^{うつ}植^うゑて

清き天界をひらかむと思ふ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

諸神の稱へ言葉を聞ながら

小さき功をわれは恥づるも

御樋代の神と名を負ふ身ながらも

力の足らはぬわれなりにけり

今日よりは諸神等にたすけられて

神業に仕ふと樂しみおもふ

天中比古神は狭野彦を守りつつ

ひらかせ給へ狭野ヶ島根を

朝香比女の神は、かく御歌を詠ませ給ひつつ、
天中比古の神及び國津神狭野彦

をこの島に残し置き、四柱の神等とともに、晴れ渡る霧の海原を順風に送られ、心朗らかに南へ南へと進ませ給ひける。

（昭和八・一二・一二 舊一〇・二五 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録）

第五章 言靈生島（一九三七）

御樋代神と生れませる

朝香比女神の神司

曲神の島を言向けて

狭野の神國を拓きつつ

天中比古神狭野彦を

後に残して四柱の

神を伴ひ海原の

浪おしわけて進みます

御空に天津日照り渡り

晝月のかげしるじると

浪に浮べる真中を

生言靈を宣らせつつ

進すすませ給たまふぞ畏かしこけれ

抑おさ霧きりの海原うなばらは

高たか地ち秀山ほやまより流ながれ落おつ

東あづまの河かはの大流たいりうと

高たか照山てるやまゆ落おちたぎつ

月つきの大たい河がの清流すながれの

西にしと東ひがしゆおちこめる

大おほ海原うなばらにありければ

萬里まの海うみとぞ稱となへられ

數多あまたの島しま々ま暮列くれつして

霧きり立たちのぼり雲くもわきつ

曲津まが見みの棲處すみかにふさはしき。

朝香あさか比女ひめの神かみの乗のらせる御舟みふねは、舷ふなばたに浪なみの鼓つづみを打うちながら、艚ろ楫かいもなきに島々しま々まを、右みぎや左ひだりにくぐりぬけ、周ま圍はり百ひやく里りに餘あまる狭野さぬの島しまも、いつしか眼まな界かひを離はなれける。

朝香あさか比女ひめの神かみは後振あとふりかへり、御空みそらを仰あふぎて御歌みうた詠よませ給たまふ。

仰あふぎ見みれば狭野さぬの食國をすくにやま山々やまは

わが目路めぢ遠とほく消きえ失うせにけり

天中あめなか比古ひこ狭野さぬ彦ひこ今いまはわがいゆく

舟を思ひて吐息つくらむ

われもまた名残惜しけれど神業の

せはしきままに離り來にける

空を行く百の翼よ心あらば

狭野の島根にわが心傳へよ

八千尋の浪を湛へし海原に

浮びてわれは狭野島を思ふ

榮城山狭野の島根はわが爲に

忘らへ難き聖所となりける

一片の雲きれもなき大空を

鷺の翼のひるがへりつつ

雲霧は清くはれつつ百鳥は

月日のかけを仰ぎてたつも

百鳥の翼はことごと輝けり

浪なみにうつりてきらきら光てるも

荒浪あらなみのひと一つだになき此海このうみを

渡わたらふ今日は心晴こころはれつつ

顯津男あきつをの神かみのまします西方にしきたの

國くに土には遙はろけし舟ふねに浮うかびつ

この海うみを東南ひがしみなみに渡わたらひつ

月つきの大河たいがの流ながれを避さけむ

高照山たかてるやまゆ漲みなぎり落おつる月つきの河かはの

水みづは滔たうたう々この海うみに入いるも

百鳥ももどりの空そらたつかげは水底みなそこに

うつりて魚うをの泳およぐが如ごとし

水底みなそこにむらがり棲すめるうるくづも

天津日あまつひの光かげによみがへりけむ

月つきの夜よは一入ひとしほ勇いさまむ海底うなそこの

百もものうろくづ浮うかび出いでつつつつ』

初頭うぶがみひこ比古かみの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。

☐
朝香あさか比女神ひめかみの御供みともに仕つかへつつ

いとめづらしき神みわざみ業わざ見みしはや

比女神ひめがみの造つくり給たまひし狭野さぬの島しまは

影遠かげとほみつつ紫雲しうん棚たなび引ひけり

今日けふよりは狭野さぬの島根しまねも生いき生いきて

紫雲しうん棚たなび引ひき天國みくにとならむ

のたりのたり浪なみに揺ゆられて進すすみ行ゆく

御舟みふねの上うへの静しづかなるかも

天地あめつちの水い火きはことごと清きよまりて

生いきの命いのちのさはやかなるも

われわれは清けき水火を呼吸して

永久とほに天界みくにに住すむべき神かみなり

天地あめつちの水火いきくも曇らへば天津神あまつかみの

命保いのちたまたむ糧かてだにもなし

今日けふよりはこの稚國土わかぐにの雲霧くもぎりを

吹ふき拂はらひつつ水火いきを清きよめむ

水火いききよ清きよき此海原このうなばらに舟浮ふねうけて

顯津男あきつをの神かみの御供みともに進すすまむ

凧なぎ渡わたる大海原おほうなばらの中なかにして

われは樂たのしく比女神ひめがみと語かたらふ

比女神ひめがみの御水火みいきはことごと光ひかりなり

暗くらき心こころのわれは苦くるしも

朝夕あさゆふを御樋代神みひしろがみに仕つかへつつ

言靈ことたまの水火いきを清きよめむとぞ思おもふ

島ヶ根ゆ島に渡らふ百鳥も

鳴く音澄みつつ風清しかり

吹く風もいと清しき海原に

小鳥の聲を聞くは樂しも

見渡せば高地秀山は雲表に

紫雲被りてひそかに覗けり

東の空打ち仰げば高照の

山はかすかに影現はせり

高山と高山の中を渡りゆく

此海原の廣くもあるかな

東河月の大河集めたる

此海原は廣かりにけり

どこまでも御供に仕へ奉らむと

思ひ出だせば樂しかりけり

やすやすと磐楠舟に浮びつつ

紫微天界の國土生みに仕ふ

天も地も風も清めて天界の

國土を固むる國土生みの旅なり

國魂の神を生まむと出で給ふ

朝香比女神の心雄々しも

天界に尊きものは國魂を

清けく生ます神業なりけり

幾萬年末の世までも礎を

固むる爲の神生みなりけり

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

四方八方に朝夕雲霧立世比女の

神かみの心こころも晴はれわたりたり

御み樋ひ代しろの神かみの側そば女めと仕つかへつつ

廣ひろき清すがしき海うな原はらわたるも

榮さか城きやま山うづ貴つづの社やしろを立たち出いでて

今いまは嬉うれしも公きみに仕つかへつ

御み樋ひ代しろの神かみに仕つかへて朝あさ夕ゆふを

笑ゑみ榮さかえつつわれは生いくるも

生いき生いきて亡ほろびを知らぬ天かみ界くにの

今け日ふの旅た路びの幸さち多おほきかも

魔まの島しまは曲ま津が見みの猛たけびに伸のび立たちて

濁にごりし言こと靈たま吐はき出いでにけり

目めも口くちも鼻はなも揃そろはぬ曲ま津が見みの

宣のる言こと靈たまは雷らいの如ごとかり

天あめ地つちを揺ゆるがすばかりの雷らい聲せいも

生言靈いくことたまにことやみにけり

曲神まがかみの姿すがたは忽たちまち巖いはとなり

堅磐かきはとき常磐はの島しまヶ根がねを生うめり

曲神まがかみはわが爲ためにたくみ知しらず識しらず

神かみの神業みわざに仕つかへるらし

朝香あさか比ひ女神めかみの神言みことのおはさずば

此この魔まの島しまは榮さかえざるべし

魔まの島しまは生言靈いくことたまに神島かみしまと

忽たちまち變かはりて水い火き榮さかえつつ

朝香あさか比ひ女め生言靈いくことたまの御光みひかりに

四方よもの雲霧くもぎりあとなく晴はれつつ

かくのごとことたま言靈きよ清きよき比ひ女神めかみの

御供みともに仕つかふと思おもへば嬉うれしも

わがいゆく道みちにさやらむ曲津まがつ見みも

朝香比女の神の御水火に亡びむ

かくの如雄々しき強き美しき

わが公坐ませばこころ安けし

仰ぎ見れば遠の海原にかすみたる

山は正しく白馬ヶ嶽かも

峰高く白雪つもりて永久に

冷たき風を吹きおろす島

仰ぎ見れば白馬ヶ嶽の尾の上より

黒き煙を吐き出でにけり

白馬ヶ嶽わが目に入りて狭野の島

ますます遠くなりにつらしな

漸くに日は傾けど白馬ヶ嶽の

島根はるけし浪をどりつつ

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 大空は眞澄の空と晴れにつつ

高地秀山に日は傾けり

高照の山より出でし天津日は

高地秀山の尾根に近みつ

海風にあほられ荒浪立ちそめて

磐楠舟を左右にゆるすも

此風は八十曲津見のたくみたる

醜のわざかも御舟をさゆらす

如何程に八十曲津見の荒ぶとも

何のものは言靈の旅

曲神は言靈の光恐れつつ

風を起して公に刃向ふ

かく歌ひ給ふ折しも、大海原の浪は刻々に高まり來り、殆んど御舟を呑まむとす。御舟は荒浪の間に木の葉の如く翻弄されつつ海中に漂ふ。朝香比女の神は、平然として御歌詠ませ給ふ。

曲津見はまたも手を替へ品を替へて

わが行く先にさやらむとすも

千丈の浪猛るとも何かあらむ

わが言靈に巖と固めむ。

浪よ浪巖となれなれ浪よ浪

島となれなれ天界は

生言靈の助くる國ぞ

生言靈の天照る國ぞ

生言靈の幸ふ國ぞ生くる國ぞ

巖になれなれ逸早く

島になれなれ片時も

ためらふ事なく固まれよ

かく歌ひ給ふや、伊猛り狂ひし浪は、吹く風にも何のさはりなく、忽ち鋸の齒
の如き嶮峻なる巖山となり、泡立つ小波は眞砂となりて、一つの生島は生れける
ぞ畏けれ。

起立比古の神は驚きて御歌詠ませ給ふ。

今更に比女の神言の言靈の

いみじき功に驚きにけり

天界は言靈の國水火の國と

言ふ理を今悟りけり

狭野の島を生みましましたも巖の島を

今生まします功かしこき

此島は浪の小島と命名けませ

御樋代神の水火に生りせば

此山を鋸山と宣り給へ

頂ことごと尖りてあれば

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

わが宣りし生言靈に生れし島よ

言靈生島とわれは命名けむ

浪の秀は鋸のごとさかしければ

鋸山とわれも命名けむ

初頭比古の神はまたもや驚き給ひて、御歌詠ませ給ふ。

☐ 天晴れ天晴れ浪は忽ち山となり

泡は忽ち眞砂となりぬ

言靈の水火の尊さ今更に

うま怜に悟りぬ初頭比古われは

かくのごと功尊き比女神に

仕へてわが魂ふくれけるかも

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 久方の天津高宮ゆ降りましし

鋭敏鳴出の神の御助けなるらむ

鋭敏鳴出の神は御空にありありと

清きみかげを現はし給ひぬ
比女神の神業を助け守らむと
かげにまします鋭敏鳴出の神はも

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

鋭敏鳴出の神の御水火に守られて

わが言靈は冴え渡りつつ

御姿はたしに見えねど鋭敏鳴出の
神の功のあらはなるかも

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。

海原を御供に仕へまつりつつ

いとめづらしき神業拜むも
天も地も晴れ渡りたる海原に
わき出でにける巖島あはれ
鋭敏鳴出の神の功は海中に
また生島を生み出でにけり

かく神々は各自に御歌詠ませつつ、遙かの空に霞む白馬ヶ嶽の方面さして、舟の舳先を向け給ひける。

（昭和八・一二・一二 舊一〇・二五 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録）

第六章 田族島着陸（一九三八）

伊^{いたけ}猛^{くる}り狂^あふ荒^あ浪^{なみ}を
ものともなさず比^ひ女神^{めがみ}は

生^{いく}言^{こと}靈^{たま}の御^み光^{ひかり}に
忽^{たちま}ち巖^{いは}の島^{しま}となし

泡^{あわ}立^だつ浪^{なみ}は忽^{たちま}ち
島^{しま}の眞^{まさ}砂^ごと變^かへさせて

いみじき功^{いさを}を立^たて給^{たま}ひ
諸^も神^が等^{たち}を驚^{おどろ}かせ

水^い火^きの光^{ひかり}を照^てらしまし
果^はしも知^しらぬ萬^ま里^での海^{うみ}

浪^{なみ}押^おし分^わけて悠^{いう}々^{いう}と
白^は馬^くヶ嶽^がを目^め當^あとし

聲^{こゑ}も清^{すが}しく言^{こと}靈^{たま}の
御^み歌^{うた}を詠^よませ給^{たま}ひつ

進^{すす}ませ給^{たま}ふぞ雄^を々^をしけれ
御^み空^{そら}を渡^{わた}る天^{あま}津^つ日^ひは

高^た地^{かち}秀^ほ山^{やま}の頂^{いた}だき
うすづき給^{たま}ひて山^{やま}影^{かげ}は

萬^ま里^での海^{うな}原^{ばら}襲^{おそ}ひ來^きぬ
冷^{つめ}たき夕^ゆべの海^{うな}風^{かぜ}は

女^め神^{がみ}の御^み舟^{ふね}に襲^{おそ}ひ來^きぬ。

朝^あ香^さ比^か女^{ひめ}の神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

浪なみ高たかき萬ま里での海うな原ばら渡わたり居をれば

高たか地ち秀ほ山やまに陽ひは落おちにけり

高たか地ち秀ほの山やま影かげ遠とほく萬ま里での海うみの

面おもてに黒くろく倒たふれけるかも

百もも鳥どりは埒ねぐら求もとめて島しま々まの

茂しげ樹きの梢つれをさして飛とぶなり

奴ぬ婆ば玉たまの翼つばさの黒くろき夕ゆふ鳥からすは

西にしの島しま根ねをさして急いそぐも

浪なみの音おといや高たからかに響ひびきつつ

わが乗のる舟ふねはさゆらぎにけり

數かず限かぎりなき島しま山やまを縫ぬひて來こし

舟ふねも恵めぐみに恙つつがなかりき

天あま津つ日ひは山やまに沈しづみて月つき讀よみの

光かげはますます冴さえ渡わたるなり

月讀つきよみの清きよき姿すがたを眺ながむれば

わが背せの岐き美みを偲しのばるるかな

御空みそらゆく月つきをし見みれば背せの岐き美みの

清きよき姿すがたの偲しのばるるかな

天津日あまつひはかくろひぬれど月讀つきよみの

御舟みふねは磐楠舟いはくすぶねを照てらせり

月つき牙さゆる大海原おほうなばらを渡わたりゆく

われ國魂くにたまの神かみを生うまむと

百鳥ももどりの聲こゑは聞きこえずなりにけり

ただ潮騒しほざめの音おとのみにして

島々しまじまの岸きし打うつ浪なみは白々しらじらと

しづき立たつなり風かぜのまにまに

滔々たうたうと巖いはヶ根がねを打うつ浪なみしづきの

音おとは一ひと入しほ高たかくなりけり

海うみの面もに匂にほはぬ花はなの咲さき満みちて
わがゆ行く夜よ半はの舟ふねはさやけし
㊦

初頭うぶがみひこ比古かみの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。
。

㊦
萬里まの海うみ早はや黄昏たそがれて潮騒しほざゐの

音おとたかだかと鳴なり響ひびくかも

百鳥ももどりは島しまの茂樹しげきに宿やどをとるか

只ただ一羽いちだも影かげを見みせなく

吾われもまた何いづれの島しまにか舟ふね寄よせて

雨宿あまやどりつつ夢ゆめを結むすばむ

白馬はくばヶ嶽がだけ深雪みゆきは月つきに輝かがきて

霧きりの海原うなばらに影かげをうつせり

音おとにきく白馬はくばヶ嶽がだけの生島いくしまは

白馬しらこま數多あまた群れむ棲むすときく

吾駒わがこまは終日ひねもす舟ふねに乗のせられて

苦くるしかるらむ水みづも飼かはねば

水飼みづかはむ術すべもなきかな萬里まの海うみの

水みづはことごと鹽しほなりにける

起立おきたつひこ比古かみの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

比女ひめが神かみの御供みともに仕つかへて萬里まの海うみに

黄昏たそがれにつつくたびれしはや

曲神まががみの伊いたけ猛けり狂くるふ海わた中に

黄昏たそがれてやる舟ふねは淋さびしも

立世たつよ比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

起立おきたつの神かみの言葉ことばぞあやしけれ

生言靈いくことたまの旅たびにあらずや

さびしみを語かたれば淋さびし樂たのしみを

語かたらば樂たのしき神世かみよなるぞや

言靈ことたまのたすけ幸さちふ國中くになかに

弱音よわねふかすな起立おきたつ比古ひこの神かみ」

起立おきたつ比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

立世たつよ比女ひめ神かみの言靈ことたまうべなうべな

吾言靈われことたまをあやまりにけり

久方ひさかたの月照つきてる夜半よはの海原うなばらは

いと賑にぎはしくかがやきにけり

浪なみの秀ほは花はなと冴さえつつ岸きしを打うつ

潮しほのしづきは玉たまと照てるなり
生いき生いきて吾われは榮さかえむ永とこ久はに

心こころも魂たまも疲つかるることなく

朝あさ香か比ひ女めの神かみの雄を々をしさに比くらぶれば

吾われは小ちひさき弱よわき神かみかも

朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

起おき立たつの神かみの宣のらする言こと靈たまに

萬ま里での海うな原ばらよみかへりぬる

大おほ空そらの星ほしも降くだりて水みな底そこに

光ひかりかかやき給たまふ海うな原ばら

上うへと下したに月つきと星ほしとを眺ながめつつ

わが行ゆく舟ふねは天あまの鳥とり船ぶねよ

斯かくの如ごと美うらしき海うみの浪なみの上へを
月つきに照てらされ行ゆくは樂たのしも
□

天晴あめはれ比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□
白馬はくばヶ嶽影がだけかげはやうやく近ちかみたり

千重ちへの浪路なみぢを遠とほく渡わたりて

海原うなばらの浪なみの頭かしらは百も千も々に

またたきにけり月つきの光ひかりに

右左みぎひだり島根しまねはここだならく竝ならべども

神かみの住すむべき所ところだになし

巖骨いはほねをあらはし島しまは赤あか々と

空行そらゆく月つきのつぎかげをうつつせり

仰あふぎみる白馬はくばヶ嶽がだけは青あを々と

樹木茂れり行きてひらかばや[□]

斯く歌ひつつ漸くにして白馬ヶ嶽の麓に御舟は着きにけり。この島は萬里の島と稱へ、この海原に浮べる島々の中に、最も廣くして地肥えたる貴の島ヶ根なりける。萬里の島には幾千萬ともなき野馬と羊棲息し、未だ一柱の國津神も住みたることなき田族の島にぞありける。

朝香比女の神の一行は船を磯邊に繋ぎ、靜々とのぼり給へば、數多の馬、羊は先をきそひて白馬ヶ嶽の麓をさして逃げ出でにけり。一行は、こんもりと天を封じて立てる楠の大樹の蔭に憩はせながら、各自御歌詠ませ給ふ。

萬里の海やうやく渡り月の夜半

田族の島に着きにけるかも

こんもりと空を封じて聳り立つ

楠の樹蔭は月影見えずも

この島しまにわがのぼり来てき生島いくしまの

草くさの根ねに鳴なく蟲むし聞ききにけり

蟲むしの音ねはいや冴さえにつつ天津日あまつひの

榮さかえを永と久はにうたひつつ居をり

白馬はくばヶ嶽尾がだけの上への雪ゆきは白しろ々と

夜目よめにもしるく輝かがやき渡わたれり

この島しまに群むらがり棲すめる幾萬いくまんの

馬うまと羊ひつじは逃にげ失うせにけむ

土地つち肥こえしこの島しまヶ根がねは百も草もくさの

いや茂しげらひて榮さかえ果はてなき

幾萬いくまんの馬うまと羊ひつじを養やしなふに

足たらふ小を草ぐさの萌もゆる島しまはも

此島このしまに國津神等くにつかみたちのたねうゑて

千代ちよに八千代やちよに拓ひらかせ度たきもの

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

仰ぎみれば白馬ヶ嶽は雲の上に

雪をかぶりてかがやきにけり

浪の音高く聞えて遠つ野に

白馬の嘶き響き渡れり

白駒の嘶き高く千萬の

聲も一つに響かひにけり

この島に吾は御樋代神ますと

おもはれにける駒の嘶きに

白駒の嘶き聞けば天津神の

生言靈の光おぼゆも

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

ㄣ 國津神はただ一柱も住まねども

八十御槌代の神はいまさむ

遠近の野はひらかれて穀物の

生ひ立ちみれば神おはしまさむ

八十柱御槌代神の一つなる

田族比女神の住處なるらむ

明日の日はこの島ふかく進み行きて

御槌代神に言問ひせむかな

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

ㄣ この島に御槌代神のおはしますと

聞けばかしこし言問ひまつらむ

御槌代神これの田族島におはしまして

國魂神を生ます日待たるる^レ

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

萬里の島山野は清く見えながら

谿の狭間に黒雲立つも

黒雲は八十曲津見の水火ならむ

明日は近みて言向け和さむ^レ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

主の神の神言畏み田族比女の

神はこの地に住み給ふべし

顯津男の神の出でまし待ちにつつ

この島ヶ根にひそみ給はむ
『

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。
あめはれひめかみみうたよたま

八十柱御樋代神は只一人
やそはしらみひしろがみただひとり

この廣き島におはしますにや
ひろしまし

この廣き島根に一人おはします
ひろしまねひとり

田族の比女神は淋しかるらむ
たからひめがみさび

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。
あさかひめかみみうたよたま

十柱の貴の神たち從へて
とほしらうづかみしたが

鎮まりいまさむ御樋代神は
しづみまさむみひしろがみ

ともかくも夜の明くるまでこの森に
よあもり

安く眠らむ潮騒聞きつつ
』

馬に跨り進み來りこの森の蔭に駒を止め、
斯く歌はせ給ふ折しも、何處よりか輪守比古の神、
若春比古の神の二柱は、白

かしこけれど言とひ奉らむこの森に

いますは朝香比女神にまさずや

田族比女神の神言をかしこみて

吾二柱伊迎へまつるも
』

朝香比女の神は御歌もて答へ給ふ。

二柱神に申さむ吾こそは
朝香の比女よ御樋代神よ

霧きりこむる萬里までの海原うなばら晴らしつつ
これの島根しまねに今來いまきつるはや」

若春わかはる比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

待まち待まちし朝香あさかの比女ひめの御姿みすがたを

拜をろがむ今宵こよひぞ尊たふとかりける

いざさらば御樋みひしろ代神がみよ諸神ももがみよ

案内あないをなさむ比女ひめの館やかたへ

吾われこそは田族たから比女ひめの神かみに仕つかへ奉まつる

若春わかはる比古ひこの神司かむつかさなり

今いまここに現あらはれ來きたりし一柱ひとしらは

輪守わもりの比古ひこの神司かむつかさなるよ

いざさらば館やかたに案内あない仕つからむ

早はや立たたせませ比ひ女神めがみ諸も神がみ 𠩺

朝あ香さ比か女ひめの神かみは、

𠩺 いざさらば若わか春かはる比ひ古この宣のり言ことに
從したがひ吾われは御みや館かたに進すすまむ 𠩺

とい言いふより早はやく白しら馬こまに跨またり給たまへば、初う頭ぶが比み古ひこの神かみ、起お立きた比つ古ひこの神かみ、立た世つよ比ひ女めの神かみ、
天あ晴め比れ女ひめの神かみの四よ柱はしらの神かみは、ひらりと駒こまに跨またり、月つき照てる夜よ半はの野の路ぢを轡くつわを揃そろへて
進すすませ給たまふぞ畏かしこけれ。

(昭和八・一二・一二 舊一〇・二五 於大坂分院蒼雲閣 内崎照代謹録)

第二篇 十一神將

第七章 萬里平定（一九三九）

天津高宮に鎮まりいます主の大神は、七十五聲の言靈を間斷なく鳴り出で給ひて、泥海の世界を固むべく、先づ初めに當りて、筑紫ヶ嶽、高地秀の峰、高照山の三大高山を生み給ひて後萬里の海に無數の島々をなり出で給ひて、總ての生物を生ませ養ひ給ふべく經綸されたり。

其の最初に當りて萬里の海の中心なる萬里の島を生り出で給ひぬ。此島は面積約八千方里にして、西に白馬ヶ嶽あり、東に牛頭ヶ峰あり、其の中心を流るる清川を萬里の河と言ふ。

大神は先づ此島にツの言靈を鳴り出でて鼠を生みたまひ、クの言靈を鳴り出でたまひて蛙を生み出でたまひける。鼠と雖も未だ地稚く、國土調はざりし時代な

れば、今日の牛よりも大きく、蛙と雖も現代の人間よりは體軀長大なりしなり。
其他神人をはじめ、總ての動物は之に準じて知るべきなり。蛙は此島に幾百千萬
とも限りなく發生し、鼠又日に日に其數を増しつつ土地最も肥えたる此島の全部
に棲みて、總ての穀物の耕作に従事し生活を續け居たり。鼠は田を鋤き、蛙は鋤
鍬をもちて田畑を拓き、穀物を作りて生活を樂しみ居たりける。
此の島の司として主の大神は、頭に太陽の形を印したる赤き紋を頂ける丹頂の
鶴を一番下し給ひける。此の鶴は天津高宮より御空を翔りて萬里の島ヶ根に飛び
來り、萬里河の傍なる小高き丘の上に、鬱蒼として聳え立ちたる一本の常磐の松
に巢籠り、數多の子を生み育て此島の主として臨む事とはなりぬ。
さりながら、朝夕の區別なく此の島ヶ根は雲霧塞がり、殆ど咫尺を辨ぜざるに
至り、天に日月輝きわたると雖も、中空の雲と地上に燃え立つ深霧の爲めに陽氣
寒く、萬物の發育も亦充分ならざりにける。陰鬱の氣は次第々に凝結して、種々
の曲津見發生し、白馬ヶ嶽の谷間には太刀膚の惡龍數多棲み、大蛇又彼方此方の
谷間に潛みて非時毒煙を吐きければ、其の毒煙は雲となり霧となりて、萬里ヶ島

に住める蛙の一族は生活を脅かされ遂には其の数を減ずるに至りたり。邪氣は次第に凝りて、數限りなき鷲となり山猫となりて狂ひ廻り、鷲は蛙を餌食とし、山猫は鼠を餌食となして猛り狂ふ慘状は、目も當てられぬばかりなりける。然れども、蛙と鼠の一族の中に、朝夕を主の大神に祈り真心の限りを盡して仕へまつれる種族のみは、神の恵によりて、僅に其の種族の存在を保ち、戦々競々としながらも春夏秋冬の耕作に従事し居たりける。

主の大神は此の慘状を遙かに覽はして、龍蛇、鷲等の獰猛なる動物を制御すべく、牛、馬、鷹、虎、狼、獅子等を此島に産み生はせたまひ、惡龍、大蛇、鷲の暴虐を懲らしめたまひけるが、年を経るに従ひて、虎、狼、獅子、熊などの猛獸は遂に龍蛇の種族を亡ぼし、鷲の種族をも殲滅せむとしたりけるが、鷲は大なる翼の持主なれば、地上の動物の如何ともなし難く、鷹をもつて空中よりの害を防ぐより方法なかりける。然りながら如何に勇猛なる鷹と雖も、十數倍の翼を保ち大力を有する鷲に對しては如何とも制裁の道なかりける。

虎、狼、獅子、熊、鷲等は肉食動物なれば、遂には猫、牛、馬、羊、猿等の動

物を餌食となさむとし、晝夜間斷なく争鬪の慘劇を續け、收拾すべからざるに至りたれば、主の大神は茲に大なる猪の群と犬の群とを下して、これ等の猛獸を制すべく當らせ給ひたるにぞ、牛、馬の族は稍小康を得て牛は牛頭ヶ峰に難をさけ、馬は白馬ヶ嶽に難を避けて兩山の周圍は馬と牛にて充滿するに至りける。遠方より之を眺むれば、白馬の集ひたる白馬ヶ嶽は雪に包まれたるが如く、黒き牛の集まれる牛頭ヶ峰は恰も墨の山の如く見えにける。

茲に主の大神は、如何にもして此の美しき萬里の島を永久の樂園に定めむと思召し、八十柱の御槌代神の中にて最も神力強き田族比女の神に、ウの言靈より生れ出でし若春比古の神、又聲の言靈より生り出でし保宗比古の神、又聲の言靈より生り出でし直道比古の神、又聲の言靈より生り出でし千貝比女の神、又聲の言靈より生り出でし正道比古の神、又聲の言靈より生り出でし輪守比古の神、又聲の言靈より生り出でし雲川比古の神、又聲の言靈より生り出でし靈山比古の神の十柱神を従へて、萬里の島を守るべく下したまひける。

此の神々の御降臨によりて、萬里の島の天地を掻き廻し、亂し盡したる虎、狼、獅子、熊、鷲の輩は、命辛々島より島に渡りて逃げ失せたれば、暫時の間は小康を得て、蛙と鼠は元の如く耕作に従事し、其の生活を樂しむに至りぬ。犬は蛙の家居を守り、猪は鼠の安全を守り、夕ざれば山に入りて木の葉を喰ひ、各も各も業を樂しみ居たりける。

茲に彌々丹頂の鶴は常磐樹に平安の生を保ち、猿をつかひて萬里ヶ島の平安を守り居たりける。さりながら主の大神より天降し給へる田族比女の神其他十柱の從神等の恩徳を知らず、却つて我國土を掠奪すべく來りしものとなし、晝夜嫉視の眼を放たざりける。

鳥はスの靈にして猿はズの靈なり。猿は鶴の幕下として常に其勢力を増大し、驕慢の氣起り遂には鶴の如く樹の上に棲み、其の座席迄も汚さむと勤むるにいたりたり。又蛙に對して暴虐限りなく擅に虐げければ、やうやく小康を得たる萬里の島は忽擾亂の巷と化し、數萬の蛙の鳴き叫ぶ聲は天地に響き、其の慘状譬ふるに物なかりける。

茲こゝに於おいて蛙かはすの保ほ護ごに任にんじたる犬いぬと猪いのししは山やまより野のより群むらがり來きたりて、蛙かはす等などの味み方かたとなり、猿さるの群むれに向むかつて戦たたかひを挑いどみ、遂つひに其その大おほ猿ざるの群むれは殆ほとんど噛かみ殺ころさるるに至いたりける。此この慘さん状じやうを窺うかがひ知しりたる鷲わし、獅子しし、熊くま等などの惡あく鳥てう、猛まう獸じうは此この期き逸いつすべからずとなし、空そらより地つちより海うみより一いつ齊せいに迫せまり來きたりて、此この島しまに於おける一切いっさいの動どう物ぶつを殲せん滅めつせしめたり。然しかれども主すの大おほ神かみの神み言ことをかしこみて田た族から比ひ女めの神かみ其その他たの神かみ々がみは、萬ま里での島しまの主あるしと定さだまれる鶴つるの一いち族ぞくと牛ぎう馬ば羊やうの一いち族ぞくを守まもり給たまひければ、これ等らの動どう物ぶつは幸さいに惡あく鳥てう猛まう獸じうの殘ざん虐ぎやくの手てを免まぬるるに至いたりたるぞ畏かしこまれ。

主すの神かみの神み言こと畏かしこみ田た族から比ひ女めの

神かみ天あ降もらせし萬ま里での島しまかも

十と柱はしらの神かみを從したがへ田た族から比ひ女め

神かみは光ひかりとなりて天あ降もれり

四よ方も八や方もの雲くも霧きり拂はらひ惡あしき鳥とり

猛たけき獸けものも滅ほろび失うせぬる

埴安の神と現はれし田族比女の

御樋代神は救ひ主はも

田族比女神の御樋代天降りしゆ

萬里の島根はよみがへりたり

田族比女この萬里島に天降りまして

朝な夕なに神言宣らせり

十柱の神も御後に従ひて

楔を修め神言宣らせり

馬と牛犬と猪とを世に残し

此生島を守らせ給ひぬ

丹頂の鶴は常磐の松ヶ枝に

千代ことほぎて神世あれましぬ

鷲熊も虎狼も獅子王も

この生島は近よらざりけり

(昭和八・一二・一三 舊一〇・二六 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録)

第八章 征魔の出陣(一九四〇)

田族比女の神及び十柱の神の降臨に依りて萬里の島ヶ根は治まりつれども、未
だ白馬ヶ嶽の谷間には、非時黒雲立ち昇り折々天に塞がり、日月の光を隠し暴風
雨を起して國土を荒すこと再三再四なりければ、先づ此の曲津見を征服せむと、
田族比女の神は十柱の神を率ゐて萬里の丘を立出で、白馬ヶ嶽の龍神のすめる深
谷を指して出で立たさむとして、御歌詠ませ給ふ。

主の神の御稜威に清く治まりし
萬里ヶ島根に曲津の潛めるか
白馬ヶ嶽谷間に立ちたつ黒雲は

曲津見の水火か天を包める
雨風を折々起して萬里の島の

木草を艱むる曲津滅さむ

十柱の神を従へ今よりは

曲の砦に吾進むべし

主の神の依さし給ひし萬里の島を

心安國とよみがへらせむ

輪守比古の神は御供に仕へむとして御歌詠ませ給ふ。

比女神の神言畏し吾こそは

十柱神の御尾前守らむ

谷深く潜める曲津は龍神か

大蛇か非時毒氣吐くかも

毒氣あしきいき非時ときじく吐はきてこの島しまに

災わざはひを爲なす神かみを譴責きためむ
□

靈山たまやま比古まひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□
果はてしなき此神國このかみにに潛ひそみ居ゐる

魔神まがみの在處あrikaを攻せめ滅ほろぼさむ

久方ひさかたの御空みそらの月日つきひを隱かくしつつ

邪氣じやき漲みなぎらす醜しこの曲神まがみよ

御樋代みひしろの神かみの天降あもりし此島このしまに

曲神まがみ潛ひそむとは吾心われこころ得えず

さりながら朝あさな夕ゆふなに毒氣あしきいきを

吐はきつつ空そらに黒雲くろくも起おこすも

黒雲くろくもは天てんに塞ふさがり地ちを這はひて

この食國をすくにを朝夕あさゆふ汚すもけが ㊦

若春わかはる比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給ふ。
たま

㊦ 八千草やちぐさの花はなも曲津まがみ見みの毒氣あしきいきに

艱なやまされつつ咲さき菱しほむなり

非時ときじくに實みのりし島しまの木この實みさへ

蟲むしに食くはれて實みのらず落おちつつ

此島このしまは常春とこはるの國くにと聞ききつれど

曲津まがみの荒すさびに冬心ふゆご地こちすも

黒雲くろくもの中なかに紛まぎれて丹頂たんぢやうの

鶴つるは御空みそらに迷まよひ飛とぶなり ㊦

保宗もちむね比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給ふ。
たま

此島に久しく棲みし百蛙の

日に日に影を潜むる憐れさ

荒金の土を耕す鼠蛙は

曲神の水火に滅び失せつつ

猪も犬も月日重ねて其數の

少くなりしも曲津見の爲なり

曲津見の害を除きて萬里の島の

百の蛙を助けたく思ふ

御樋代の神に従ひ白馬ヶ嶽の

谷間の大蛇を言向けてみむ

直道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

主の神の定め給ひし天地の

正しき道に刃向ふ曲津なし

言靈の眞言の劍振り翳し

斬りはふりてむ醜の曲津見を

言靈の功に生りし天地よ

生言靈を恐れぬ曲津は無き

仰ぎ見れば白馬ヶ嶽の谷間より

天に冲する八重の黒雲

山跡比女の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の神の眞言に従ひて

白馬ヶ嶽の谷間に進まむ

吾はしも女神なれども言靈の

劍の光に曲津を照らさむ

ひさかた
久方の月日を隠して荒び狂ふ

しこ
醜の曲津を斬り放るべし

とほしら
十柱の神と雄々しく駒竝べて

はくば
白馬の谷に進む樂しさ

とこよ
常世行く暗を晴らして天日を

ひねもすあふ
終日仰ぐ神世となさばや

ゆふ
夕されば月朗かに大空に

かがや
輝き給ふ神世とひらかむ

ちかひひめ
千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

はくば
白馬ヶ嶽千峽八百峽に潛みたる

しこ
醜の曲神の砦に向はむ

しちなんよぢよ
七男四女の神の一行堂々と

進すすむも樂たのし白馬はくばの谷間たにまに
吾わが伊い行く道みちにさやらむ曲神まががみは

躡ためらひ躡ためらひもなく斬きりて放はらむ

山路やまぢ行く道みちの傍かたへの草叢くさむらに

鳴なく蟲むしの音ねも悲かなしかりける

百鳥もとりよ蟲むしよ獸けものよ安やすくあれ

今いまに曲津まが見みの影滅かげほろぶべし

久方ひさかたの天津あまつた高宮たかみやゆ降くだりたる

神かみある限かぎり安やすき國原くにはら

曲神まががみを生言いくことたま靈たまに斬きり拂はらひ

清きよめ澄すまして國土くにを拓ひらかむ

湯結ゆむす比女ひひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

山やまも野のも神かみの靈れい氣きに充みたさるる

此この食を國くにに潛ひそむ曲ま津がはも

曲ま津が見みは黑くろ雲くもとなり霧きりとなり

嵐あらしとなりて荒すさび狂くるふも

萬ま里での島しまに作つくり育そだつる穀たなつもの物ものも

曲ま津がの水い火きに生おひ立たち惡あしし

谷たに深ふかく潛ひそめる曲ま津がを言こと向むけて

心うら安や國すく土にと造つくり固かためむ

神かみ々がみも生いきとし生いける森も羅の萬み象なも

心うら安や國すく土に榮さかえしむべし

正まさ道みち比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

天あめ地つちの神かみの生うみてし言こと靈たまの

眞言まことの道みちに逆さからふものなし
谷たに深ふかく八や十その曲津まがつ見み潜ひそむとも

生言靈いくことたまに斬きり放はりてむ

言靈ことたまの幸さちに生うまれし吾われにして

言靈戰ことたまいくさの門かど出いでなすも

わが魂たまに少すこしの曇くもりある時ときは

生言靈いくことたまも光てらざるべきを

谷川たにがはの清きよき清水しみづに楔みそぎして

吾われは進すすまむ言靈戰ことたまいくさに

御樋代みひしろの神かみの光ひかりを恐おそれずに

潜ひそめる曲津まがつは強したたかものなる

雲くもとなり雨風あめかぜとなり霧きりとなりて

神世みよを曇くもらす曲津まがつ見み憎にくしも

萬里河までがはの源遠みなもとほし白馬はくばヶ嶽がだけの

峰みねに湧わき立たつ雲くもに續つづけば

行ゆき行ゆけど白馬はくばケ嶽がだけは遙はろかなり

駒こまの脚あし竝なみ速はやめて進すすまむ

雲くも川かは比ひ古この神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

御樋みひ代しろの神かみに仕つかへし十柱とほしらの

神かみは言靈ことたま戦いくさの司つかさよ

十柱とほしらの神かみの轡くつわを竝ならべつつ

進すすまむ道みちにさやる曲津まがなし

曲津まが見みの醜しこの司つかさを言靈ことたまの

劍つるぎに斬きりて神世みよを照てらさむ

御樋みひ代しろ神がみの稜威いづの光ひかりに照てらされて

曲津まがの征途きために上のぼる樂たのしさ

斯く神々は曲津見の征途に上らむとして、御歌詠ませつつ各自駒に跨り、輪守
比古の神を先頭に靈山比古の神、若春比古の神、保宗比古の神、直道比古の神を
前供として、田族比女の神を正中に其他の五柱の神、御後邊を守りつつ、黒雲立
ち昇る白馬ヶ嶽の魔棲ヶ谷を指して進ませ給ふぞ雄々しけれ。

(昭和八・一二・一三 舊一〇・二六 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)

第九章 馬上征誦(一九四一)

田族比女の神一行十一柱の神の先頭に仕へます輪守比古の神は、馬上ゆたかに
出陣の首途を祝しながら、御歌詠ませ給ふ。

久方の天津高宮に永久に
紫微天界を領有ぎ給ふ

主スの大神おほかみの神言みこともて
泥どろの海うみより湧わき出いでし
萬里まの島根しまねは神かみの國くに
千代ちよも八千代やちよもとこしへに
榮さかえはてなき神かみの國くにに
群むらり棲すめる惡あしき鷲わしや
猛たけき獸けもののすさびをば
言こと向むけやはすと御樋代みひしろの
田族たからの比女ひめが神降みくだしまし
吾等われら十柱とほしらかみ神等かみたちも
比女ひめに從したがひ天降あもり來きぬ
そのいさをしに萬里まの島しま
鳥獸とけだものの爭あらしひも
今いまや全まくをさまりて

蛙鼠かはねずみはうらやすく
朝あさな夕ゆふなを野のに出いでて
田畑たはたをたがやし穀物たなつもの
種たねを蒔まきつつ培つちかへど
まだ曲津見まがつみの消えやらで
天てんにそびゆる白馬はくばヶ嶽だけの
千峽ちがひ八百峽やほがひにひそみたる
醜しこの曲津見まがつみ太刀膚たちはだの
龍神たつがみ大蛇をろちは今いまもなほ
日ひに夜よに毒氣吐あしきいききて
この生國いくくにの天地あめつちを
くもらせ破やぶり荒あらせつつ
その禍わざはひは日ひに月つきに
重かさなり合あひて常闇とこやみの

神世は再びこの地に

來らむとするうれたさを

憐れみ給ひて御樋代の

神と現れます田族比女の神は

吾等を伴ひ龍神の

ひそめる魔樓ヶ谷さして

進ませ給ふぞ雄々しけれ

ああ惟神々々

生言靈の幸ひに

醜の曲津は影ひそめ

天地にふさがる雲霧は

あとなく晴れて天渡る

月日の光もさわやかに

地上ありとし有るものら

生きとし生けるもの等皆
おとさず残さず御光を
與へ給ひて永久に
守らせ給へと願ぎ奉る
魔樓ヶ谷は深くとも
龍のすさびは猛くとも
吾は恐れじ言靈の
嚴の劍をぬきもちて
斬りはふりつつ天界の
曲津をのこらず掃き清め
神の依さしの樂園と
生かせ守らむ楽しさよ
駒の嘶きいさましく
蹄の音もカツカツと

雲霧迷ふ山麓を

吾等は勇みて進むなり

吾等は勇みて進むなり

靈山比古の神は駒にゆられながら、
靜かに御歌詠ませ給ふ。

御樋代の神の御前に仕へつつ

白馬ヶ嶽の谷間に

深くひそめる曲津見を

言向けやはすと進むなり

天津日の光曇るとも

月の姿は虧くるとも

如何なる魔風のすさぶとも

雲霧行手を包むとも

いかで恐おそれむ言こと靈たまの
主スの大神おほかみの御み水い火きより
分わかれて生あれし吾わが身みなり
そも天かみ界くには言こと靈たまの
水い火きより生あれし國く土になれば
生いく言こと靈たまの助たすけこそ
世よにまさるべきものあらし
進すすめよ進すすめよ十と柱しらの
生いく言こと靈たまの神かみ等たちよ
吾われは言こと靈たまの言こと靈たまの
鳴なりなり出いでて生うま
靈たま山やま比ひ古この神かみぞかし
白はく馬ばケ嶽がも言こと靈たまに
いと清すがしくいと淨きよき

靈たまの神みやま山と化くわせしめむ
魔ますみ棲がヶ谷やつにひそみたる
醜しこの龍たつがみ神を大ろち蛇さへ
言こと向むけやはし或あるは斬きり
或あるはほろぼし萬ま里での島しまを
洗あらひ清きよめて白はく馬ばヶ嶽が嶽だけも
東ひがしにそびゆる牛ご頭づヶ峰が峰ねも
清きよきすがしき靈れい山ざんと
造つくり固かためむいさをしを
今いま更さら思おもひ廻めぐらしつ
胸むねは高たかな鳴なり腕うでうなり
力ちからは全まる身に満みち足たらふ
この勢いきほひを満みたしつ
生いく言こと靈たまを宣のりつれば

如何なる猛き龍神も

大蛇もことごと消え失せむ

ああ樂もしき今日の旅

ああ勇ましき公の御供よ

若春比古の神は御歌詠ませ給ふ。

吾駒は今日の征途に勇めるか

耳をそばだて鼻ならせ

鬣ふるひ八つ房の

長尾を左右に打ちふりつ

鈴の音さへもシヤンシヤンと

蹄の音もいさましく

千里萬里も何のその

踏み破らむず勢いきほひに

百草ももぐさ生ふる山裾路やますそみちを

勢いきほひ猛く進むすすなり

そもそもこれの島ヶ根しまがねは

蛙かはすと鼠ねずみの樂土らくどにて

スことたまの言靈ことたまに生なり出いでし

鶴つるは常磐とぎはの松ヶ枝まつがえに

萬里までがしまヶ島根しまねの司つかさとし

百ももの猿ましらを使つかひつつ

あまたの蛙かはすの生活せいくわつを

守まもり居ゐたりし神かみの國くに

星移ほしうつり年としを閱けみして漸やっやくに

妖邪えうじやの空氣くうきは天地あめつちに

満みちふさがりつ太刀膚たちはだの

龍たつがみ神あら現あらはれその次つぎに
醜しこの大をろち蛇のむれの群むれわきて
この國くに原はらをくもらせつ
日ひに夜よに惡あしき禍わざはひを
下くだしにければ主すの神かみは
猛たけき獸けものを生うみ給たまひ
龍りうと蛇へびとを滅ほろぼせと
依よさし給たまひし畏かしこさよ
龍りうだ蛇の神かみを倒たふすべく
虎とら狼ほかみや獅し子しに熊くま
猛たけき力ちからに龍りうも蛇へびも
一いち度どは影かげをかくしつれど
深ふかき谷たに間まにひそまひて
再ふたび天てん地ちをくもらせつ

日ひに夜よに禍わざはひ下くだすこそ
げにも忌ゆ々ゆしき次第しだいなり
ここに再ふたび主スの神かみは
御み樋しろ代がみ神の田た族から比ひ女めに
十と柱し神らを従したがへて
この食を國すくを守まもるべく
依よさし給たまひし畏かしこさよ
百も鳥とり獸けもののいさかひも
こここに漸やうやくかかげひひそめ
ううら安やす國くに土ひかの光ひかりをば
天てん地ちに照てらし給たまへども
醜しこの曲まが神かみは執しつ拗えうに
魔ま棲すみヶが谷やつにししのびびゐゐて
神かみの御み國くにを汚けがすさま

げに憎らしき次第なり

ここにいよいよ御樋代神は

曲の征途に向はむと

今日の吉き日の吉き時に

駒の轡を竝め給ひ

進ませ給ふぞ尊けれ

ああ惟神々々

生言靈の幸ひに

今日の首途をつつがなく

守らせ給へと主の神の

御前を遙かに拜み奉る

御前を謹み拜み奉る

保宗比古の神は御歌詠ませ給ふ。

はてしなき

萬里までの海原うなばらに浮うかびたる

萬里までヶ島根しまねはいや廣ひろし

西にしには白馬はくばヶ嶽だけ聳そびえ

東ひがしに牛頭ごづヶ峰みね立たちて

中なかを流ながるる萬里までの河かは

八千方里はっせんはうりの眞中まんなかに

百樹ももきの茂しげる萬里までヶ丘か

これの聖所すがどに天降あもります

御樋みひ代神しろがみの御尾みを前に

仕つかへて吾われは曲神まががみの

伊吹いぶき拂はらひの神業かむわざに

加くははり進すすむ嬉うれしさよ

御空みそらに黒雲くろくもふさがりて

空飛ぶ田鶴の影さへも

見えず淋しき國原を

生言靈を力とし

神の御稜威を柱とし

白馬ヶ嶽の谷間に

ひそめる曲津を言向けやはし

もしも聞かずば斬りはふり

根を絶やさむと進み行く

今日の旅路ぞ畏けれ

吹き來る風は腥く

たゆる間もなき醜神の

猛びの聲は聞ゆなり

百鳥の鳴く音悲しく蟲の音も

滅びの聲を放つなり

野邊の蛙は非時に

聲を放ちて泣き叫ぶ

その聲一つに集まりて

天地をゆるがせ震はせつ

常世の間は目のあたり

萬里の島根に落ちむとす

ああ惟神々々

生言靈に幸あれよ

吾言靈に生命あれ

正道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

千年經し常磐の松に宿りつつ

百の蛙を永久に

守れる田鶴の翼なへて

悪しき獣や猛き鳥の

いたけりくるひ萬里の島は

今や滅びむとせし折しも

主の大神の神言もて

天降り給ひし田族比女の神の

光りに恐れもるもの

猛しき悪しき鳥獣

漸く影をかくしつれど

松の梢に巣ぐひたる

鶴は恵みを悟り得ず

側に仕ふる猿まで

心はおごり傲ぶりて

遂には百の蛙等を

虐げければ百千萬の

叫びの聲は天に満ち

再び闇の世となりしを

時こそよしと荒鷲は

翼を搏ちて攻め來り

虎狼や獅子熊は

海より陸より迫り來て

犬と獅子とにわたり合ひ

敵も味方もあともなく

滅び失せにしぞ忌々しけれ

さはさり乍ら御樋代神の

貴の功に守られて

梢の鶴はやすやすと

御空を翔り舞ひ遊ぶ

その御空をばいくそ度
曇らせ濁らせ迷はせて
地上に生ふる草や木や
生きとし生けるもの皆を
損ひ破る曲津見の
水火を清めて安國の
元の昔に返さむと
征途に上る今日こそは
未だ初めての壯擧なり
ああ惟神言靈の
水火の力に幸あれよ
吾宣り出だす言靈に
眞言の神の生命あれ』

田族比女の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の天津高宮ゆ天降り来て

今日初めての征途に立つも

曲神の猛び忌々しも生きと生ける

ものの生命をそこなはむとすも

萬里の島の司の鶴は翼なへて

曲津をきたむる力だになき

御樋代の神の出でずば曲津見を

言向けやはす術なかるらむ

千年ふりし松の梢の眞鶴も

神の力を知る時來らむ

はてしなく廣く生れし萬里の島を

いかに守り得む鶴のみにては

神々の言靈の水火なかりせば

萬里の島根は忽ち滅びむ

眞鶴の聲は悲しく聞えつつも

まことの神にたよらぬぞうき

いざさらば駒に鞭うち進むべし

醜の曲神のひそむ谷間へ

斯く御歌詠ませつつ駒の蹄を急がせて、
白馬ヶ嶽の山麓を進ませ給ふぞ雄々し
けれ。

(昭和八・一二・一三 舊一〇・二六 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録)

第一〇章 樹下の雨宿(一九四二)

山跡比女の神は馬の背に跨りながら、御歌詠ませ給ふ。

仰ぎ見れば白馬ヶ嶽の頂に

紫の雲横なびきつつ

南の深き谷間に群がりて

立つ黒雲は曲津の水火かも

この島に生きとし生けるもの皆を

そこなひ破るも醜神の水火は

魔棲ヶ谷の邊りに群れたつ黒雲を

吹き拂ふべき時は近めり

われは今御樋代神に仕へつつ

魔神の砦に勇み進むも

久方の御空は黒雲塞がりて

荒金の地に霧籠むるなり

霧きりの幕透まくとほして見みゆる魔ます棲すヶ谷がやつの

南みなみの谷間たにまの雲くもは怪あやしも

御樋みひ代神旅しろがみたびにたたせる今日けふの日は

湧わき立つ霧きりも稍薄やうすらげり

科戸邊しなとべの風かぜよ吹ふけ吹ふけ公きみがゆく

道みちにさやれる霧きり吹ふき拂はらひて

草くさの根ねにひそみて鳴なける蟲むしの音ねも

一ひと入悲しほかなしき霧きりこむ野路のぢなり

笹ささの葉はに置おく白露しらつゆの冷ひえ冷びえと

襲おそひ來くるかも駒こまの背せなまで

久方ひさかたの天あまの高宮たかみや立たち出いでて

はるばるわれは此處ここに來きつるも

この島しまをうまらに委曲つばらに清きよめつつ

生國原いくくにはらとひらきまつらむ

御樋代の神の天降りし無かりせば

萬里の島根は永久に亡びむ

曲津神の伊猛り狂ふ萬里の島を

生言靈に照らさむ旅はも

田族比女神の神言に従ひて

曲津の征途に上る楽しさ

千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

駒竝めて曲津の征途に上りゆく

今日の生日に幸よあれかし

仰ぎ見れば空を包みし黒雲も

公の出でましに稍薄らぎぬ

薄らげる雲の帳を押し開けて

ほのかに見ゆる天津日の光

次ぎ次ぎに御空の雲も散りゆきて

天津日の神吾等を照らせり

曲津見を言向け譴責め斬り放る

今日の出で立ちを守らせよ日の神

萬里の島を日竝べて包む黒雲の

怪しき水火は總てを惱ませり

言靈の水火に生れし吾等はも

水火の濁れば苦しかりける

曲津神の怪しき水火を科戸邊の

風の力に伊吹き拂はせ

東の空に聳ゆる牛頭ヶ峰の

頂ほのかに日光は照るも

牛頭ヶ峰白馬ヶ嶽の中をゆく

吾等が旅路に永久の幸あれ

萬里の丘老樹の茂る清森も

遙けくなりて霧籠むるなり

萬里の島の大川小川悉く

魔神の水火に濁らへるかな

清らけき泉しあれば禊して

われは進む魔棲ヶ谷に

玉の緒の命の限りわが公に

仕へまつりて生きむとぞ思ふ

山と海諸々越えてわが公の

御後に従ひ此處に来つるも

千早振る神も守らせ給ふらむ

わが行く旅の言靈の幸を

靈幸はふ神の御水火に守られて

猛たけき曲ま津が見みを言こと向むけ和やはさむ

太た刀ち膚はの猛たけき龍たつ神が醜みの太を蛇ろち

群むらがり棲すむとふ魔ます棲みヶ谷がかな

力ち無からきわれにはあれど十と柱はの

神かを力ちに進すすみゆくなり〇

湯ゆ結む比す女びの神かは御み歌うた詠よませ給たまふ。

御み樋ひ代しろの神かに從したがひ十と柱はの

言こと靈たま神がは征き途ために上のるも

萬ま里での島しまを荒すび破やぶりし曲ま津が神かは

魔ます棲みヶ谷がにひそみゐるとふ

言こと靈たまの水い火きを清きよめて白は馬くヶ嶽がの

魔ます棲みヶ谷がにわれ進すすむなり

久方ひさかたの御空みそらの雲くもは次つぎ次つぎに

散ちり失うせにつつ日光ひかげはさしけり

四方よもやも八方もを深ふかく包つつみし雲霧くもぎりも

いや次つぎ次つぎに晴はれ渡わたりつつ

いやらしき冷つめたき風かぜもをさまりて

肌はだへぬくとき水い火きの満みつるも

大空おほぞらに圓ゑんを描えがきて隼はやぶさは

今日けふの門出かどでを祝いはひつつ舞まへり

眞鶴まなづるは翼つばさを揃そろへてわが伊い行ゆく

空そら高たか々ただかに舞まひ遊あそび居をるも

百鳥ももとりの聲こゑ勇いさましくなりにけり

御空みそらの雲くもの吹ふき散ちりしより

草くさも木きも蘇よみがへりたる心地こころちかな

葉末はずえの露つゆは日ひにかがやきて

公きみが行ゆく生言いくことたま靈の旅たびなれば

御空みそら晴はるも宜うべよと思おもふ

この島しまは田族たからの島しまと聞きくからは

白馬はくばの山やまは七寶しつぼう満みつらむ

白馬はくば山雪やまゆきと見みえしは白駒しろこまの

伊寄いより集つどひし影かげなりにけり

白駒しろこまは猛たけき獸けものの牙きばの劍つるぎ

神かみの惠めぐみに逃のがれたりけむ

牛うしと馬うまの群むらがり棲すめるこの島しまは

田族たからの島しまよ穀物たなつもの生ならむ

魔ます棲すみヶ谷がやつの醜しこの龍神たつがみ曲津まが大蛇をろち

言こと向むけ和やはして生國いくくにとせむ

御樋代みひしろの神かみと諸共もろとも十柱とほしらの

力ちから合あはせて國土くにを淨きよめむ

谷たに深ふかく黒くろき煙けむりの立たち昇のぼる

魔ます棲みヶ谷がやつは峻さかしかるらむ

正まさ道みち比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

勇いさましや駒こまを竝ならべて曲まが津つ見みの

征き途たに上のぼる今け日ふの旅た路びは

御み槌ひ代しろの神かみに從したがひ言こと靈たまの

軍いくさ進すすめむ魔ます棲みヶ谷がやつに

天あめも地つちも生いく言こと靈たまになり出いでし

言こと靈たまの國くに土によ何なにをおそれむ

天あめ地つちの正ただしき道みちを踏ふみてゆく

われまの眞ま言ことにさまやるもの無なし

白はく馬ば山ま麓ふもとを包つつみし雲くも霧きりは

漸やつやく晴はれて光ひかり充みちけり
天津あまつ日の光ひかり直ただ刺さし白馬はくばヶ嶽がだけは

今いま新あたらしくよみがへりける

わが行ゆかむ道みちを照てらして天津あまつ日は

大空おほぞら高たかくかがやき給たまへり

晝ひる月の光つきの白しろけて久方ひさかたの

御空みそらかすかに渡わたらひ給たまふ

山やまも野のも雲霧くもぎりはれて隈くまもなく

目路めぢの限かぎりはよみがへりたる
㊦

雲川くもかは比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。
㊦

㊦ 御樋みひ代神しろがみの出いでませる

曲津まがの征途きためを守まもらすか

科戸しなどの風かぜの御水み火いにて
空そらに塞ふさがる黒雲くろくもは
跡形あとかたもなく散ちり失うせて
青あをき御空みそらの奥おく深ふかく
天津日あまつひの神月かみつき讀よみの
神かみの光ひかりは冴さえ冴さえに
これの島根しまねを隈くまもなく
伊照いらし給たまひ百草ももぐさの
露つゆを照てらして荒金あらがねの
地つちは隈くまなくよみがへり
常世とこよの春はるの光景くわつげいを
忽たちまち現げんじ給たまひけり
今いままで菱しほみし百草ももぐさの
花はなは香かをりを競きそひつつ

しろあかきいんむらさき
白赤黄色紫の

はな ちじやう
花は地上に隈もなく

ひら そ かむながら
開き初めたり惟神

てんごく らくゑん
ああ天國か樂園か

つるは しまがね
この美しき島ヶ根に

まが ことごと
さやらむ曲津は悉く

いくことたま つるぎ
生言靈の劍もて

ことむ やは き はふ
言向け和し斬り放り

てんち わざはひめぞ
天地の災除くべく

みひしろがみ い
御樋代神の出でましを

てんち かみ よみ
天地の神は嘉しまし

よも くもきり ふ はら
四方の雲霧吹き拂ひ

つきひ かげ ち うへ
月日の光を地の上に

くま てら たま
隈なく照し給ひける

ああ惟神々々かむながらかむながら

生言靈の功績いくことたま いさをしに

勇いさみ進すすまむ吾等われらが旅路たびぢ

道みちの隈手くまでも恙つつがなく

魔神まがみの妨さまたげあらずして

千峽ちがひ八百峽やほがひ集あつめたる

流ながれ激はげしき八十やその瀧たき

隈くまなく越こえて龍神たつがみの

永久とほに潜ひそみてわなざを爲なす

魔ます棲みヶ谷がやつにいち早はやく

進すすみてゆかむ樂たのしさよ

ああ惟神々々かむながらかむながら

生言靈いくことたまに命いのちあれ

わが言靈ことたまに幸さちあれよ』

かくして一行十一柱の神々は、白馬ヶ嶽の南麓、魔棲ヶ谷の龍神の巢窟指して
進ませ給ふ。行手に當りて楠の大樹の茂れる稍廣き森の横はれるを見給ひ、暫し
この森に息を休めて樹下に湧き出づる珍しき清泉に袂の神事を各自に修し給ひつ
つ一夜を此處に宿らせ、明日の準備と天津祝詞を奏上し、無限絶對的の英氣を養
はせ給ふぞ畏けれ。

(昭和八・一二・一三 舊一〇・二六 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

第一章 望月の影 (一九四三)

御樋代神の石柱 田族の比女の神司
萬里の島根に降りまし 荒ぶる神を言向けて
永久にすまへる百の蛙 鼠のやからを救ひつつ

萬里の大河に沿ひてたつ
風光妙なる萬里ヶ丘に

永久の棲處を定めまし
白馬ヶ嶽の南側に

ひそみて邪氣を吹き散らし
生きとし生けるもの皆を

損ひ破るうたてさに
十柱の女男の神等を

従へ給ひ魔樓ヶ谷に
ひそみてわざなす醜神を

言向け和すと出で給ひ
千里の野邊を駿馬の

背に跨りて進みまし
漸く空もたそがれて

楠の大樹の茂りたる
泉の森に着き給ひ

ここに神々一同は
一夜の露の宿りをば

借らむと駒を降りたちて
月照る夜半の森かげに

各も各もに歌よみつ
休ませ給ふぞ畏けれ。

抑この萬里の島ヶ根は、未だ地稚く國土また完全に固まらざりせば、いづれの
大河小川も池水も濁り汚れて、飲料に適せざりしが、今ここに泉の森に降り立ち

給ひて、水底までも澄みきらへる泉の滾々としてつきざるさまを見給ひて、神々
等は袂に恰好の場所なりと喜び勇みたち、勇氣日頃に百倍し給ひける。この森は
目もとどかぬばかりの廣さにて、所々に清泉わき出で、地上一面の眞砂にして、
夜目にも爽快なる聖所なりける。

ここに田族比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 常磐樹の楠の大樹の下かげに

たまの命の清水は湧くも

萬里の島渡らひ來りてかくの如

清き泉はわれ見ざりしよ

月かげは楠の梢にさへぎられ

かげうつらねど清き眞清水よ

木かげなき玉の泉に楔して

月の光をむねに宿さむ

かく歌はせ給ひて、樹立まばらなる眞砂の中に、わき出づる清き泉の傍に立ち
給へば、月は皎々として泉の面に輝き給ひぬ。
田族比女の神は御歌詠ませ給ふ。

仰ぎ見れば月讀の舟俯して見れば

泉に浮ぶ月讀の舟

顯津男の神の御靈と仰ぎつつ

泉の波に月を見るかも

主の神の神言畏こみわれは今

萬里の島根に國土生みするも

顯津男の神はいづくにましますか

月は照れども語らふ術なし

眞清水に浮びて清き月光を

わが背の岐美と仰ぎぬるかも

苔こけむして神かむさび立たてる常磐樹ときはぎは

神かみよ世よながらのかたみなるかも

主スの神かみの生なり出いでましし初はじめより

早はや千ち萬よろづの年としを經へにけり

八やくも雲も立たち八や重へ霧りまよふ萬ま里での島しまも

今け日ふ初はじめての月つきを見みるかな

楠くすの樹きの梢うれの葉は毎ごとに置おく露つゆを

くまなく照てらしてさゆる月つき光かけ

かくの如ごと心こころ清すがしき夕ゆふ暮ぐれは

まだなかりけり萬ま里での島しまには

ざくざくと眞ま砂さを踏ふめる駿はや馬こまの

蹄ひづめの音おとにも生いくる言こと靈たまよ

斯かくの如ごと冴さえ渡わたりたる月つきの夜よを

眠ねむらむ事ことの惜をしくもあるかな

月讀のかげを初めて見たりけり

わが背にまみゆる日も近からむ

白馬ヶ嶽にひそむ曲津見言向けて

この國原を安く守らむ

十柱の神の力に守られて

曲津の征途にのぼるわれはも

木々の葉にしつとりと置く白露の

光り妙なり月のしたびは

仰ぎ見れば御空に星は眞砂如して

わがかかしらべに輝きませり

いざさらば楠の大樹の下蔭を

一夜の宿となして休まむ

輪守比古の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の神に仕へて草枕

旅の今宵の樂しきろかも

四方八方を深く包みし雲霧は

はれて御空に月出でましぬ

乗りて來し駒も勇みて嘶けり

風澄みきらふ月のしたびに

あちこちに月の浮べる眞清水は

魂洗へとの神示なるかも

村肝の心清しくわれなりぬ

そよ吹く風に囁く木々の葉

濁りきり曇りきりたる萬里の島に

かかる聖所のあるとは知らざりき

蟲の音もいやさやさに聞ゆなり

小鳥は埒に歸りてささやく

百鳥も初めて月の冴ゆる夜を

ゑらぎて寝ねず轉るなるらむ

われもまた心は勇み胸をどり

二つの腕のうなり止まずも

天も地も澄みきらひつつ月讀は

われ等がかしらべを照し給へり

滾々と果しも知らに湧き出づる

甘き清水はわが命かも

靈山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

わが魂は果なくふくれ擴ごりぬ

御空の月の露をあみつつ

天渡る月の光のさやけさに

わが目めさえつつ眠ねむらえぬかな
またとなき望もちづき月の光かけいや清きよみ
守もりて更ふかさむこれの聖すがと所に
點てんてん々と生おひたつ楠くすの黒くろきかげは
月つきに照てらされ墨すみ繪ゑの如ごとし
大空おほぞらの月つきは聖すがと所ところにくるぐると
楠くすの大樹おほきのかけを描ゑがくも
明日あすの日は魔ます樓むらヶ谷がやに進すすまむと
思おもへば心こころいさみて眠ねむれず
御み樋ひ代の神かみの御尾みを前に仕つかへつつ
今けふ日あ新たらしき月つきを見みるかもも

若わか春かは比は古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

𠄎 永久とこしへの命いのちの公きみに從したがひて

泉いづみの森もりの月つきを見みるかな

言こと靈たまの命いのちをみたす御み樋ひ代しろの

神かみの功いさをは月つきと冴さえつつ

百も八も十その曲まが津みの棲すみし萬ま里での島しまも

いきや清きよまりて月つき日照ひてらへり

月つきと日ひの光かげをかくせし黒くろ雲くもは

醜しこの曲まが津つの水い火きなりにけり

白はく馬ばヶ嶽がだけの頂いたかすかに見みえにけり

空そらゆく月つきのさひやけき光ひかりに

何なんとなく心こころ清すがしき夕ゆふべなり

命いのちの清しみづ水づゆたに掬むすびつ

大おほ空そらの月つきも清きよけき眞ま清しみづ水づを

嘉よみし給たまふかかかげを浮うかせり
𠄎

保宗比古の神は御歌詠ませ給ふ。

八千歳の齡を經にし楠の樹の

森の樹かげに露の宿りすも

久方の高天原を立ち出でて

初めて見たる月の森はも

地稚き萬里の國土にもかくの如

淨き聖所の在るは珍し

久方の天も清けく地淨し

御空を渡る月またさやけし

村肝の心の曇りさやさやに

晴れわたりにけり望月の光に

望月の光は清しくうつろひぬ

玉の泉の波にさゆれて

目のしたに輝く月とは言ひながら

手にとる術もわれなかりけり

仰ぎ見れば御空の奥のその奥の

青海原に浮べる月舟

俯して見れば玉の泉の底深く

波に浮べる明るき月舟

明日の日は曲津の征途にのぼらむと

望みかかへてわれ眠らえず

曲津見は萬里の島根の貴寶

残らず奪ひて持てりとぞ聞く

國魂の神ともいふべき貴寶

光の寶を抱ける曲津見よ

貴寶いかにさやけく光るとも

御空の月の光には及ばじ

さらさらと科戸の風の梢をもむ

音響かひて泉の月ゆるる

ちらちらと月のしたびにわくら葉は

わが足の邊に散りつ亂れつ

かくの如清けき清水眞清水に

浮くわくら葉の忌々しもよ

直道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の高天の原を後にして

遙かに來つる萬里の島かも

御樋代神の國魂神をまつぶさに

生まさむよき日の待たれけるかも

大空にかがやき渡る月光に

瑞みづの御靈みたまの出いでまし思おもふ

遠とほからず瑞みづの御靈みたまは天あも降りまさむ

これの泉いづみに月宿つきやどらせば

水底みなそこは深ふかからねども果はてしなく

湧わける清水しみづのかがやき強つよし
□

山跡やまと比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。
□

女めが神かみわれは御樋代神みひしろがみに従したがひて
□

月つき照てり渡わたる森もりに來きつるも

白馬はくばヶ嶽頂がだけただきさ冴さえて大空おほぞらの

月つきは漸やうやく傾かたむきにけり

西にしへ行ゆく月つきのみかあふげを仰あふぎつつ

更ふけゆよく夜半よの宿やどりを惜をしむも

静かなる月の夜なるかな梢もむ

風の響きもはやをさまりて

千萬の眞砂は御空の星の如

月の光りにきらめき渡れる

大空ゆ月の玉露しとしと

庭の眞砂を潤して照るも

幾千代も生きながらへてかくの如

冴えきる月を仰ぎたきかも

玉の緒の生きの命は永久に

いや榮えつつ神業に仕へむ

果しなき廣げき萬里の島ヶ根を

隈なく照して澄める月はも

(昭和八・一二・一三 舊一〇・二六 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録)

第一二章 月下の森蔭（一九四四）

山跡比女の神は月照り渡る泉の森を、彼方此方と彷徨ひながら美しき夜の眺めに憧憬れ眠りもやらず、御心頓に浮き立ち給へば、思はず知らず御歌を口ずさみ給ふ。

久方の御空は清く

雲の海原青々と

御空の奥に澄みきらひ

星の眞砂はいろいろに

夜をかがよひ天の河

北より南に流るなり

天の河原を安々と

横ぎり給ふ月舟の

光はさやかに澄みきらひ

兔と猿の餅を搗く

杵と臼との形まで

いやあきらけく見ゆるかな

泉の森の清庭を

御空の月は隈もなく

伊照らし給ひ百千々の

泉のことごとさやかなる

月の御光を浮べける

ああ天國か樂園か

庭の眞砂は露にぬれ

その露さやかに伊照らせる

月の光ぞ尊けれ

この清庭を踏むさへも

月の御光のうつらふと
思へば畏し惟神
神のまにまに月の夜を
吾は樂しみ遊ぶなり
御空にさやる雲もなく
大地を閉す霧もなく
醜の嵐も吹きやみて
御樋代神に仕へ來つ
かかるさやけき月の森に
一夜を樂しみ遊ぶとは
夢か現かまぼろしか
吾身ながらも解し得ぬ
嬉しきことの限りかも
樂しきことの極みかも

千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 泥の海に浮びて廣き萬里の島に

今宵はさやけき月を見るかな

八雲立つ八重霧立ちたつ萬里の島に

天降りし吾も月に息せり

天地の水火は隈なく清まりて

わが魂線も冴え渡りける

斯の如清き清しき水火吸ひて

わが魂線はよみがへりたり

言靈の水火の命に生れたる

吾は濁れる水火を苦しむ

形あるものは食はねど澄みきらふ

水火を吸ひつつわが生きるなり

天津神あまつかみ吾われは清きよけき水い火きを吸すひて

千代ちよの命いのちを保たもちこそすれ

國津神くにつかみその外ほか諸もの生物いきものは

木この實み草くさの實み食くひて生いくるも

天界かみくにに生うまれ初はじめて冴さえ渡わたる

御空みそらの月つきに水い火き榮さかえぬる

御樋代みひしろの神かみは常とこ磐きはの楠くすの蔭かげに

息安いきやすらけく眠ねむらせ給たまへり

吾われもまた明あ日すの旅たび立ち重おもければ

月つきのしたびに臥ふしてやすまむ
㊦

湯結比女ゆむすびひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。
。

㊦
諸神ももがみは各おのも各おのもにいねましぬ

月の下びにいびき聞えて

斯の如おだひに澄める空の下に

月を仰ぎて眠る楽しさ

山も野も月の降らせる玉露に

よみがへりつつ夜を照らへり

大空の月日の光をさへぎりし

曲津見の水火の雲晴れにつつ

月も日も清しく明し照り渡る

この稚國土は永久の樂園か

この森は御槌代神の住ませ給ふ

萬里の丘にもましてさやけし

萬里の丘の聖所を此處に移しまして

主の大神の宮居つくりませよ

主の神の御舍仕へまつるには

ふさはしき森よ泉の森は

正道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の空は澄みきり荒金の

地はうま怜によみがへりたり

夜嵐の風の響きも消え失せて

御空の清しき月を仰ぐも

あちこちに月にかがよふ玉泉を

わが手に掬べば和く甘しも

この水は吾等が永久の命守る

生ける清水よ眞の水よ

斯の如澄みきらひたる眞清水は

萬里の島には見當らぬかな

この森は瑞の御靈の守ります
月の泉の生ける森かも

雲川比古の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の田族比女神始めとし

諸神等はいねましにけり

小夜更けて御空を渡る月舟は

白馬ヶ嶽に傾きにけり

冴え渡る月に夜ごろを囀りし

小鳥の聲も静まりしはや

森かげに匂ひ氣高き白梅も

小夜を眠るか花は萎めり

蟲の音もいや次ぎ次ぎに細り行きて

泉いづみの森もりの夜よはふかみかも

ただ一人ひとり泉いづみの森もりに眠ねもやらず

十柱とじら神がみの夜よるを守まもらむ

駿馬はやこまの嘶いななく聲こゑも足搔あがきの音おとも

早はやとどまりにけり寝いねにけらしな

明日あすされば魔樓ますみヶ谷がやつに進すすまむと

思おもふ心こころの雄健をたけびやまずも

主スの神かみの任よさしの神業みわざと思おもふより

わが魂たましひ線をは雄健をたけびなすも

玉たまの緒をの生いきの命いのちは失うするとも

醜しこの曲ま津が見みを譴責きためでおくべき

御樋みひ代の神かみの御息みいきは静しづかなり

如何いかなる夢ゆめを結むすばせ給たまふか

黒雲くろくもの非時ときじく湧わきて立ちたのぼる

魔ます棲すみヶが谷やつをを明あ日すはは襲おそははむ

輪わ守もり比ひ古こ神かみのの寢ね姿すがた眺ながむむれば

口くちををへへのの字じにに結むすびび給たまへへり

靈たま山やま比ま古ひ神こかみはは木きのの根ねをを枕まくらして

右みぎのの脇わき腹ばらをを下したににいいねねませせり

右みぎ腹はらをを下したににささのの字じにに眠ねむららへへば

生いきのいの命のちのの長ながししととぞぞ聞きく

若わか春はる比ひ古こ神かみのの寢ねませせるる面おもの上うへに

楠くすのの病わくら葉ば一ひ葉とは落おちちたり

保もち宗むね比ひ古こ神かみのの躰いびきはは雷いかづちの

轟とどろくく如ごとくく高たかかかりりににけけり

直な道ほみ比ち古ひ神こかみはは手て足あしをを大だいのの字じに

いいややひひろろげげつつ寝ね言こと宣のららせせり

山やま跡と比ひ女めのの神かみはは御み腹はらをを地ちにに伏ふして

月の光を背に負はせり

千貝比女の神は折々雙の目を

開き閉ぢつついねませるかも

湯結の比女神は大地に端坐して

左右の手を組み眠らせ給へり

正道比古神は折々太き息を

吹き出し吾を驚かせにけり

太き息を時々ふき出し口の邊を

もがもが動かす正道比古の神よ

雲川比古吾は夜守を任せられて

諸神等の息を守るも

曲津見の襲ひ來らば雲川比古の

生言靈に斬り放りてむ

東雲の空はほのぼの明らみぬ

再び天津日昇らせ給はむ
月讀の神は白馬ヶ嶽の背に
かくろひまして東雲めにけり

斯く雲川比古の神は夜警の役を仰せつけられ、一目もいねず、忠實に夜の明るまで仕へ給ひける。

(昭和八・一二・一三 舊一〇・二六 於大坂分院蒼雲閣 内崎照代謹録)

第三篇 善戰善闘

第一三章 五男三女神 (一九四五)

宇宙の創造、天地開闢と大神業に奉仕したまふ天界の正神は、至粹至純なる清鮮の水火を呼吸して、其の生命を永遠無窮に保持し、無限の力徳を發揮し給ふに反し、濁りと汚れと曇りより發生したる邪神は、常に混濁の空氣を呼吸して其の生命を保持し、あらゆる醜惡なる行爲をなして、日夜を樂しむの靈性を持つものなれば、邪神のある處必ず邪氣充滿し、黒雲漲りて森羅萬象の發育に大害を與へ、主の神が修理固成の神業に極力反抗し妨害せむとするものなり。併しながら邪神自身としては、最も眞正にして至當の所行と感じ居るが故に、極力其の惡業を改め、生成化育の善道に従はむとはせざるなり。

茲に主の大神の清澄無垢にして、至粹至純なる言靈の水火より生り出でたる萬里の島ヶ根も遂には邪氣發生して、さも恐ろしき太刀膚の龍となり、或は猛惡なる大蛇と化して非時に雲霧を起し、邪氣を吐き、天地を混濁せしめ、日月星辰の光を遮り、萬物の發育を妨げ、神人禽獸等の生命を脅かし且つ短縮せしめて能事了れりとなし、會心の笑を漏らし居るこそ忌々しく、到底善言美詞の言靈をもつて完全に濟度し得べからざる難物なり。故に未だ地稚く國土定まらざりし紫微天

界の頭初に當りては、生言靈の武器をもつて言向け和す事容易ならざれば、神々は數億萬年後の世界の爲に、所在惡神邪氣の靈を根本的に絶滅せしめむと千辛萬苦に堪へ、其爲に全能力を傾注し、活動し給ひたるなり。

實に吾人がこの清明なる天地に安らかに生を保ち得るも、四季の順序調へるこの地上に諸々の山水の明媚なる風光を觀賞し、生命の日月を拜し得るも、皆太初の神々等の舍身的御活動の賜にして、その厚恩は海よりも深く又スメールの山よりも高く、到底吾人の言語をもつて言ひ現はし稱へ了る事は不可能と知るべし。吾人にして宇宙創造の神業と天地開闢の神々の御苦心を幾分にても察知し奉る時は、この鴻恩の大なるに嗚咽感泣し、現代に處して如何なる不遇の地位にあるとも、唯一言の怨み言をのべ又は神命を輕んずる無道の罪を犯す事、夢寐にもあらざるべきなり。

主の大神の直系にして且つ太初に特に全力を注ぎて修理固成したまへる紫微天界の終結たる我地球、特に豐葦原の中津神國尊嚴無比にして、其皇統は主の大神より流れ出で、永遠無窮に森羅萬象に對し無限の恩恵を賜ふ事を思へば、吾人は

敬神尊皇報國の至誠を晝夜間斷なく盡しまつり捧げまつりて、忠孝、仁義、友愛等の神授固有の精神を彌益々に發揮せざるべからざるの天職天命ある事を知るべし。

茲に萬里の島の御樋代神として天降り給ひし田族比女の神は、如何にもして、これの島ヶ根を主の大御神の依さしのままに清淨無垢、至喜至樂、至善至美、至清至潔なる天國淨土に拓かむとして、あらむ限りの神力と神策を發揮し給ひけれども、未だ白馬ヶ嶽の南側にあたる萬谷千谷の奥處には曲神の邪氣凝り固まりて、時々雲霧を起し、萬里ヶ島の天地を咫尺辨ぜざるまでに包みて、動植物の發育を妨害したりければ、御樋代神は止むを得ず、大勇猛心を發揮し、白馬ヶ嶽の惡魔を徹底的に掃蕩せむと思召し、十柱の從神を從へ、千里の荒野を駒の背に踏み破りつつ、辛うじて楠の大木の生ひ繁りたる目路も届かぬ限りの泉の森の聖所につかせ給ひ、月下に一夜を安息し、夜の明るるを待ちて彌々、魔棲ヶ谷の惡靈を掃蕩すべく、部署を定めて出で立たせ給ひ、御身自らは泉の森を策戦上より本營と定め、輪守比古の神、若春比古の神を御側に守らせおき、靈山比古の神、保宗比

古この神かみ、直道比古なほみちひこの神かみ、正道比古まさみちひこの神かみ、雲川比古くもかはひこの神かみ、山跡比女やまとひめの神かみ、千貝比女ちかひひめの神かみ、湯結比女ゆむすびひめの神かみの五男神ごなんしん三女神さんぢよしんをして先陣せんぢんを勤つとめしめ給たまひける。

東ひむがしの空そらを茜あかねに染そめなして

天津日あまつひの神かみのほ昇のぼりましぬる

木々きぎの葉はにおく白露しらつゆも七色なないろの

光ひかり放はなちてよみがへりたり

久方ひさかたの天あまの岩窟いやくどの開ひらけたる

心地ここちするかも昇のぼる朝日あさひに

いざさらば醜しこの曲神まがみの潜ひそむてふ

魔棲ますみヶ谷がやつに進すすませ神等かみたち

輪守比古わもりひこ若春比古わかはるひこの二柱ふたはしらは

吾われにいそひて此地ここにありませ

曲神まがみの醜しこの奸計たくみの深ふかければ

泉いづみの森もりに控ひかへ守まもらむ

五いつ男神をがみ三柱みはしら女神めがみは主スの神かみの

水い火きを御み楯たてに疾とく進すすむべし

曲まが神かみは千ち萬よろづ軍いくさを整ととのへて

十と重へに二十はた重へに固かため居あるなり

束つかの間まも生いく言こと靈たまの太ふ祝のり詞と

絶たやさずつづけて静しづかに進すすめよ
㊦

靈たま山やま比ひ古この神かみは答いらへの御み歌うた詠よませ給たまふ。

㊦
有あ難りがたし御み槌ひしろ代がみ神に選えらまれて

けふの先まさ頭きに吾われは立たつなり

曲まが神かみの奸たく計みは如い何かに深ふかくとも

いかに恐おそれむ神かみの御おん爲ため

雲霧も隈なく晴れし今朝の春を

進みて行かむわれぞ樂しき

朝風はそよるに梢を渡りつつ

今朝は殊更水火澄みにけり

泉の森清き清水に身を清め

出で立つ神魂にはむかふ曲なし

天津日に春のみゆきの消ゆるごと

滅び失すべし曲の砦は

いざさらば御樋代神よ二柱よ

わがゆく軍を守らせたまへ

と言ふより早く、靈山比古の神は只一騎駒に鞭うち、南方の原野の中央を魔棲ケ

谷の方面目蒐けて驅け出で給ふ。
保宗比古の神は今や出陣せむとして、御歌詠ませ給ふ。

☐ 靈山比古神は先頭に驅け出でぬ

吾後れめや曲津の征途に

田族比女神の神言に従ひて

いざや進まむ魔棲ヶ谷へ

大空の隈なく晴れし今日の日は

心の駒の頻りに勇むも

曲神の日に夜に吐ける黒雲の

水火を拂ひて國土を清めむ

幾萬の魔神の群を言靈の

水火に拂ふと思へば勇まし

萬里の島にさやる雲霧吹き拂ひ

いや若春の國土造らばや

吾駒の足搔せはしも醜神を

踏み躪らむと駒も勇むか

此島の開け初めしゆはじめての

曲を譴責めの戦樂しも

千萬の奸計の罨をしつらへて

曲津は待つらむ吾行く道に

何事も主の大神の御心に

違はじものと愼み進まむ

曲神といへども元は主の神の

水火と思へば憎まむ道なし

善き道に歸順ふならば醜神も

吾は助けむ神のまにまに

かく御歌詠ませつつ、

田族比女の大^{おほかみ}神、二柱の大^{おほかみ}神、いざさらば、吾^{わが}行^{ゆく}手^てを^{まも}守^もらせ給^{たま}へ

と言^いひ^ひ残^{のこ}し、馬^ば背^{はい}に^{ひとむち}一^{ひとむち}鞭^{むち}あてて大^{おほの}野^がヶ^は原^らの中^{まん}央^{なか}を^{いちちよくせん}一^{いちちよくせん}直^{ちよくせん}線^{せん}に^{みなみ}南^{みなみ}へ^{みなみ}南^{みなみ}へと^{すす}進^{すす}ませ給^{たま}ひ

ける。

直道比古の神は出立にのぞみ御歌詠ませ給ふ。

御樋代神田族比女の神にもの申す

神言畏み征途に上らむ

仰ぎ見れば魔樓ヶ谷の谷間より

又も黒雲湧きひろぐるも

曲神は再び天地を常闇に

包まむとするか心憎しも

漸くに蘇りたる生物を

損はむとする醜の雲霧

魂線の光をてらし言靈の

水火を固めて曲津を拂はむ

天地を隈なく照らしたまひたる

日光を今や黒雲包めり

天津日の光を永久に萬有に

照らさむために吾は進むも

天地の正しき道を踏みわけて

進む吾に曲津さやるべきや

曲神は横さの道を彼方此方に

開きて神世を亂さむとせり

一すぢの生言靈の正道に

横さの道を蹴破り進む

靈山比古の神は先頭に立ちたまひ

早くも御姿見えたりけり

吾も亦曲津の征途に後れじと

駒に鞭うちいそぎ進む

かく歌ひながら、駒に一鞭あて一目散に駆け出し給ひぬ。
まさみちひこの神は出立にのぞみ御歌詠ませ給ふ。

三柱の神は早くも出でましぬ

吾も進まむ曲津の征途に

次ぎ次ぎに御空は曇り天津日の

光をかくしぬ曲津の黒雲

雨さへもまじりて雲は大空を

いや次ぎ次ぎに包まひにけり

曲神の元つ棲處に押し寄せて

湧き立つ雲の根を断たむかな

雨嵐黒雲いかに荒ぶとも

吾は恐れじ言靈の武器あり

曲神の勢いかに猛くとも

正しき道の光に及ばじ

心長くしのびしのびて正道を

踏みわけ進まむ曲津滅ぶまで

いざさらば御樋代神よ二柱よ

これの聖所に吾等を照らせよ

と言ひつつ、又もや駒の背に一鞭あてて駆け出し給ふ。

雲川比古の神は御樋代神に一禮し、ひらりと駒に跨りながら、

『いざさらば雲川比古は五柱の

殿軍として征途に上らむ』

と言ひつつ一目散に駆け出し給ふ。

山跡比女の神、千貝比女の神、湯結比女の神は御樋代神の前に竝立し、手拍子

足拍子を揃へて首途の祝歌を歌ひ給ふ。

白馬ヶ嶽は高くとも

魔棲ヶ谷は深くとも

醜の曲津は數限り

なく集ふとも言靈の

清き水火もて打拂ひ

斬り放りつつ萬里の島の

天地の雲霧吹き清め

森羅萬象悉く

月日の恵の露うけて

千代も八千代も永久の

生命を保ち彌榮え

五穀は稔り果實は

蟲むしの害がいなくよく育そだち
春はるの山やま野ぬの百も花ばなは
艷えんを競きそひて咲さき匂にほひ
百も鳥とり歌うたひ蟲むしの音ねは
清きよくすがしくさえざえて
萬ま里でヶ島がしま根ねは永とこ久しへの
天てん國こく淨じやう土どと生うまるべし
治をめたまはむ御み心こころの
雄を々をしき今け日ふの出いでましよ
御み供ともの神かみと選えらまれて
吾われ等ら三み柱はしら比ひ女め神がみは
白はく馬ばの背せなに跨またりつ
泉いづみの森もりを立たち出いでて
遠とほき荒あ野らのを打うちわたり

魔棲ヶ谷の醜神ますみがやつ しこがみの

醜しこの荒すさびを言こと向けむ

ああかむながらかむながら惟神々々

天あ晴はれ國く土に晴はれ草くさも木きも

生いきとし生いけるもの皆みなは

心こころ晴はれ晴はれ勇いさめよ勇いさめ

生いきよ生いき生いき永とこ久しまでも

盡つきぬ生いのち命ちを保たもちつつ

主スの大神おほかみの守まもらせる

萬里まヶ島がしま根ねの禍わざはひを

拂はらひ清きよむる旅たび立たちぞ

ああたの頼たのもしき次しだい第だいなり

御み樋ひ代しろ神がみよいざさらば

吾われ等らがゆく行まも手もを守まもりませ

泉いづみの森もりの聖所すがどこに

永久とほの光ひかりをなげたまひ

行手ゆくてを明あかしたまはれよ

偏ひとへに祈いのり奉たてまつる

ああ惟かむながらかむながら神々々

生言いくことたま靈たまのすの水い火きに

勇いさみ進すすまむいざさらば

と歌うたひ終をはり舞まひ納をさめて、三さん女ぢよしん神しんは一いつ齊せいに白馬はくばの背せに跨またがり、悠いう々いうとして征途せいとに上のぼら
せ給たまひける。

(昭和八・一二・一五 舊一〇・二八 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録)

第一四章 夜光やくわうの眼球めだま〔一九四六〕

茲こゝに靈山たまやま比古まひこの神かみは、御樋代神みひしろがみの屯たむろし給たまふ泉いづみの森もりの本營ほんえいを立出たちいで、大野おほのヶ原がはらを南みなみへ南みなみへと駒こまを驅かけながら進すすませ給たまひけるが、俄にはかに魔ますみ棲みがやつヶ谷はうめんの方面ほうめんより吐はき出だす黒煙くろけむりは天てんに塞ふさがり地ちに這はひて、咫尺しせきを辨べんぜず、駒こまの歩あゆみも抄はかばか々はしからず、行ゆき艱なやみつつ其日そのひの黄昏たそがる頃ころ、漸やつやくにして山麓さんろくの稍平ややへいたん坦たんなる小笹をざさヶ原がはらに着つき給たまひけるが、晝ひるも猶なほ暗くらきに、搗かてて加くはへて夕闇ゆふやみの迫せまりければ、其身そのみの乘のります白しろき駒こまさへも完全くわんぜんに見別みわけ難がたくなりけるにぞ、流石さすがの靈山たまやま比古まひこの神かみもひたと行詰ゆきつまり、當惑たうわくの體ていにて、邪氣じやきを晴はらすべく生言靈いくことたまを宣のり上げ給たまふ。其御歌そのみうた、

アオウエイ天津高宮の主の神の

依さしの旅ぞ雲霧退け

カコクケキ輝き渡る日月の

永遠に伊照らす神の御國ぞ

曲神の醜の猛びの強くとも

生言靈に雲霧晴らさむ

サソスセシ

冴え渡る月日の影を曲神は

隠さむとするぞ忌々しかりけれ

五月蠅なす曲津の砦を射照して

吾は進まむ魔樓ヶ谷に

タトツテチ

玉の緒の水火の命のある限り

萬里の島根を照らさむ吾なり

高山の谷間に潜む曲津見の

水火を被ひて天津日を照らさむ

魂線の生きの生命のあらむ限りを

盡して曲神と戦はむかな

ナノヌネニ

七重八重十重に二十重に包みたる

雲霧晴れよ生言靈に

長き閒萬里の島根を閉したる

雲霧袂はむ水火の命に

流れ落つる瀧の響も濁りたり

大蛇の棲める此谷川は

艱みなき紫微天界の中にして

荒振る曲神を憐れみ思ふ

八ホフヘヒ

駿馬の白き姿も見えぬまで

曲神の水火は黒く包みぬ

果しなき生言靈の力にて

吾は拂はむ醜の黒雲を

はしけやし主の大神の御水火以て

ヲ聲に生れし靈山比古ぞや

マモムメミ

曲神まがかみの醜しこの砦とりでをことごとく

言こと向むけ和やはすと吾われは來きつるも

萬里まヶ島でがしまは主スの大神おほかみの御樋代みひしろぞ

服まつろ從まつへ奉まつれ醜しこの龍神たつがみ

摩訶ま不思議かふしぎ白馬はくばヶ嶽がだけの山裾やますそに

醜しこの黒雲くろくも立たち迷まよふとは

まさにこれ醜しこの龍神たつがみ大蛇をろち等らが

吾われ謀はからむと包つつめる雲くもかも

ワヲウエヅ

吾われは今いま御樋代みひしろ神がみの神言みこと以もて

曲神まが征途きために立たち向むかひたり

惡神あくがみの醜しこの奸計たくみをことごとく

討斬うちきり拂はらひ雄を々をしく進すすまむ

吾は今これの笹生に休らひて

夜の明くるまで待たむと思ふ

進まむとひたに思へど咫尺辨かぬ

この常闇は詮術もなき

斯く歌ひ給ふ折しも、胸に夜光の玉をかけ、悠々と現はれ來れる三柱の女神あり。ふと見れば山跡比女の神、千貝比女の神、湯結比女の神の三女神にして、神言の前に軽く目禮しながら夜光の玉に四邊を照し、比女神の姿は常に勝りて美しく、神々しく、優しく見えにける。

靈山比古の神は、三女神は吾より後に進みたる筈なるに、早くも先着したるは合點ゆかずと雙手を組み暫し思案に暮れ居給ひけるが、

審かしも汝は三柱比女神に

面ざし偽せし曲津見なるらむ

三柱みはしらの比女神ひめがみは夜光やくわうの珍うづの玉たま
持もたせしことの未まだ無なきものを

山跡やまと比女ひめの神かみは「ホホホホホ」と優やさしき御聲みこゑに打笑うちわらひながら、

愚おろかなる靈山たまやま比古ひこの言ことの葉はよ

夜光やくわうの玉たまはわが神魂みたまぞや

吾神魂わがみたままさかの時ときには斯かくの如ごと

光ひかりとなりて闇やみを照てらすも

常闇とこやみはいや深ふかくとも吾持わがもてる

夜光やくわうの玉たまに山路やまぢを照てらさむ

吾魂わがたまの光ひかりに從したがひ登のぼりませ

闇やみの山路やまぢを靈山たまやま比古ひこの神かみよ

靈山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

如何にしても心落ちるぬ汝の姿

醜の曲神の化身とおもふ

よしやよし他の神々は闇を照らす

光に迷はむも吾は認めじ

千貝比女の神はニコニコしながら、

愚かしき言を宣らすよ汝が宣りし

生言靈に耀ひし吾魂よ

汝が宣りし生言靈の光なくば

吾は夜光の玉を得まじきを

兔にもあれ角にもあれや闇の道を

吾われに續つづきて登のぼらせ給たまへ

靈山たまやま比古まひこの神かみの御尾みお前まへ明あかさむと

吾われは夜光やくわうの玉たまを照てらすも

三柱みはしらの比女ひめがみ神かみ何いづれも汝なれが爲ため

夜光やくわうの玉たまを照てらして待まつも

靈山たまやま比古まひこの神かみは審いぶかしさに堪たへず、御歌みうた詠よませ給たまふ。

兔見とみ斯見しかみ汝なれが面おもざし眺ながむれば

三柱みはしら比女ひめがみの神かみとは思おもへず

兔とも角かくも夜よの明あくるまでは吾われは此處こゝに

生言いくこと靈たまを養やしなはむと思おもふ

女神めがみ 〇 愚おろかなる言こと靈たま宣のらすも靈たま山やま比ま古ひこの

神かみの眼まなこは迷まよひましけむ

斯かくの如ごと夜やく光わうの玉たまに照てらされて

吾わが面おもざしは變かはりて見みゆるも

眞ま書ひる見みる女神めがみと夜やく光わうの光かけに見みる

女神めがみの姿すがたはうつらふものを

山やま裾すその此こ處こは笹ささ原はら露つゆしげし

吾わが住すむ庵いほりへ進すすませ給たまへ 〇

靈たま山やま比ま古ひこの神かみは益ます々ます審いぶかしみながら、

〇 三み柱はしら比ひ女め神かみの庵いほりの此こ山やまに

ありと思おもへず欺たば罔かり言こと宣のるな 〇

女神めがみ 言靈ことたまの伊照いてり幸さちふ國くになれば

束つかの間あひにも庵いほりは建たつなり

世よの中のなか森羅あらゆるもの萬象ものは言靈ことたまの

水い火きに生いくると思おぼしめ召めさずや

湯結ゆむすびひめ比女かみの神かみは微笑ほほえみながら、

靈山たまやま比古まひこの神かみ山跡やまと比女ひめ千貝ちかひ比女ひめ

神かみの爭論いさかひ可笑をかしくもあるか

疑うたがひの雲霧くもきり互たがひに行ゆき交かひて

黑白あやめも判わかぬ闇やみの笹原ささはら

斯かくの如ごと吾われも夜光やくわうの玉たまを持もちて

萬里まの島根しまねの闇やみを照てらすも

あくまでも疑うたがひ給たまふは宜うべながら

汝も言靈の神にあらずや

靈山比古の神の疑ひ晴らさむと

夜光の玉をいざや隠さむ

靈山比古 山跡比女千貝の比女よ汝が持てる

夜光の玉も隠させ給へ

斯く歌ひ給ふや、三柱の比女神の姿も夜光の玉も全く消え失せて、四邊は咫尺
辨ぜぬ眞の闇となり、小笹を吹き渡る嵐の音のみ聞え來る其の凄慘さ、譬ふるに
もの無かりける。

茲に靈山比古の神は小笹を渡る山嵐の音と駿馬の鼻息のみ聞ゆる淋しき小笹ヶ
原に、兩腕を組み夜の明くるを待ちて戦はむとして、御歌詠ませ給ふ。

↵ 荒果てし小笹の原に迫りたる

闇はまさしく曲神の水火なる

掛巻くも畏き神の言靈に

夜光の曲津は消え失せにけり

笹原に山風立ちて肌寒く

この一夜を如何に明さむ

立向ふ曲神の征途に黄昏れて

吾止むを得ず言靈歌詠む

何事も吾魂線のささやきに

従ひ進まむ曲津の征途に

はからずも此處に出で來し比女神は

曲津の化身か眼光れる

眩しきまで光れる眼を光らせて

夜光の玉と偽る曲神

八百萬の醜の曲神集まりし

此山道は畏かりける

未だ稚き國原なれば曲津見は

恣なる振舞なすも

色々と姿を變へて迫り來る

この山下の曲神忌々しも

肝向ふ心の魂を光らせて

吾神業を遂げむとぞ思ふ

しきり降るこの俄雨は龍神の

業にやあらむ長續きせず

千早振る神の水火より生れたる

正しき吾は進むのみなる

俄雨降りて俄に止みにけり

曲神の力斯くも脆かり

久しきに堪へて戦ひ迫りつつ

醜の曲神を言向けてみむ

龍蛇神これの谷間に集まりて

非時雲を起す憎さよ

生言靈の水火の幸ひ著ければ

八十の曲津も何か恐れむ

浮雲の定まりもなき曲津見の

脆き奸計を破りて進まむ

黒雲は十重に二十重に包むとも

晴らして行かむ生言靈に

澄みきらふ吾言靈に恐れしか

龍蛇は比女となりて窺ひぬ

次々に夜光の玉と見せかけて

醜女は吾を欺かむとせり

奴婆玉の闇は迫れど吾持てる

神魂の光はますます明るし

吹き荒ぶ醜の嵐も曲神の

水火にありしよ頓に止みぬる

睦まじき女神の姿に體を變へて

吾を欺く醜女探女等

由縁ある比女神の名を騙らひつ

闇を照らして吾を誘へり

美しき比女神の姿を吾前に

現はせ誘ふ醜のたくらみ

畫にさへも書けぬ美しき優姿を

現はし吾眼を眩まさむとせし

健氣なる三柱比女神は斯の如

怪しき言靈宣らさざるなり

せせらぎの音のみ聞ゆる谷川の

傍の笹原は露のしづけき

天も地も常闇の如曇りたり

力限りに曲津の謀るか

寝もやらずこれの笹生に端坐して

夜の明くるまで吾は待たむか

隔てなき神の恵に守られて

醜の曲津に勝たむと祈る

目を閉ぢし如く見ゆるも常闇の

この山裾は曲津の入口か

の明くして紫雲棚引き、今日の征途を祝するがに覺えたり。
斯く一人闇の芝生に御歌詠ませつつ一夜を此處に明し給ひける。
東雲の空はほ

東の空は漸く東雲めて

紫の雲は棚引きにけり

百鳥の聲も爽けく聞え來ぬ

早昇りまさむ天津日の光は

百千谷の瀧津瀬の音はいや高く

響かひにつつ夜は明けにけり

(昭和八・一二・一五 舊一〇・二八 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)

第一五章 笹原の邂逅(一九四七)

靈山比古の神は、小笹の芝生に曲津見の計略も難なく逃れて一夜を明し給ひけるが、漸く東の空を照して昇らせ給ふ天津日の光に、蘇生の息を吐き給ひける。

折しも保宗比古の神、直道比古の神、正道比古の神、雲川比古の神の四柱は、
この場に悠々と駒の手綱をかくりながら現はれ來り、駒をひらりと飛び下り、
保宗比古の神は御歌詠ませ給ふ。

□ 靈山比古の神は事無くおはせしか

夜半を進みし醜の常闇に

吾こそは道の行手を塞がれて

咫尺辨ぜず途中に宿りし

東雲の空を力に立ち出でて

駒を急がせここに來つるも

靈山比古の神は答の御歌詠ませ給ふ。

□ 待ち待ちし四柱比古の姿見つ

わが魂線は蘇りたり

常闇の小笹ヶ原に夜をこめて

醜の曲津と言問ひしはや

醜女探女も夜光の玉を照らしつつ

吾を魔窟に誘はむとせし

三柱の比女神の姿と體を變へて

やさしく吾を誘ひしはや

龍神は眼を光らし吾前に

夜光の玉と偽りにける

いかにして進まむ由もなかりけり

咫尺辨ぜぬ黒雲の幕に

青臭き息に圍まれ玉の緒の

生きの生命を危ぶみにけり

これよりは部署を定めて各も各も

魔^{ます}棲^すヶ谷^{がやつ}に進^{すす}まむと思^{おも}ふ^〇

保^も宗^{ちむね}比^ひ古^この神^{かみ}は驚^{おどろ}きながら御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ^〇。

吾^{われ}も亦^{また}とある小^{ちひ}さき森^{もり}蔭^{かげ}に

やすらひにつつ夜^{やくわう}光^の玉^{たま}見^みし

三^み柱^{はしら}の比^ひ女^{めが}神^{みわれ}吾^{われ}にも現^{あら}はれて

夜^{やくわう}光^の玉^{たま}に誘^{いざな}ひにけり

如^い何^かにしても怪^{あや}しきものと思^{おも}ひしゆ

吾^{わが}言^{こと}靈^{たま}に逐^おひやりにけり

三^み柱^{はしら}の比^ひ女^{めが}神^{みたち}等^の面^{おも}ざしに

似^にたれど少^{すこ}しは怪^{あや}しと思^{おも}へり

兔^とにもあれ角^{かく}にもあれや夜^よの明^あくるを

待^またむと心^{こころ}定^{さだ}めたりしよ^〇

直道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 吾も亦醜の曲津の化身なる

三柱比女の神に逢ひける

曲津見の猛び忌々しければ吾許に

來れと彼等は誘ひにけり

よく見れば二つの耳は動きたれば

正しく曲神の化身と悟りき

言靈の水火をこらして曲神を

伊吹き拂へば消え失せにけり

色々と手段を持ちて曲神は

吾等が征途を防がむとすも

正道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

𠄎 吾前わがまへに三柱みはしら比女ひめは見えねども

夜光やくわうの玉たまの地ちに落ちおたるよ

吾わが伊い行くゆあたりの闇やみを射照いらして

夜光やくわうの玉たまはかがやきにけり

怪あやしみて吾手われてにふれず鞭むちもちて

打うてば夜光やくわうの玉たまは動うごけり

闇やみの夜よを照てらす眞玉またまと見みえけるは

正まさしく龍たつの眼まなこなりけむ

大おほいなる騒さわぎの音おとを立てたながら

夜光やくわうの玉たまは千々ちぢに碎くだけぬ

龍神たつがみの眼まなこは碎くだけ破やぶれつつ

獨眼龍どくがんりうとなりて逃にげしか

雲川くもかは比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

↵ 荒野ヶ原に吾も漸く黄昏れて

やさしき女に出會ひけるかも

先に立たす比古神等は悉く

滅び給へば進まずなと宣りし

怪しかる女神は秋波をよせにつつ

吾駒の首に飛びつきにけり

駒に鞭あつれば忽ちをどり上り

女神を捨てて駆け去りにけり

ここに來て始めて知りぬ比古神の

事なく在せしを雄々しき姿に

いざさらば天津日の光昇りませば

部署を定めて征途に上らむ

曲神の醜の奸計はこまやかに

手筈極めて待ちあぐむらむ

兔も角も今日の首途に先立ちて

この笹原に神言宣らむか

靈山比古の神其他の諸神は、雲川比古の神の提言に贊意を表し、天地も割るる許りの言靈をはり上げて、貴の神言を宣らせ給ひぬ。靈山比古の神は小笹ヶ原を流るる細谷川の清水に禊し給へば、四柱の神も吾後れじと健びの禊を修し給ひ、各自首途の御歌詠ませ給ふ。

靈山比古の神の御歌。

天晴れ天晴れ細谷川に禊して

吾言靈は清まりしはや

斯く迄も禊の神事の畏さを

悟らざりしよ愚かなる吾は

みそぎして吾氣體も魂線も

清めし上は恐るる事なし

吾魂は冴えに冴えつつ鳴り出づる

生言靈の力満ちぬる

玉の緒の生きの生命もさやさやに

清まりにつつ光を増しけり

奴婆玉の闇より黒き曲神の

魂を照らして勝鬨あげむか

はてしなき生言靈の力もて

進まむ今日の出で立ち樂しも

曲神の醜の砦も近づきぬ

いざや進まむ言靈照らして

八十曲津谷間に深くひそむとも

現はしくれむ言靈の光に

鷲の棲みしこの森林の谷間を

安く開きて吾は進まむ
□

保宗比古の神は御歌詠ませ給ふ。
□

□
楔して吾身はあかくなりけり

いざや進まむ魔榊ヶ谷に

萬里の島に永久にさやりし曲神の

滅ぶる時は今や來にけり

雲を起し霧を湧かしてすさびたる

曲神滅ぶと思へば樂し

千引巖あまた竝べて構へる

醜の砦も何か恐れむ

黒雲の中にかくれて邪氣を吐く

八十の曲津の終りなるかも

主スの神かみのたまひし嚴いづの言靈ことたまを

今日けふの楔みそぎに清きよめて進すすまむ

月つきも日ひも包つつみかくして荒すさびたる

魔ます棲すみがヶ谷がやつの砦とりでを放はならむ

直道なほみち比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

白馬はくばヶ嶽がだけの頂いただきまでも黒雲くろくもを

起おこして曲津まがは待まち構かまへ居をり

白馬はくばヶ嶽がだけ百も谷もだに千ち谷だにに黒雲くろくもを

湧わかせて曲津まがは吾等われらを遮さへぎれり

アオウエイの生言靈いくことたまに荒すさび狂くるふ

龍たつも大蛇をろちも生命いのちをたたむか

おとなしく服従まつろひ來くれば吾われも亦また

エロス
愛のこころを起して救はむ
御樋代の神の天降りし萬里の島を

清むも吾等が務なりける

田族比女神は泉の森蔭に

吾戦を守りますらむ

溪川をおつる瀧津瀬高けれど

水は残らず赤濁りたり

溪川の流を見れば曲津見の

こもれる水火の濁りなりけり

この水の流るる所浸みる所

木草は育たず穀物實らず

曲神の醜の砦を打ち破り

清き清水の瀧津瀬とせむ

さりながらこの一筋の細谷川は

楔みそぎの爲ために澄すみきらひたり

主スの神かみの楔みそぎせよとて造つくらしし

小川をがはと思おもへば尊たふとかりける」

正道まさみち比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㌶ 兩肩りやうかたに重荷おもにを負おひし心地こちして

神かみの神言みことをかしこみ進すすむも

夕ゆふされば曲津まがつの荒すさび強つよからむ

眞書まひるの閒うちによく戦たたかはむ

昨夜よべの如ごと曲津まがつの化身けしん現あらはれて

吾等われらを迷まよはす事ことの憎にくければ

曲神まがかみは眞書まひるを恐おそれ眞夜まよなか中かを

吾世わがよとなして猛たけび狂くるふも

夕ゆふされば戦たたか休みやす時ときじくに
生言いくことたま靈のを宣のりて明あかさむ
□

雲くも川かは比ひ古この神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☐ 雲霧くもぎりとなりて天地てんちを塞ふさぎたる

曲津まがつ見み今いまや滅ほろびむとすも

五男ごなんさん三女さんぢよの雄を々をしき神かみの行ゆく道みちに

いかなる曲津まがつもさやる術すべなけむ

兔とも角かくも醜しこの曲津まがつと戦たたかはむ

陽ひのある間うちぞ勝しょう利りなるべし

ほしいままに伊いた猛たけり狂くるふ眞ま夜よ中なかに

曲津まがつを攻せむるは益えきなかるべし

曲津まがつ見みは眞ま晝ひるの光ひかりを恐おそれつつ

雲霧くもきりとなりて地ちを包つつむなり」

斯かく御歌みうた詠よませ給たまふ折をりしも、三柱みはしらの比女神ひめがみは駒こまの轡くつわを竝ならべてこの場ばに悠々いういうと現あら
はれ給たまひ、山跡やまとひめ比女かみの神かみは馬ばじょう上じょうより御歌みうた詠よませ給たまふ。

五柱いつはしらの比古神ひこがみここに在おはせしか

昨夜さくやの闇やみを案あんじつつ來こし

吾われこそは御樋代神みひしろがみの計はからひに

後おくれて征途せいとに上のぼり來こしはや

曲神まががみは吾等われら三柱みはしら比女神ひめがみの

姿すがたまねぶと思おもひて後おくれしよ

御樋代みひしろの神かみの言葉ことばに從したがへば

曲津まがは吾等われらに身みを變かへしと聞きく」

靈山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代神の水ももらさぬ御計らひに

われは驚き畏むばかりよ

山跡比女神の宣らせる言の葉の

畏さ吾身に迫るものあり

曲津見は三柱比女の神と化し

吾誘ふと計らひしはや

さりながら吾魂線はささやきぬ

曲神の化身よ心許すなと

吾魂の囁き言葉に従ひて

曲の奸計の罨をのがれし

千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

五柱比古神等に後れ來しも

曲の奸計を思ひてなりけり

田族比女神の神言のさとき目に

吾も今更驚きにけり

吾來る道はほのぼの明るみて

月のかかれる野邊なりにけり

小笹原芝生に五柱神ますと

宣らせ給ひぬ御槌代の神は

御言葉の如く五柱比古神は

小笹ヶ原に待ち給ひける

斯くの如神の守りの強ければ

醜の曲神も何か恐れむ

湯結比女の神は御歌詠ませ給ふ。

三柱みはしらの比女神ひめがみよる夜のおほの大野がはらヶ原を

ほのつきかな月にて照らされてこ来し

吾わがきた來るおほの大野がはらヶ原に夜よは明あけて

駒こまの歩あゆみも早はやくなりける

言ことたま靈あまての天照たすり助かみくる神よの世に

醜しこの曲神まがみのいさかかで榮えむ

いざさらば諸神もがみたち等ことたまと言靈の

水いき火あはを合すすせて進すすみに進すすまむ

靈山たまやま比古まひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

斯かくの如ごと五男ごなん三女さんぢよの神柱かむばしら

集つどひし上うへは急いそぎ進すすまむ

さりながら神々かみがみたち等はあ各おのも各あも

部署を定めて攻め上らむかな[□]

ここに五男三女の神は各の部署を定め、遙か彼方の空に巍峨として峙つ魔棲ヶ谷さして進み給ふ事とはなりぬ。

(昭和八・一二・一五 舊一〇・二八 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録)

第一六章 妖術破滅(一九四八)

一行の先頭にたち、醜の曲津に對し征服戰主將と任せられたる靈山比古の神は、思ふところありてか、三柱比女神の言靈戰の部署を、廣原の片方にこんもりと立てる楠の樹の根元と定め、如何なる事ありともアオウエイの言靈の聞ゆる迄は、一步も此處を動き給はず、吾等が戰鬪を援くべく生言靈の光を放ち、ひかへさせ給へと、かく命じ置き、靈山比古の神は深谷川の右側を、保宗比古の神は左側を、

直道比古の神は第二の谷間の右側を、正道比古の神は第二の谷川の左側を、雲川比古の神は最左翼を、各自言靈を間断なく宣り上げつつ登らせ給ふこととはなりける。

ここに曲津神等は、五柱の神の激しき鋭き清き赤き照り渡る言靈の水火の力に怖ぢ恐れ、登山を防がむとして八十の曲津見を驅り集め、何れも巨大なる千引の巖と化せしめ、神々の登らす道の前途に、折り重なりて遮りたれば、一步も進みたまふこと能はざるに至りたり。されど神々は何れも神世に於ける無雙の英雄神におはしましければ、かかる曲津神の全力をつくしての防禦も何のものかはと、強行的に生言靈を宣り上げながら各自に進ませ給ふぞ雄々しかりける。

ここに靈山比古の神は、駒を小笹ヶ原の楠の樹蔭に遊ばせ置き、右側の谷間を強行的に攀ぢ登らせ乍ら、心靜かに言靈歌を詠ませ給ふ。

白馬ヶ嶽はさかしとも

魔棲ヶ谷は深くとも

千引の巖はさやるとも
山氣は怪しく濁るとも
主の大神のヲの聲に
なり出でここに靈山比古の神と
御名を賜ひし吾なれば
如何でひるまむ魔の山も
靈の神山と淨めつつ
萬里の島根の雲霧を
生言靈に伊吹き拂ひ
雲霧隈なく晴らしつつ
國土にわざ爲す太刀膚の
大蛇を始め肝向ふ
心きたなき大蛇の輩を
言向け和しならざれば

わが言靈の劍もて
百段千段に斬り放り
國土の災をば永久に
除きまつらむ惟神
神は吾等と俱にあり
吾はもとより主の神の
ヲ聲の言靈御子なれや
永久に鎮まる主の神の
貴の宮居なり生の宮居よ
かくも尊き言靈の
水火を保ちて世に出でし
われは眞言の主の神の
貴の御樋代御手代よ
ああ勇ましき今日の旅

魔神まがみは如何いかにさやるとも

大蛇をろちの荒すさびしげくとも

百津ゆついはむら石村ちびきいはの千引巖

吾等われらが行手ゆくてを圍かこむとも

何かなにあらむや言靈ことたまの

貴うつつの劍つるぎをぬきかざし

力ちから限かぎりに進すすむべし

ああ面白おもしろや面白おもしろや

天地あめつち開ひらけし初はじめより

かかるとめしはあら尊たふと

萬里まの島根しまねを永久とこしへに

うら安國やすくにと定さだむべく

魔神まがみの征途きために向むかふこそ

實げに勇いさましき次第しだいなり

ああ惟神々々
かむながらかむながら
生言靈に幸あれや
いくことたま さち

かく御歌詠ませ給ひつつ
さしもに嶮しき荆棘の道を
みうたよ たま

深谷川に添ひ乍ら
ただ一柱悠々と
ふかたにがは そ なが

進ませ給へば曲津見の
群は見上ぐるばかりの巨石となり
すす たま まがつみ

幾百千とも限りなく
道の前途を塞ぎつつ
いくひやくせん かぎ

崩れかからむと搖ぎ出す
その光景の凄じさ
くづ たまやまひこ

靈山比古の神は曲津見の
いたづらならむと恐れげも
たまやまひこ かみ まがつみ

なく巖をば飛び越えて
登らせ給へば百千々の
いはま と こ

千引の巖は各も各も
綿の如くにゆるぎ出し
ちびき いは おの おの

事の意外にあきれたる
その活劇のをかしさに
こと いぐわい

靈山比古の神は其の中の
最も巨大なる巖の上に
たまやまひこ かみ そ なか

突つ立ち給ひつつ 化身の巖を悉く

タトツテチ、カコクケキと 生言靈を宣り上げて

眞言の巖と爲し給へば さすがの邪鬼も動き得ず

かすかに呻吟の聲たてて 進退不動となりける。

曲津見の醜の奸計の淺はかさ

われを奸計らひ謀られけるも

曲津神は數の限りを集めつつ

巖となりてわれにさやれり

さやりたる曲津見の神の化け巖を

わが言靈に眞巖と固めし

かくならば曲津神等も動くべき

力なからむああ面白し

曲津神の奸計は深く見ゆれども

生言靈に容易く亡ぶる

亡ぶべき運命を持てる曲津見の

雄猛びこそは憐れなりけり

わが立ちしこれの巖も曲津見の

中に勝れし輩なりける

東側の谷間の悪魔ことごとを

率ゐし曲津を足下にふまへるも

曲津神は身動きならぬ常巖と

なりてかすかにうめきゐるかも

かく歌はせ給ふ折しも、百千の巖は谷間に向つて百雷の落つるが如き大音響を
たて、佐久那太理に落ちくだち始めたり。

靈山比古の神は、この光景を面白しと大巖の上に立ちて瞰下し給ふ折しもあれ、

三柱比女の神は靜かに登り來まし、千引の巖に壓せられ泣き叫び給ふ聲、天地も割るるばかり聞えける。ここに靈山比古の神は三柱比女神を救はむと、巨巖の上より飛び下り給はむとせしが、俄に心付き給ひて、待てしばし、三柱の比女神は楠の大樹の下蔭に言靈照して鎮まりいませば、この谷間を登り來まさむ理由なし。曲津神は一計を案じ、吾目をくらまし、三柱比女神と見せかけわが救ひゆく谷道に、上より巨巖となりし惡魔は落ち來て、わが氣魂を碎かむ奸計なるべしと思召すより、平然として三柱の神の悲鳴を瞰下し給ひつつ御歌詠ませ給ふ。

三柱比女の神にはあらで醜神の

醜の奸計よ面白きかな

如何程に泣き叫ぶとも曲津神の

醜の奸計よ比女は無事なり

比女神をわれ救はむと下りなば

これの巖はわれを打つべし

永久とこしへにこの巖いはヶ根がねを地つち深く
埋うづめて千代ちよのこらしめとせむ
□

ここに靈山たまやま比古まひこの神かみは、大巖おほいはの上うへに四股踏しこふみならし給たまへば、未まだ地つち稚わかきこの谷たに
川邊がはへは、一足踏ひとあします毎ごとに巨巖きよがんは土中どちうに一尺餘いつしやくあまりも、め入り込こみて遂つひには其その表面へうめん
を地上ちじやうに現あらはずばかりとなりける。

ここに靈山たまやま比古まひこの神かみは、この巖いはを憩所やすどとし、暫しばし水火いを休やすめて、作戦計畫さくせんけいに時とき
を移うつし給たまふ。折をりしもあれ、

□ 靈山たまやま比古まひこの神かみの功いさをの尊たふとさを

見みむとてわれは天翔あまかけり來きつ

清水しみづ湧わく泉いづみの森もりを立たち出いでて

われいや先にさきに此處ここに來きつるも

かくの如功ごとこさをのしるき汝なれなれば

いざや進すすまむ龍りゅうの巖窟いはやへ

われこそは御樋代神みひしろがみの田族比女たからひめよ

ゆめ疑うたがふな靈山比古たまやまひこの神かみ」

靈山比古たまやまひこの神かみは御歌みうたもて應こたへ給たまふ。

御樋代みひしろの神かみと白まをすは偽いつはりなるよ

わが眼めは清すがしわが魂たま明あかし

曲津見まがつみは御樋代神みひしろがみと身みを變へんじ

われ亡ほろぼすと奸計たくらみ居ゐるも

わが敏とき眼迷めまよはさむとする曲津神まがつかみの

奸計たくみの罨わなの淺あさはかなるも

眞汝まことなれは御樋代神みひしろがみにあるならば

わが言靈ことたまに應こたへまつれよ

カコクケキ輝かがやき渡わたる主すの神かみの
水い火きの力ちからに曲津まがを照てらさむ
汝なれこそは魔ます棲みケ谷がやつにたてこもる
龍りうに仕つかふる魔ま神がみなるべし㊦

かうたく歌たまひ給みへば、御み樋ひ代しろ神がみに變へん装さうしたる邪じゃ神しんは、何なんの應いへもなく、言げん句くつまり、
身しん體たい震ふるひ戦をのき、次し第だい々しだいに姿か細ほり、煙けむりの如ごとく消きえ失うせにける。

面おも白しろし曲津まがの神かみの奸た計くらは

今いまや煙けむりとなりて消きえぬる

百も千ち々ぢの巖いはと變かはり三み柱しらの

比ひ女め神がみと化なりさやぐ曲津まがかも

曲津まが見みは再ふたび御み樋ひ代しろ神がみとなり

われ惱なやますと現あらはれしはや

言靈ことたまの水い火きの力ちからに敵てきしかねて

煙けむりと失うせけり曲津見まがつみの神かみは

白馬はくばヶ嶽が百谷ももだにちだに千谷ちだにに潜ひそみたる

曲津まがはしきりに黒雲くろくも吐はくかも

曲津神まががみもここを先途せんどと戦たたかふか

百谷ももだにちだに千谷ちだにに黒雲くろくもたちたつ

巖いはとなりてころげ落おちたる曲津神まががみの

猛たけびの音おとは天てんにとどけり

いざさらば生言靈いくことたまの劍つるぎもて

曲津まがの砦とりでに直ただに向むかはむ

見渡みわたせば千峽ちがひ八百峽やほがひことごとく

あやめもわかぬ黒雲くろくも包つつみぬ

わが立たてるこの巖いはヶ根がねの四方よも八方やもは

雲霧くもぎり晴はれてそよ風渡かぜわたるも

三柱みはしらの比女神ひめがみもしも登のぼりませば

われは魔神まがみにあやまたれけむ

三柱みはしらの神かみは何處どこまでも動うごかじと

誓ちかひ給たまへばわれ憚はばからじ

三柱みはしらの神かみの惱なやみと見みせかけて

われを奸計はからふ曲津まがぞ淺あさまし

御樋代みひしろの田族たからの比女ひめの神柱かむばしらと

なりて曲津まがは欺あざむかむとせり

田族たから比女神ひめがみは泉いづみの清森すがもりに

いまして光ひかりを送おくらせ給たまふも

曲津神まがの奸計たくみは深ふかく見みゆれども

爲なす業見わざみれば淺あさはかなるも

曲津見まがの部いちぶは巖いはと固かたまりて

わが魂線たましひはしばし休やすらふ

今いまよりは向むかつ谷たに邊へに渡わたらひて

保宗もちむね比古ひこの神業みわざたすけむむ

(昭和八・一二・一五 舊一〇・二八 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録)

第一七章 劍槍けんさうの雨あめ〔一九四九〕

主スの言靈ことたまに生なり出いでし

紫微しびてん天界かいの中なかにして

萬里ばんりの海うみに浮うかびたる

萬里まの島根しまねは地稚つちわかく

國內くぬち未いまだに定さだまらず

雲霧四方に塞がりて
時じく邪鬼は跳梁し
森羅萬象の生命を
損ひ破る忌々しさに
御樋代神と生れませる
田族の比女の神柱
此土の司とましまして
森羅萬象を守らむと
萬里ヶ丘なる聖所に
假の御舎建て給ひ
十柱神を従へて
朝な夕なに太祝詞
宣らせ給へど如何せむ
國土の初めに生れたる

邪氣じやきのかたまり太刀膚たちはだの

醜しこの龍神たつがみ大蛇をろち等は

吾物わがもの顔がほに跳梁てつりやうし

萬里まの島根しまねは常闇とこやみの

淋さびしき世界せかいとなりにけり

田族たからの比女ひめの神司かむつかさ

この慘状さんじやうを除のぞかむと

いよいよ十柱とほしらかみ神々がみを

從したがへ泉いづみの森林しんりんに

其その本營ほんえいを定さだめまし

白馬はくばヶ嶽がだけの南側なんそくの

魔樓ますみヶ谷がやつに立たて籠こもる

醜しこの曲津まがつに言靈ことたまの

征矢そやを放はなちつ照てらさせつ

吾等八柱神司
われらやはしらかむづかさ

いよいよ魔樓ヶ谷の奥深く
ますみがやつ おくふか

進ませ給ふ今日こそは
すす たま けふ

天地開けしはじめより
あまつちひら

例もあらぬ神業ぞ
ためし かむわざ

ああ惟神々々
かむながらかむながら

主の大神の言靈の
ス おほかみ ことたま

水火の幸ひいちじるく
いき さちかは

八十の曲津を悉く
やそ まがつ ことごと

言向け和せ此の國土の
ことむ やは こ くに

雲霧も隈なく掃蕩し
うんむ くま さうたう

心安國の心安く
うらやすくに うらやす

生きとし生けるものみな
い い

生命を永久に守るべく
いのち とは まも

吾言靈に極みなき

生命と光を賜へかし

谷の流れは涼々と

木靈に響き山風は

吾等の前途に吹き荒ぶ

八十の曲津は今日の日の

言靈戦に辟易し

周章狼狽せし結果

いろいろ雑多に身を變じ

あらゆる詐術を施して

必死となりて防ぐなる

此の首途の面白さ

曲津の奸計の深くとも

魔棲ヶ谷は暗くとも

谷たにの流ながれは濁にごるとも
道みちの難なん所じよは多おほくとも
如い何かで恐おそれむ言こと靈たまの
水い火きの力ちからにいすや進すすみ
曲ま津がの砦とりでに立たち向むかひ
生いく言こと靈たまの光ひかりもて
根こん本ぼん的てきに顛てん覆ぶくし
此この世よの害がいをのぞくべし
吾われ等らは神かみの子こ神かみの宮みや
生いく言こと靈たまの水い火きかりて
現あらはれ出いでしものならば
進すすまむ道みちに仇あだをなす
曲ま津がはことごと消きえ失うせむ
ああ面おも白しろや勇いさましや

神の依さしの今日の旅
守らせ給へと主の神の
御前に慎しみ願ぎ奉る
御前に慎しみ願ぎ奉る
御前に慎しみ願ぎ奉る
御前に慎しみ願ぎ奉る

斯く歌ひつつ、保宗比古の神は谷間を傳うて登らせ給ふ折もあれ、靈山比古の神の神力に、巖と固まりし曲津の化身なる石村は、雨霰と谷底に向つて矢を射る如く急轉直下し來り、前後左右に落下するさま、百雷の一時に轟く如く、百狼の一時に吠え猛るが如く、川底の石と石と相打ちて迸る火光は、恰も電光の閃けるが如くにして、其凄惨のさま、形容すべからざるに到りける。岩飛礫の雨の中に悲鳴をあげて號泣する女神あり。保宗比古の神は、聲する方に眼を注がせ給へば、豈計らむや、御樋代神にまします田族比女の神は、巨巖に壓せられ九死一生の苦難に遇ひ給ふにぞありける。

保宗比古の神は、素破一大事、身命を賭しても御樋代神の御身を救ひ奉らむと、

今や谷間に向つて飛び込まむとし給ひし刹那、何神の聲とも知らず、空より一口
「待て」との大喝一聲耳に響きければ、保宗比古の神は、はつと氣が付き、御樋
代神は泉の森の本營におはしまして、一步も進ませ給はざれば、かかる谷間にお
はす筈なし、全く醜神の吾等を苦しめむとする奸計なるべしと思ほすより、俄に
勇氣百倍し、谷底に雨霰と時じく落ちくだつ巖の雨を打ち見やりつつ、平然とし
て御歌詠ませ給ふ。

面白し魔樓ヶ谷の曲津見の

力限りの演劇なるかも

千引巖の降るよと見しは曲神の

醜の輩の斷末魔なる

靈山比古神の宣らせる言靈に

曲津は石となりて落ちしよ

斯くならば此の谷沿ひ曲津見の

その大方は潰えたるらし

三柱の比女神たちの宣り給ふ

生言靈かあたり明るし

耳すませ瀧津瀬の音を窺へば

三柱神の御聲響けり

百條の谷の流れを集めたる

この大谷の水は濁れり

谷底ゆ湧き立つ霧は膨れ膨れ

龍の形となりて昇り來

面白く姿を變ふる谷の間の

霧は次第に薄らぎゆくも

雷轟き電光走り、驟雨沛然として臻り、白馬下しの風は、さしもに重き千引の巖

斯く御歌詠ませ給ふ折しも、空俄に黒雲襲ひ來り、咫尺を辨ぜず常闇となり、

を木の葉の如く吹き散らし、槍の雨、劍の雨、閒斷なく保宗比古の神の身邊に向つて殊更しげく降り注ぎ、その危険到底言語のつくし得べからざるに迫りける。曲津神は此處を先途と全力を盡して保宗比古の神の征途を扼し、且つ滅亡せしめむと、必死の力をここに集注せしなり。

保宗比古の神は、曲神の猛烈なる邪氣に圍繞されて、呼吸つまり胸苦しく、頭は痛み出し手足の働き全く止まり、生言靈に使用すべき天の瓊矛なる舌は、硬ばりて如何ともするに由なく進退ここにきはまりて唯曲津見の爲すがままに任せ死を待つより外何の手段もなかりける。

かかる所へ泉の森の彼方より、巨大なる火光轟々と大音響をたて、天地を震動させながら、保宗比古の神の頭上高く光りて、前後左右に舞ひ狂ひければ、谷間の邪氣は跡形もなく消え失せ、巖の雨も槍劍の暴雨も影をかくし、天地寂然として太陽の光隈なく伊照らし給ひければ、ここに始めて保宗比古の神の生言靈は活動の自由を得、身心忽ち爽快となりて、幾千億の敵にも屈せざる大勇猛心に蘇へり給ひけるぞ畏けれ。

面白き曲津の神のすさびかな

醜言靈のわざをぎ始めし

劍槍巖の雨を降らせつつ

吾身の周圍を驚かせける

吾もまた醜の曲津に圍まれて

身動きならず苦しみしはや

曲津見も侮り難き力もちて

神のいくさをなやませしはや

時じくに生言靈を唱ふべき

道忘れをり心あせりて

吾神魂進退ここにきはまりしを

助けたまひぬ御樋代の神は

知らず識らず心驕りて曲津見の

醜の奸計におちいりにけり

今更いまさらに吾魂わがたましひ線の緩ゆるみたる

こと悔くゆれども詮せんなし恥はづかし

今いまよりは心こころの駒こまを引ひきしめて

時ときじく宣のらむ貴うづの神言かみことを

曲津見まがつみの影かげはあとなきく消きえ失うせて

谷間たにまを渡わたる風かぜの音ね清すがしき

淙そう々と落おちて流ながる瀧津瀬たきつせの

水音みなおとさへも冴さえ渡わたりける

曲津見まがつみは第一だいいつせんに敗はい北ぼくし

魔棲ますみヶ谷がやつの奥おくに隠かくれしか

飽あくまでも追撃つゐげき戦せんを繼けい續ぞくし

神かみの依よさしの神業みわざを遂とげむ

向むかふ岸ぎしの巖いはほの上うへに言靈ことたまの

光ひかりを放はなちて靈山たまやま比古まひこは立たたすも

靈山比古神の祈りに御樋代神は

光となりて出でましにけむ

靈山比古神の著けき神力に

比べて吾は小さきものなり

知らず識らず曲神をきたむと吾心

驕りしものか憂き目に遇ひしよ

第一の曲津の作戦かくのごと

激しきものとは思はざりしよ

次々に醜の曲津は全力を

盡して吾等に迫り來るらむ

寡をもちて衆に對する此の神業

なみなみならぬ言靈戰なり

靈山比古神の姿はつぎつぎに

小さく見えつ高のぼりませり

吾もまた生言靈の光にて

これらの谷間をのぼり進まばや

谷の間を深く包みし黒雲の

影消え去りて輝く日の光

保宗比古の神はかく述懐歌をうたひながら、岩根木根踏みさくみつつ神言を不
斷的に宣りあげて、魔棲ヶ谷の森林さしてのぼらせ給ひける。

（昭和八・一二・一六 舊一〇・二九 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録）

第一八章 國津女神（一九五〇）

永久に動かぬ萬里ヶ丘

下津岩根したついはねに立たたせませます

御樋代神みひしろがみの大御前おほみさき

仕つかへ奉まつりて荒野原あらのはら

駒こまに跨またがりとうとうと

泉いづみの森もりに立たち向むかひ

ここにやうやく黄昏たそがれて

月下げつかの清水しみづに楔みそぎしつ

一夜いちやの露つゆの雨宿あまやどり

魔ます棲すみヶ谷がやつの曲神まががみを

征服せいふくすべく事謀ことはかり

御樋代神みひしろがみはこの森もりを

大本營だいほんえいと定さだめまし

輪守わもりの比古神ひこがみ左守さもりとし

若春わか比古はるひこを右守うもりとし

五男三女の吾々は
白馬ヶ嶽の曲津見を
征服せむと勇み立ち
駒の手綱を引きしぼり
馬背に鞭を當てながら
果しも知らぬ萱野原
一目散に馳せ渡り
小笹ヶ原の楠の森
此處に一行相會し
いよいよ作戦計略を
定めて各一條の
道をたどりて攻めのぼる
今日の生日は御空晴れ
吹き來る風もさはやかに

谷間たにまを落おつる瀧津瀬たきつせの

音涼々おとそうそうと聞きゆなり

吾われは斗聲ごゑの言靈ことたまに

鳴なり出いで茲ここに神かみとなり

御樋代神みひしろがみに從したがひて

萬里まの島根しまねに仇あだをなす

八十曲津見やそまがつみの禍わざはひを

殘のこる隈くまなく拂はらはむと

生言靈いくことたまの力ちからもて

岩石崎嶇がんせきたる近道ちかみちを

岩いはの根木ねきの根踏ねふみさくみ

登のぼり行ゆくこそ樂たのしけれ

今いままで晴はれし大空おほぞらは

忽たちまち黒雲くろくもふさがりて

てんじつひかり うしな
天日光を失ひつ

たにま わ た
谷間に湧き立つ深霧は

ひろ っ っ
ふくれ擴がり次ぎ次ぎに

かたち
あやしき形をあらはして

けむり ごと も あが
煙の如く燃え上り

ゆ みち
わが行く道をさへぎりぬ

かむながらかむながら
ああ惟神々々

いくことたま みひかり
生言靈の御光に

しこ まが っ まがわさ
醜の曲津見の曲業を

しりぞ ち もと ごと
退け散らし元の如

きよ あまつひ
清くさやけき天津日の

ひかり て たま
光を照らさせ給へかし

しんべん っ っ
わが身邊を包みたる

くも きり
雲と霧とにひそみたる

曲津見の邪氣はものすごく

吾に迫りて息さへも

全く苦しくなりけり

ああ惟神々々

わが言靈に命あれよ

生言靈に幸あれよ

斯く歌はせたまひつつ、谷川の難路を攀ぢのぼりたまふ折しもあれ、前後左右より飛び出したる凄じき猪の群は、直道比古の神の前後左右を取り巻き、鳥のごとく頭上を飛び交ひ、鋭利なる爪をとがらせ、比古神の兩眼を掻きやぶらむと迫り來るにぞ、今はこれまでなりと、直道比古の神は臍下丹田に息をこらし、芝生の上に端坐しながら、天に向つて兩手をあはせ、

一 ひとふたみよいつむゆななや
二
三
四
五
六
七
八

ここのたりもも ちよろづ
九 十 百 千 萬 の 神 よ

あつ 集 ま り ま し ま し て

ま が つ 曲 津 見 の 征 途 に 立 ち 向 ぶ

わ が ゆ 行 く 道 に さ や り た る

ま が つ 曲 津 見 の 群 を こ と ご と く

お 追 ひ そ け 給 へ 惟 神

ス お ほ か み 主 の 大 神 の 御 前 に

あ か き よ 赤 き 清 け き 村 肝 の

こころ 心 照 ら し て 願 ぎ 奉 る

かむながら ことたま 神 言 靈 の

い き 水 火 の 力 に 光 あ れ

か う た 斯 く 歌 は せ 給 ふ や 、 四 邊 を 包 み し 雲 霧 は 次 第 々 々 に う す ら ぎ て 、 天 津 日 の 光 は
た に ま た 谷 間 を 照 ら し 給 ひ け れ ば 、 直 道 比 古 の 神 は 神 德 の 宏 大 な る に 感 泣 し つ

つ、道の傍の巖の上に端坐して息を休め、且つ御歌詠ませ給ふ。

わが行手閉ぢふさぎたる雲霧も

宣る言靈に散り失せにけり

曲神はわが行く先にさやりつつ

力かざりに刃向ひ來るも

醜草を薙ぎて放りて進みゆかむ

言靈劍ふりかざしつつ

萬里の島の曲津見悉集まりし

魔棲ヶ谷は清めでおくべき

醜神を斬りて放りて萬里の島の

あらゆるものの水火を守らむ

濁りたる水火に包まれ森羅萬象は

生氣褪せつつ萎びるかも

雨あめとなり雲霧くもぎりとなり巖いはとなりて

曲津まがみ見は前途ぜんとをさへぎらむとすも

靈山たまやま比古保宗ひこほね比古ひこの二柱ふたはしら

神かみの功いさをを知りたくぞ思おもふ

谷たにべりの荊棘けいきよく分けて進すすみ行ゆく

道みちの隈手くまでを守まもらせてたまへ

仰あふぎみれば魔樓ますみヶ谷がやつの空高そらたかみ

醜しこの黒雲くろくもしきりに湧わき立たつ

百千谷ももちだに飛とび越こえ草くさむら分わけ登のぼる

わが行ゆく道みちに恙つつがあらずな

御樋代みひしろの神かみの御稜威みいづに守まもられて

曲津まがみのすみかを吾わが登のぼり行ゆくも

尾をの上へ吹ふく風かぜの響ひびきもさやさやに

わが踏ふむ山路やまぢの草くさはなびけり

雲霧くもぎりとなりてさやりし曲津まがつ見は

魔棲ますみケ谷がやつに逃にげ去さりにけむ

曲津まがつ神かみの醜しこの奸計たくみのあさければ

またもや破やぶれむ生言靈いくことたまに

五柱いつはしらの神かみの打うち出だす言靈ことたまに

千萬ちよろづの曲津まがつは遂つひに滅ほろびむ

御樋代みひしろ神かみ三柱みはしら比女神ひめがみ遠とほくより

生言靈いくことたまの光照ひかりらせり

御樋代みひしろの神かみの御稜威みいづの尊たふとさを

初はじめて知しりぬおるかしき吾われは

遠とほくおもひ深ふかく計はかりて御樋代みひしろの

神かみは泉いづみの森もりにいますか

清水しみづ湧わく泉いづみの森もりは主スの神かみの

水火いの凝こりたる御舍みあらかならむ

夕ゆふされば曲ま津がは猛たけばむ天あま津つ日の
ある間まに進すすまむ魔ます棲みヶ谷がにつ

斯かく歌うたひ給たまふ折をりしも、大おほいなる巖いはの蔭かげより、朱あけに染そみたる布ぬのを抱かかへながら、兩りやう
眼がんを腫はらせ、泣なき沈しづみつつ降くだり來きたる女め神がみあり。この女め神がみは直なほ道みち比ひ古この神がみの御み前まへに
近ちかみ來きたり、兩りやう手を合あはせ、うづくまり、嗚をえ咽つ涕てい泣きし、何なに事ごとか訴うつるもの如ごとく、全ぜん
身しんに波なみを打うたせぬる。

直なほ道みち比ひ古この神がみは、こは様やう子すあらむと女め神がみの背せを撫なでさすり、言こと葉は淑じゆかに、

何なに神がみにおはしますかしは知しらねども

名な乗のらせ給たまへ汝なれがありかを

邪まが神がみ棲すむこの高たか山やまに如い何かにして

一ひとり人ひといますかいぶかしみ思おもふに

女神めがみ 吾われこそは白馬はくばヶ嶽がだけの峽かひに住すむ

尾上をのへと申まをす國津神くにつかみなり

時ときじくに醜しこの曲津まがつに攻せめられて

吾われは一人ひとりを苦くるしみつづくる

天津神あまつかみ曲津まがの征途きためにのぼりますと

聞きくより吾われは迎むかへ奉まつりぬ

朝夕あさゆふを涙なみだに暮くらす國津神くにつかみの

淋さびしき境遇すくせを助たすけたまはれ

御樋代みひしろの神かみに仕つかへし汝なが神かみの

力ちからにすがると迎むかへ來きつるも

わが庵いほは千引ちびきの巖いはの片蔭かたかげよ

いざや暫しばしを休やすませたまへ

いざさらばわが住すむ庵いほに導みちびかむ

續つづかせ給たまへ天津大神あまつおほかみ

斯く歌もて答へつつ静々と前に立ち、立居物腰も淑かに進むにぞ、直道比古の
神は怪しき者御參なれと思召しつつ、さあらぬ體にて女神の後に従ひ、千引の巖
蔭のささやかなる萱もて葺きたる庵の前に近づき、内にも入らず佇ませ給ひける。
比女神は庵の内より、細き悲しき聲を張り上げて、

直道比古神の神言よみにくけれど

わが家に入りて休ませ給へ

願ひたきことの山々ありぬれば

入らせ給へよ庵の内に

父も母もわが同胞もことごとく

ほろびてかなしき一人住居よ

曲津の棲む魔棲ヶ谷は道遠し

しばしを休らひ出で立ちまさね

雄々しかる神の助けに吾もまた

邪神まがみの棲處すみかを知らせ奉らむ
兔とも角かくも曲津まがの奸計たくみのことごとを
さとりし吾われをうべなひ給はれたま

女神めがみは小ちひさき庵いほりの内なかより細ほそき優やさしき聲こゑを張はり上あげて、頻しきりに比ひ古こ神がみを庵いほりの内なかに
入いらせ給たまへと勸すすめたりけれども、直道なほみち比古ひこの神かみは頭腦づなうめいびん明敏めいびんにして容易よういに迷まよひ給たまは
ず、萬一まんいちこの庵いほりに吾われ入いりなば、千引ちびきの巖いはは忽たちまちわが頭上づじやうに倒たふれ來きたり、身しん體たいを木端こつぱ
微塵みぢんに打うち碎くだくべき邪神まがみの計略けいりやくならむと一歩いつぱも動うごき給たまはず、御歌詠みうたよませ給たまふ。

くさぐさの甘あまき言葉ことばに誘いざなふも
吾われは迷まよはず曲津まが見みの畏わなには
汝なれこそは大蛇をろちの化身けしんよ巖いはヶ根がねに
永と久はにひそみて禍わざなせし神かみよ
いざさらば汝なれが正體まさみをあらはして

神かみの力ちからを照てらして見みむかも

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七な八な九や十この

百も千ち萬よろ千づ萬ちの神かみよ

生言靈いくことたまの光ひかり照てらさせ給たまへ

惟かむ神ながら御靈みたま幸倍さちはへおはしませ

と大音聲だいおんじやうに呼よばはり給たまへば、以い前ぜんの女め神がみは忽たちちものすいぎ長ナ大身ーガラシヤと還くわんげん元げんし、黒くろ雲くもを起おこし、魔ます樓すヶ谷がやつの方はう面めんさして一いつ瀉しや千せん里りの勢いきほひをもつて逃にげ出いだすこそ恐おそろしき。

醜しこ神がみは奸たく計みの裏うらを看みやぶ破ぶられ

生言靈いくことたまに逃にげ失うせにけり

比ひ女め神がみとなりてわが身みをああざむむきし

大蛇をろちの奸計たくみは破れやぶけるかも

千引ちびき巖いはそよ吹ふく風かぜにもゆらゆらと

動きうご出いだせり邪神まがみの化身けしんか

邪神まがみならばわが言靈ことたまに吹ふき散ちれよ

一ひと二ふた三み四よ五いつ六むゆ七なな八や九この十たり

百千ももちよろづ萬づと皆みなまで宣のらせ給たまはぬに、さしもに高たかき廣ひろき大おほいなる千引ちびきの巖いはヶ根がねは、枯かれ
木の倒たふれる如ごとく谷間たにまに向むかつて顛落てんらくし、百雷ひやくらいの落おつるが如ごとき聲こゑたてて百千ももちよろづ萬づの破は片へん
となり、脆もろくも溪流けいりうに落おち入いりにける。

曲津まがつみ見みの醜しこの奸計たくみのあさはかさ

千引ちびきの巖いはも千々ちぢに碎くだけつ

大空おほぞらの雲くももやうやく吹ふき散ちりて

この山道やまみちに陽ひはかをるなり

百千花道の左右に咲き満ちて

吹きくる水も芳ばしきかな

澄みきらふ水火をくまなく呼吸して

吾氣魂はよみがへりたり

今よりは天津祝詞を奏上し

邪神の砦を粉碎せむかな

(昭和八・一二・一六 舊一〇・二九 於大坂分院蒼雲閣 内崎照代謹録)

第十九章 邪神全滅 (一九五一)

茲に五柱の男神は、谷間の嶮を千辛萬苦を重ねつつ辛うじて突破し、魔樓ヶ谷を圍める丘の廻りに佇み給ひて、各自力限りに生言靈の征矢を間斷なく放ち給ひ

ければ、遠の曲津見も居耐らず此處を先途と必死の力を現はし、百千の邪神は雲霧となり岩となり火の玉となり、前後左右に狂ひ廻り、幾度となく五柱神の身邊を襲ひ危険刻々に迫りければ、靈山比古の神はもはやこれ迄なりと臍下丹田に力を籠め、

ア オ ウ エ イ

と繰り返し繰り返し宣らせ給ひければ、山麓の小笹ヶ原の傍なる楠の森に、手具脛ひいて待ち給ひける三柱の比女神は、わが乗り來りし駿馬に向ひ、

タ ト ツ テ チ

ハ ホ フ ヘ ヒ

と力限りに言靈を宣り給ひけるにぞ、駒は忽ち大なる翼を生し、長大なる鷲と化しけるにぞ、三柱比女神はこれぞ全く神の賜なりと、鷲馬の背に跨り、一目散に魔棲ヶ谷の邪神の巢窟さして中空高く翔りつき給ひ、天上より大なる鷲の嘴もて、龍神の頭を啄き、或は太刀膚を傷り、獅子奮迅の勢をもて挑み戦ひ給へば、遠の曲津見も敵し得ず、谷川は忽ち血の川となりて邪神の影は跡もなく清まりける。

この大勝利を見るよりも、三柱の比女神は、其儘中空を翔り、御槌代神の屯し給ふ泉の森をさして、一目散に復命申し給ひ、御槌代神の感賞の言葉を頂き給ひける。

扨て五柱の比古神は、大蛇の群の永久に棲みし魔棲ヶ谷の巢窟に、生言靈を宣りつつ進み給へば、周章狼狽のあとありありと見えて、數多の寶玉は彼方此方に飛び散りて、目も眩ゆきばかりなりければ、五柱の男神は戦利品として悉く拾ひ歸り、田族比女の神に奉らむと評議一決し、金銀、瑪瑙、瑠璃、碑磔、白金、金剛石なぞ、數限りなき寶玉を五つの苞に包み、勝鬨あげて一先づ泉の森に引き返し給ふ事とはなりぬ。

總て眞言の天津神はスの言靈より生れたるさまざまの聲の水火より生れませる神にましますれば、全身悉く光に輝き、恰も水晶の如く透明體にましますれば、ダイヤモンドまたは金銀珠寶の裝飾物を要せずとも其光彩妙にましますにけり。之に反して曲神は、身體曇りに満ちぬれば種々の寶玉を全身に附着して光に包まれ、眞言の神を眞似むとするものなり。例へば眞言の神は孔雀の如く曲津神は烏の如

し、鳥は孔雀の翼の美しきを羨みて、其落ちし羽根を拾ひ吾翼の間に插み置きて
數多の鳥に其美しさを誇るが如く、曲津神は競ひて寶玉を集め、其輩に對して光
を誇るものなれば、曲神の強きもの程數多の寶玉を身に附着し居りしものなり。
此度の言靈戰によりて太刀膚の龍神も、長大身大蛇も、百の龍神も、装ふべき寶
を取り纏むる暇もあらず、倉皇として天の一方に逃げ去り、天日の光に照らされ
て、次第々々に亡び失せけるこそ目出度き限りなりけれ。
併し乍ら太古の神々は、光なき天然の石を琢磨きて五百津御須麻琉の珠をつく
り首飾、腕飾又は腰の邊りの飾となし給ひしかども、決して金剛石の如き光を放
つものを身に帶ぶることを卑しめ給ひしものなり。何故なれば、神の御身體はす
べて光にましますれば、光の寶玉を身に纏ふ時は神自身の光の弱きを示す理由とな
りて、他の神々に卑しめらるるを忌み給ひたればなり。今の世にも貴婦人とか稱
するもの、令嬢とか言へるものはさておき、すべての婦人等が競ひてダイヤモン
ドの光に憧憬れ、千金を惜しまず競ひ購ひ、身體の各部に飾りつけて其豪華を誇
り、美を誇り、光を誇れるは、恰も鳥が孔雀の落羽根を吾翼の間にさして誇れる

の^{なん}と何の^{えら}選ぶところなかるべし。全身^{ぜんしん}を光^{ひかり}強^{つよ}き金剛石^{ダイヤモンド}につつむなればまだしも、
唯^{ただ}一局部^{いつきよくぶ}に小^{ちひ}さき光^{ひかり}を附^{ふちやく}着^{やく}して誇^{ほこ}るが如^{ごと}きは、實^{じつ}に卑劣^{ひれつ}なる心^{しん}性^{せい}を暴^{ばく}露^ろせる卑^{いや}し
き業^{わざ}と言^いふべし。

愛^{あい}善^{ぜん}の德^{とく}に満^みち信^{しん}眞^{しん}の光^{ひかり}添^そはば、身^みに寶^{ほう}石^{せき}を附^{ふちやく}着^{やく}せずとも、幾^{いく}層^{そう}倍^{ばい}の光^{ひかり}を全^{ぜん}身^{しん}
に漲^{みなぎ}らせ、知^しらず識^しらずの間^{あひだ}に尊^{そん}敬^{けい}せらるるものなり。吾^ご人^{じん}は婦^ふ人^{じん}等^らの指^{ゆび}又^{また}は首^{くび}
のあたりに鏤^{ちりば}めたる種^{しゆ}々^{じゆ}の寶^{ほう}石^{せき}の鈍^{にぶ}き光^{ひかり}を眺^{なが}めつつ、淺^{あさ}ましき卑^{いや}しき心^{こころ}よと、常^{つね}々^{づね}
嘔^{おう}吐^とを催^{もよほ}し、其^{その}人^{ひと}々^{びと}の醜^{みにく}さを層^{そう}一^{いつ}層^{そう}感^{かん}ぜしめらるるなり。

五^{いつ}柱^{はしら}の神^{かみ}は、魔^{ます}棲^{すみ}ヶ谷^{がやつ}の醜^{しこ}神^{がみ}を根^{こん}底^{てい}より剿^{さう}滅^{めつ}し、歡^{くわん}喜^きに堪^たへず、常^{つね}に黑^{こく}煙^{えん}を吐^は
きて國^く土^にをなやませたる曲^ま津^が見^みの棲^{すみ}處^かを瞰^{かん}下^かしながら、稍^{やや}小^こ高^{たか}き丘^{をか}の上^{うへ}に立^たち、
御^み歌^{うた}うたひつつ踊^{をど}り舞^まひ狂^{くる}はせ給^{たま}ひける。其^{その}御^み歌^{うた}、

☞ 天^あ晴^は々^あ々^は四^よ方^もの國^{くに}原^{はら}晴^はれにけり

白^{はく}馬^ばヶ嶽^{がだけ}の南^{なん}側^{そく}の

百^も谷^も千^ち谷^{だに}を^{あつ}集^{あつ}めたる

大谷川の上流に

潜みて醜の曲神の

猛び狂ひしそのありか

世を曇らせし元津場

雲を起せし醜の山

霧を涌かせて物皆の

育ちを妨げ荒びたる

元津砦は亡びけり

萬里の島根は今日よりは

醜の荒びの黒雲も

冷たき霧の涌きたちも

跡なく消えて久方の

蒼き御空の奥深く

天津陽の光輝きたまひ

月つきよみ讀よみの神かみはさやかなる

光ひかりを雲くも井いにとどめまし

地ち上じやうに惠めぐみの露つゆふらし

すべてのもの命いのちをば

千ち代よに八や千ち代よに守まもりまし

この神かみ國くには永とこ久しへに

花はな咲さきみのり穀たなつもの物

豊ゆたかになりて牛うし馬うまも

肥こえ太ふとりつっ日ひに月つきに

榮さかゆる神かみ世よとなりぬべし

此この國くに原はらは未まだ稚わかく

國くに津つ神かみ等らの影かげもなし

蛙かはすと鼠ねずみの輩ともは

田た畑はたを耕たがやし穀たなつもの物

育てて命を保ちつつ

彌永久に永久に

月日と共にやすらはむ

ああ惟神々々

生言靈の幸ひて

三柱比女神逸はやく

鷲馬の背に跨りて

大空高く翔り來つ

吾等のなやみし戦を

たすけたまひし雄々しさよ

曲津の神の祕めおきし

百の寶は欲りせねど

今日の戦の勝鬨の

印と集め包みとし

駿馬はやこまの背せに積つみ満みたし

御樋みひしろ代神がみの御前おんまへに

供そなへまつらむ勇いさましや

天地あめつち創はじめし昔むかしより

かかたる例ためしはあたふとら尊たふと

神かみの依よさしかむわざの神業かむわざを

うつまま怜らに委つばら曲つばらに仕つかへし吾等われらは

千代ちよに八千代やちよに傳つたはりつ

世よの語かたり草くさとなりぬべし

思おもへば嬉うれし勇いさましし

思おもへば畏かしこし主スの神かみの

生いく言こと靈たまの光ひかりなれ

貴うづの御水み火いきの力ちからなれ

久方ひさかたの天あまはせ使つかひ

事の語り言も是をば。

烏羽玉の夜は迫り來むいざさらば

下りて歸らむ泉の森まで

五柱の神々は數多の寶玉を戦利品として背に負はせつつ、百津石村の暮列せる

難所を神言を奏上しつつ漸くにして山麓の小笹ヶ原の楠の森に着かせ給ひければ、

五頭の神馬は主の歸りを待ち佗びつつ、樹下に頭を竝べ整列し居たりける。

靈山比古の神は之を見て御歌詠ませ給ふ。

吾駒は雄々しく正しく待ち居たり

生言靈の耳にさへしか

白馬ヶ嶽荒ぶる神を打ち拂ひ

勝鬨かちどきあけて歸かへりきつるも

村肝むらぎもの心こころ晴はれたりわが魂たまは

駿馬はやこまなして勇いさみつるかも

復命かへりごとし確たしに申まをさむ嬉うれしさに

この黄昏たそがれも心こころ明あかるき

保宗もちむね比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

吾わがいゆく道みちに遮さやりし曲津まがつ見みも

煙けむりと消きえて今日けふの勝鬨かちどき

中空なかぞらを翔かり來きませる比ひ女神めがみの

力ちからに曲ま津がは苦くもなく破やぶれし

今日けふよりは白馬はくばヶ嶽がたけに立たち昇のぼる

雲くもはいづれも紅くれなゐに映はえむ

稚わかき地つち稚わか國くに原はらの草くさも木きも

今日けふを限かぎりと繁しげり榮さかえむ

かかくのごと雄を々をしき正ただしき神かむ業わざに

仕つかへし吾わが身みの幸さちを思おもふも

非とき時じくに黒くろ雲くも立たちし白はく馬ばケ嶽がの

魔ます樓みケ谷がは晴はれ渡わたりつつ

面おも白しろし曲ま津がの砦とりでを打うち破やぶり

明あ日は御みま前へに復かへり命ことせむ

直な道ほ比み古ちの神ひこは御かみ歌み詠うたまよせ給たまふ。

岩いは根ね木ね根ね踏ふみさくみつつ登のぼりゆく

谷たに間まの道みちは嶮さかしかりけり

曲ま津が見みは女め神がとなりて吾わが行ゆく手に

遮さやらむとせり浅あさはかなるも

五いつはし柱しら水い火きを合あはせて宣のり上あぐる

生いく言こと靈たまに曲ま津がはさやぎぬ

岩いはとなり火ひの玉たまとなりいろいろに

力ちから盡つくして射い對むひ來きたりぬ

危あやふしと見みるより靈たま山やま比ひ古こ神がみは

水い火きを凝こらして言こと靈たま宣のらせり

言こと靈たまの終をる間まもなく比ひ女め神がみは

鷺じうめ馬まに跨またり翔かけり來きましぬ

後のちの世よに語かたり傳つたへむ今け日ふの日ひの

生いく言こと靈たまの奇くびの神み業わざを

正まさ道みち比ち古ひの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

村肝むらきもの心こころにかかりし神業かむわざも

苦くもなくすみて空そら晴はれ渡わたりぬ

天津あまつ日は白馬はくばヶ嶽がだけに傾かたむきて

大おほいなる影かげさし來きたりつる

山蔭やまかげは横よこに倒たふれて御空みそらより

地つちより闇やみは迫せまり來くらしも

顧かへりみれば吾われ勇いさましよ諸神ももがみと

水い火きを合あはせて曲ま津がを退やらひし

黒雲くろくもと霧きりに艱なやみし萬里まの島しまの

天地てんちは清きよく明あけ渡わたりぬる

雲川くもかは比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

諸神ももがみの功いさをは千代ちよに萬代よろづよに

輝きたまはむ語草にも
いざさらば駒に鞭うち大野原
急ぎ歸らむ泉の森まで

ここに神々は駒の背に跨り、黄昏の野路を、轡を竝べて泉の森へと急がせ給ひける。

(昭和八・一二・一六 舊一〇・二九 於大坂分院蒼雲閣 加藤明子謹録)

第二〇章 女神の復命(一九五二)

御樋代の神は、曲津の征途に遣はせし五男三女の神々等の成功を祈りつつ夜も眠り給はず、侍神なる輪守比古の神、若春比古の神と共に、西南の空に向つて生言靈を閑断なく宣り上げ給ひつつ、いよいよ神々の無事曲津見を掃蕩し給ひたる

ことを覺らせ給ひ、喜びの餘り月照り耀ふ泉の森の清庭に立ちて、御聲さはやか
に言祝の御歌詠ませ給ふ。其大御歌、

白馬ヶ嶽魔棲ヶ谷に向ひたる

諸神の軍勝ち了せたるよ

谷々の巖を渡り百千々の

艱みを越えて勝ちし神はや

今日よりは此稚國土も心安く

彌榮えまさむ神の御稜威に

主の神の貴の恵の言靈に

萬里の島根は治まりしはや

曲津見は非時濁れる水火を吐きて

黒雲起しさやりけるかも

未だ稚き地の面より湧き立つる

霧きりの艱なやみも今日けふより晴はれむ

楠くすの葉はの葉はず末すえの露つゆに輝かがける

月つきの光ひかりの神かみ々がうしさよ

天あま渡わたる月つきの光ひかりは一人ひとしほに

冴さえ渡わたりたり青あを澄ずめる空そらに

眞まさ砂ごみな黄金こがね白しろ銀がね色いろなして

月つきの光ひかりに耀かがひはゆるも

いや廣ひろき八は千っ方せん里はうりの島しまヶ根がねも

蘇よみがへるべし曲まが津つ見み亡ほろびて

主スの神かみの依よさしの神み業わざ吾われも亦また

仕つかへ奉まつりし嬉うれしさをに居をり

非とき時じくに雲くも湧わき立たちし魔ます棲すみヶ谷がやつも

今けふ日ふより晴はれむ水い火き清きよらかに

牛うしも馬うまも兔うさぎ鼠ねずみも百もも蛙かはずも

生きの生命を安く保たむ

此國土は地肥えたれば穀物も

豊にたゆたに稔りこそすれ

國津神を此國原に移し植ゑて

彌永久の榮え見むかな

常磐樹の松に巢ぐへる眞鶴の

聲も今日より冴え渡るらむ

大空をはばたきなして隼の

群がり舞へる月夜は清しも

圓々と盈ち足らひたる月光の

さやかかなる夜を曲津は亡びし

三柱の比女神等の健氣さよ

御空翔りて仇に向へり

輪守比古の神は御歌詠ませ給ふ。

月冴ゆる庭にし立てばそよそよと

梅花を撫で來し風の香るも

白梅は月下の露に綻びて

奇しき香りを公に捧ぐる

吾公の功著けく魔樓ヶ谷の

戦を居ながら助けたまひぬ

吾公の生言靈の水火照らひ

光となりて御空翔りし

公が放つ光の玉にあてられて

醜の曲津は亡びたりけむ

斯くなれば萬里の島根は固まらむ

生きとし生けるもの等勇みて

黒雲くろくもの立たち塞ふさぎたる稚國わかくに原はらも

永と遠はの月つき日ひを仰あふぐ嬉うれしさ

御側みそば近ちかく仕つかへ奉まつれる吾われにして

公きみの尊たふとき功いさをし知らざりき

御側みそば近ちかく長ながき月つき日ひを仕つかへつつ

御稜威みいづの高たかきに驚おどろきしはや

斯かくの如ごと尊たふとき神かみとは知しらずして

あだに仕つかへしことの恥はづかし

吾わが公きみよ許ゆるし給たまはれ輪守わもり比古ひこの

暗くらき心こころを見直みなほし給たまひて

大空おほぞらの月つきは冴さえつつ吾公わがきみの

貴うづの光ひかりを愛めでさせ給たまへり

月つき見みれば笑ゑませる如ごとし地つち見みれば

百もも花ばな千ちば花なが輝かがやきつよし

天地あめつちの中なかに光ひかりの公きみまして
稚國原わかくにらはらを固かため給たまひぬ
□

若春わか比古はるひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□
御側おんそばに近ちかく侍さむらふ吾われにして

著しるき功いさをの公きみをし知らざり

言靈ことたまの生いきの生いのち命おほは大おほいなる

火くわくわう光くわくわうととなりて飛とび去さりしはや

吾わが宣のりし生言靈いくことたまの螢火ほたるびに

比くらべて強つよき赤あかき公きみなり

やがて今いま三柱みはしら比女ひめがみ神歸かへりまさば

戦たたかひの状さま況ま委曲つづさに聞きかむ

束つかの間まも早はやく聞ききたし魔ますみ棲がヶ谷やつの

雄々しき猛き戦の状況を

梢吹く風の響も澄みきりて

公の功を稱へ顔なる

滾々と果しも知らず湧き出づる

泉に似たり公が力は

眞清水に影を浮ぶる月讀の

それにも似たる公の光よ

斯く歌はせ給ふ折しもあれ、三柱の比女神は中空を響動しながら鷲馬に跨り、
泉の森の樹立稀なる清庭に悠々と降らせ給ひて、

駒よ駒よ翼收めて元の如

白馬となれなれ公の御前ぞ

山跡比女の神の御歌に、鷲馬は忽ち元の白駒と變じ、月下の清庭に高く嘶きにける。今歸り給ひし三柱の比女神は、駒に水飼ひ終り、柔かき芝生の萌え出づる清庭に駒を飼ひ放ち置き、御樋代神の御前に進み出で給ひ、先づ山跡比女の神より御歌以て戦の状況を復命白し給ふ。その御歌、

漸くに公の御稜威に照らされて

曲神の砦を打ち拂ひけり

駒竝めて進む道に曲津見は

種々の罫を造りて待てりき

靈山比古神の計らひ畏みて

小笹ヶ原の森に待ち居し

靈山比古貴の言靈聞きしより

中空翔り戦に向へり

吾公の言靈の光なかりせば

此戦は勝たざりにけむ

非時に貴の言靈宣りにつつ

鷲馬に跨り戦ひしはや

吾公の御前に今日は復命

白すと思へば心勇みぬ

五柱比古神はやがて歸りまさむ

今日の戦の勝に勇みて

千貝比女の神は御歌以て復命白し給ふ。

御樋代神貴の言靈畏みて

力なき吾も戦ひに立ちけり

千萬の曲神悉く言靈の

水火の力に亡び失せけり

今日よりは魔棲ヶ谷も雲晴れて

生きとし生けるものを生かさむ

谷々の水は暫く血の川と

なりて流れむ曲の血潮に

明日よりは此谷川は眞清水と

澄みきらひつつ永遠に流れむ

眞清水となりて國原ひたしつつ

百の草木を養ひまつらむ

湯結比女の神は復命白しの御歌詠ませ給ふ。

いやは果に吾等三柱比女神は

曲の戦に進みたりしよ

小笹原楠の森蔭に時待ちて

御空を高く吾進みけり

三柱の比女神鷲馬に跨りて

空より言靈打ち下しけり

曲津見は雲霧となり巖となり

荒風となり防ぎ戦へり

折々は氷雨を降らし千引巖を

霰の如くに降りそそぎけり

色々と手を替へ品を替へながら

曲神はここを先途と戦ふ

やうやくに神の恵の御光に

守られ曲津を亡ぼせしはや

に、御歌詠ませ給ふ。
比女神は各自戦状を復命し給ひければ、

田族比女の神は満面笑を湛へて嬉し氣

健けなげ氣けなる三み柱はしら比ひ女めの神かむ業わざを

吾われは遙はるかに見みつつありしよ

優やさしかる比ひ女め神がみながら魔ま軍いくさに

向むかひし姿すがたの雄を々をしかりける

曲まが神がみの深ふかき奸たく計みを打うち破やぶり

汝なれ比ひ女め神がみは能よくも戦たたかひしよ

今け日ふよりは萬ま里での島しま根ねにさやるべき

醜しこ神がみもなく月つき日ひ晴はれつつ

八や百ほ萬ろ神づかみの集つどへる此この森もりに

吾われ屯たむろして手て配くばりせしはや

神かみ々がみの向むかはむ戦いくさに幸さちあれと

夜よもすがら吾われは言こと靈たま宣のりつつ

主スの神かみの依よさし給たまひし言こと靈たまの

光ひかりに曲ま津がは苦くもなく亡ほろびぬ

草も木も喜びの色を湛へつつ

月下の露にきらめき渡れり

千早振る神世も聞かぬ今の如

目出度き神業はまたとあるまじ

太刀膚の龍も大蛇も八十の曲津も

汝等が進みし軍に亡びし

主の神も嘉し給はむ三柱の

比女神等の雄健び覽はして

久方の空行く月も澄みきらひ

汝が功を照らし給へり

輪守比古の神は三女神に對し、感謝の御歌詠ませ給ふ。

比女神の優しき身ながら恐ろしき

曲津まがの征途きために上のぼらししはや

吾われも亦またこの清森すがもりに神言かみごとを

非時ときじく宣のりて公きみを守まもりし

五柱いつはしら比古ひこ神がみの功いさをは言いふもがな

雄々ををしき比女神ひめがみの功尊いさをたふとし

千早ちはやぶ振ぶる神かみの造つくりし萬里まの島しまの

礎いしずゑなるよ公きみの功いさをは

天地あめつちを永遠とに包つつみし黒雲くろくもも

隈くまなく晴はれて月日つきひは照てらへり

天津日あまつひの光地ひかりちじやう上に刺ささざれば

森羅萬象すべてのものは榮さかえざるなり㊦

若春わか比古かはるひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

三柱みはしらの比女神ひめがみこと事ことなく曲神まががみを

斬きり放はりつつつ歸かへりませしはや

白梅しらうめの花はなは匂におへり櫻木さくらぎの

梢しげの蕾つぼみもふくらみて祝いはふ

白梅しらうめの香かるが如ごとき艶姿あですがたを

照てらして汝なれは戦いくさに臨のぞみましぬ

十重とへ二十重はたへ黒雲くろくも包つつみし大野原おほのほらを

公きみは雄々ををしく進すすみ給たまひし

吾公わがきみの御側みそばに侍はべりて比女神ひめがみの

戦たたかひの状さま況くまなく見みしはや

いざさらば此この清庭すがにはに安々やすやすと

憩いこはせ給たまへ疲つかれ給たまはむ

靈たま幸ちはふ神かみの御稜威みづに照てらされて

今日けふは清すがしき便たより聞きくかも

斯く神々は各自御歌詠ませつつ、月下に映ゆる楠の大樹の下蔭に狭筵を敷き、
心も清々しく朗かに憩はせ給ひける。

(昭和八・一二・一六 舊一〇・二九 於大坂分院蒼雲閣 森良仁謹録)

第四篇 歡天喜地

第二一章 泉の森出發 (一九五三)

田族比女の神始め二男三女の神等は、魔棲ヶ谷の曲神の跡もなく全滅したるを
喜び給ひて、月照りがよふ泉の森の眞砂を踏みしめ乍ら心朗かに各自御歌詠ま
せ給ふ。

田族比女の神は御歌詠ませ給ふ。

千早振る神の御水火の澄みきらひ

萬里の島根も蘇へりたり

時じくに雲の包みし大空も

晴れて清しき萬里の島ヶ根

主の神の依さし給へる御樋代の

神の神業も成り初めにけり

かくならば戀しきものは顯津男の

神の神言の御姿なりけり

長年を待ちつ暮せど背の岐美は

萬里の外にいますがつれなき

國津神を萬里の島根に植ゑ移し

國魂神を生まむとぞ思ふ

八十柱の御樋代神と選まれて

吾はさみしく月日を送るも

高地秀の宮を立ち出で遙々と

この稚國土に來りて久しも

年さびむ事をおそれつ今日迄も

岐美の出でまし待ち佗びしはや

仰ぎ見る御空の月のさやけさに

恙あらせぬ岐美を思ふも

天渡る月の面を仰ぎつつ

夜な夜な戀ふる淋しき吾なり

やややに萬里の島根は固まりぬ

いざこれよりは國魂生まむか

國魂の神を生まむと思へども

背の岐美まさねばせむ術もなき

この島の永久の司と定まりし

鶴もゑらぎて御空に立ち舞ふ

はてしなき思ひ抱きて岐美を待つ

吾魂線は御空の白雲

折々は思ひ悩みて吐息しつ

わが氣魂も細りけるかな

さらさらと梢に風は流れつつ

露照る月はきらめき渡る

輪守比古の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の神に仕へて吾は今

泉の森の月下に遊ぶも

いやさゆる月の下びに夜もすがら

歌^{うた}うたひつつ眠^{ねむ}らえぬ吾^{われ}よ
嬉^{うれ}しさと樂^{たの}しさ一度^{いちど}に迫^{せま}り來^きて

春^{はる}の短^{みじ}夜^{かよ}さへも眠^{ねむ}り得^えず

白^{しら}梅^{うめ}の月^{つき}にかがよふあで姿^{すがた}は

御^み樋^ひ代^{しろ}神^{がみ}の粧^{よそほ}ひに似^にし

未^まだ春^{はる}は若^{わか}くあれども櫻^{さくら}木^ぎの

梢^{しゆえ}の蕾^{つぼみ}はほぐれ初^そめつつ

若^{わか}春^{はる}比^ひ古^この神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

小^さ夜^よ更^ふけて月^{つき}の下^{した}びに歌^{うた}詠^よみつ

踊^{をど}りつ舞^まひつ樂^{たの}しき吾^{われ}なり

眞^ま清^{しみ}水^づの泉^{いづみ}に浮^{うか}ぶ月^{つき}光^{かげ}を

碎^{くだ}きて過^すぎぬ春^{はる}の夜^よ風^{かぜ}は

餘あまりにも月つきの光ひかりのさやかなれば

楠くすの樹こかげ蔭ひとしほは一ひと入しほ暗くらきも

紫むらさきの花はな匂におひつつ池いけの邊べに

あやめはここだ咲さき出いでにけり

眞ま白しろなる花はなを交まじへて池いけの邊べの

菖あやめ蒲はるは春よの夜よを匂におひつつ

所ところどころ水みづ鏡かがみ照てる湧わき水みづを

ふさぎてあやめは咲さき出いでにけり

曲まが神かみの影かげは地ち上じやうに消きえ失うせて

月つきのみひとりさやかなるかも
』

山やま跡と比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

㊦
曲まが神かみの征き途ための戦いくさをさまりて

泉いづみの森もりの聖所すがとに遊ぶあそも

村肝むらぎもの心こころも魂たまも清々すがすがし

泉いづみの森もりに公きみと遊あそびて

心安うらやすの國土くにのしるしか眞砂まさご照てる

泉いづみの森もりに月つきは冴さえつつ□

千貝比女ちかひひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

草くさも木きも若返わかがへりたる心地こちかな

空そらに澄すみきる月つきの下したびに

仰あふぎ見みれば幾億萬いくおくまんの星ほしの砂すな

俯ふしてし見みれば眞砂まさごに星ほし照てる

星ほしと星月ほしつきと月つきとの中空なかぞらに

雲くもの如ごとくにうけるこの森もり

常磐樹ときはぎの梢うれの濡葉ぬればにきらめきて

千々ちぢに照てらせる今宵こよひの月光つきかげ

新あたらしく蘇よみがへりたる心地ここちすも

曲神まがみ征途きための戦終いくさをりて

吾駒わがこまも疲つかれたるらむ草くさの生ふに

身みを横よこたへて安やすく眠ねむれり

はてしなき荒野あらのを渡わたり進すすみてし

駒こまの功いさをを照てらす月光つきかげ

小夜さよ更ふけて森もりの傍かたへのこもり枝えに

かすむが如ごとくふくるふの鳴なくも

これよの世よに吾われ生うまれ來きて始はじめての

清すがしき思おもひに満みたされにける

湯結比女ゆむすびひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 驚馬の背に跨りて御空はるか

渡りし思へば怖氣立つかも

村肝の心威猛り曲神の

醜の砦に空よりのぞみし

心安き神世にありせば斯くの如

放れし危ふき業はなさじを

玉の緒の生命の限り吾公に

眞言捧げて仕へ奉らむ

月冴ゆる泉の森に夜もすがら

御樋代神と楽しく遊ぶも

東雲の空は漸く明るみて

紫の雲ただよひにけり

五柱比古神やがて駿馬の

轡竝べて歸り來まさむ

斯く歌はせ給ふ折しも、東の空はからりと明け放れ、百鳥の聲は樹々の梢に囀り、朝露はさし昇る天津日に照らされて七色の光りを放ち、その美しさ譬ふるにものなかりける。

かかる所へ靈山比古の神を先頭に保宗比古の神、直道比古の神、正道比古の神、雲川比古の神の五柱は、勇氣を満面に充たせつつ、この度の戦に大本營と定まり、泉の森の聖所に無事歸陣し給ひける。靈山比古の神は御樋代神の側近く進みよ

☐ 天晴れ天晴れ尊きろかも吾公の

水火の光りに曲津は滅びし

千萬の曲津の奸計をふみ越えて

神の力に勝鬨あげしよ

曲津見は千引の巖と身を變へて

吾登りゆく道を塞ぎし

三柱みはしらの比女神ひめがみとなりて曲津見まがつみは

吾われを詳つづきに謀はからむとせり

曲津見まがつみの化身けしんの巖いはを踏ふみ固かため

暫しばしの憩所やすどと吾われなしにけり

御樋代みひしろの神かみと曲津まがつは變へんじつつ

吾われを屢々しばしばためらはしける

村肝むらきもの心こころの玉たまをときすまし

吾われためらはず戦たたかひにけり

三柱みはしらの比女神ひめがみ等の放はなれ業わざに

もろくも曲津まがつは滅ほろび失うせぬる

七寶しちぼうをとり散ちらしつつ曲津見まがつみは

雲井くもゐの空そらに消きえ失うせにけり

心地こちちよく曲津まがつの軍いくさを滅ほろぼして

御前みまへに復命かへりごとするぞ嬉うれしき

五柱いつはしらの比古神ひこがみいづれも曲津見まがつみに

惱なやまされつつ戦たたかひましける

なかなかあなどに侮がたり難まがつみき曲津見みの

禍わざのがれしも公きみの功績いさをし

かなはじと思おもひて神言かみごと宣のりつれば

光ひかりとなりて助たすけし吾公わがきみ

遙はろかなる泉いづみの森もりの空照そららし

吾戦わがたたかひを助たすけ給たまひぬ

年とし古ふるく曲津まがつの棲すまひし魔ます棲みヶ谷がやつは

堅かきは磐は常とき磐はの巖城いはしろなりける

曲神まががみの砦とりでをことごと言靈ことたまの

水い火きに退やらひし心こころの清すがしさ

保宗もちむね比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

ㄣ 千萬の惱みしのびて曲津見を

討ち滅ぼして歸りし嬉しさ

御樋代の神と變じて曲津見は

吾魂線を迷はせにけり

曲津見は女神と變じて吾行手に

いより集ひて謀らひにけり

何事も公の言葉に従ひし

功は曲津に欺かれざりしよ

直道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

ㄣ 遙々と大野を渡り醜神の

百の奸計を踏みにじりつつ

曲津見の浅き奸計の可笑しさに

吹き出すばかり思はれにける

太刀膚の龍神大蛇數限り

百谷千谷に潜みて戦ふ

溪々ゆのこる隈なく黒雲を

吐き出でにつつ吾等を惱めし

曲神の水火の黒雲は十重二十重

包みて行く手を閉したりけり

千萬の曲津の砦に立ち向ひ

神の恵に事なく勝ちしよ

ありがたき尊きものは言靈の

水火の光りと深く悟りぬ

正道比古の神は御歌詠ませ給ふ。

公きみがます泉いづみの森もりに歸かへり來きて

朝あしたの空そらに復命かへりごとせむ

天津日あまつひは豊榮とよさかのほ昇のぼり四方よも八方やもの

草木くさき諸もろ々もろ蘇よみがへりたり

何なんとなく心勇こころいさまし曲神まががみを

跡あとなく討うちて歸かへりし朝あしたは

種々くさくさの醜しこの奸計たくみに惱なやまされ

漸やつやく曲津まがをきため歸かへりぬ

海うみを抜ぬく八萬尺はちまんじやくの白馬はくばヶ嶽がだけに

登のぼりて見みはらす國土くには遙はろけし

曲津まが見つみの滅ほろびし後あとの清すがしさに

四方よもの國形くにがた望のぞみ見みしはや

牛頭ごづヶ峰がみの頂いたきよよいよ高たかくして

白馬はくばヶ嶽がだけと丈たけをくらべつ

空そらに飛とぶ鷹たかも鳥からすも百鳥もどりも

はろかに吾われより下空したぞらにありき

魔ます樓すヶ谷がの丘かに登のぼりて見渡みわたせば

萬里までの海原うなばら波なみかがやけり

ここに来て心漸こころおそく和なごみけり

御樋代神みひしろがみの御前みまへに仕つかへて

雲川くもかは比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

吾われは今いま申上まをしあぐべき事こともなし

四柱神よはしらがみの復命ふくめいありせば

勇いさましき曲津まがを征途きための戦いくさして

吾われ天地あめつちの心こころを悟さとりぬ

天地あめつちの心こころを永久とほに抱いだきつつ

稚國原を拓かむと思ふ

限りなきこの廣き國土を如何にして

造りまさむかと公を思ひぬ

曲津見は雲井の奥に消えし上は

總てのものはゆたに榮えむ

天津日は豊榮昇り吾公の

功を清く照らさせ給へり

いざさらば萬里ヶ丘なる吾公の

聖所をさして急ぎ歸らむ

斯く雲川比古の神の提言的御歌に、田族比女の神を始め一行十一柱の神々は、
朝日照る大野ヶ原を駒の嘶き勇ましく、萬里ヶ丘さして一目散に歸らせ給ひける
ぞ目出度けれ。

(昭和八・一二・一六 舊一〇・二九 於大坂分院蒼雲閣 谷前清子謹録)

第二章 歡聲滿天（一）（一九五四）

萬里ヶ丘の聖所に凱旋したる十一柱の神々は、喜びのあまり祝宴を開くべく萬里の國原の生きとし生けるものの悉くに、駿馬使を遣はし給ひければ、定めの日ひの來るを待ちつつ八千方里の國土に、生きとし生けるもの等悉く先を争ひ雲霞の如く集り來りて、異口同音に凱旋を壽ぎ歌ふ聲は天地も崩るるばかりなりけり。幾千萬の馬も牛も羊も鼠蛙も、先を争ひ萬里ヶ丘の聖所を十重二十重にとり巻き、立錐の餘地なきことこそ前代未聞の大慶事なりける。

ここに田族比女の神は、新たに造り了へたる高殿に登らせ給ひて、群衆の歡あそび喜ぶ状を遙かにみそなはし歡喜身に溢れて、御歌詠ませ給ふ。

群集せる總ての生物は、御樋代神の御歌につれて各自手を拍ち足を踏みならし怪しく腰を振りながら踊り狂ふぞ勇ましかりける。

田族比女の神の御歌。

久方ひさかたの天津御空あまつみそらに迷まよひたる

醜しこの黒雲くろくも吹ふき散ちりぬ

天津日光あまつひかげは澄すみきらひ

御空みそらを渡わたる月つき讀よみの

舟ふねは冴さえつつ諸々もろもろの

星ほしは御空みそらに輝かがやきぬ

科戸しなどの風かぜも軟やはらかに

常世とこよの春はるを撫なでて行ゆく

百花ももばな千花ちばなはこの春はるを

千歳ちとせの樂土らくどと笑ゑまひつつ

豊ゆたにたゆたにかむばしき

香かりを四よ方に散ちらすなり

雲くもに聳そびゆる牛頭ごづがヶ峰みね

御空みそらに高たかき白馬はくばがヶ嶽だけも

水^い火^き澄^すみきらひ紫^{むらさき}の

雲^{くも}の色^{いろ}帯^{おび}しめまはし

萬^ま里^での海^{うな}原^{ばら}のぞみつつ

常^{とこ}世^よの春^{はる}の目^め出^で度^たさを

壽^{ことほ}ぎまつる如^{ごと}くなり

百^も鳥^{もどり}千^ち鳥^{どり}の囀^{さへう}りは

伽^{かり}陵^{よう}頻^{びん}迦^がの聲^{こゑ}に似^にて

聞^きくも清^{すが}しき音^ね色^{いろ}なり

御^み空^{そら}に高^{たか}舞^まふ眞^ま鶴^{なづる}は

翼^{つば}揃^{そろ}へて潔^{いさぎよ}く

萬^ま里^での聖^{すが}所^との森^{もり}の上^へに

翼^{つば}休^{やす}めて千^ち代^ようたふ

花^は爛^{らん}漫^{まん}のこの春^{はる}を

白^{しろ}き黄^き色^{いろ}き胡^こ蝶^{てふ}は來^{きた}り

まつむしすずむし
松蟲鈴蟲きりぎりす

あき
秋まだ來ねどこの庭に

いよ
伊寄り集ひて萬世を

すが
清しくうたへる目出度さよ

はくばがだけ
白馬ヶ嶽の山麓に

しらくもあそ
白雲遊び牛頭ヶ峰の

いただきか
頂深く包みたる

こ
濃き紅の雲の色は

あまつひかけ
天津日光の寢床かと

うたが
疑ふばかり冴えにけり

こま
駒は鬣うちふるひ

みぎ
右と左に尾をふりて

しこ
醜の曲津を打ち拂ふ

けふ
今日の喜び永久に

語り傳へて後の世の

神のためしとなりぬべし

奴婆玉の黒き毛生へる眞牛は

二本の角をふり立てて

右や左や前後

前つ太脚ふり上げて

直立しつつ手の如く

踊り狂ふぞ面白き

羊は勇み白兔は

月の形にまるまりて

毬と變じつ四方八方に

まるびつかへりつ踊るなり

鼠は勇み百蛙は

掌うちて舞ひ狂ふ

青あをき御み空そらを眺ながむれば

鳶とびも鳥からすも隼はやぶさも

翼つばさ揃そろへて月つきの輪わを

描えがきつ消けしつ歌うたひ舞まふ

あかむあな惟ながら神かむ々ながら

八は千っ方せん里はの萬ま里での島しまは

宛さな然ながら主スの神かみ永とこ久しへに

鎮しづまりてんいかいます天てん界かいか

紫し微びの宮みや居ゐの莊さう嚴ごんさも

今け日ふのよひき日ひの賑にぎはひに

勝まさらかむざならなめがや惟かむ神ながら

たうだへこちのよ上うはへ千ち萬よろのづ

國く津に神つ等かをみ移うつし植うゑ

稚わか國くに原はらの眞ま秀ほ良ら場ばを

うまらに委曲に鋤き固め

木草の種を植ゑおふし

稲麥豆粟黍の類

所狭きまで蒔きつけて

うら安國のうら安く

生きとし生けることごとを

天國淨土の樂しみに

遊ばせ生かせ永久の

神の御國と定むべし

ただわれ御樋代神にして

國土の司と臨むべき

國魂神を生まざるを

今日のよき日の喜びの

一つのうらみと思ふなり

ああかむながらかむながら惟神々々

神かみの依よさしの時とき待ちて

太元おほもと顯津男とあきつをの神かみの

みゆきを待またむ村肝むらきもの

心こころを洗あらひ魂たま清きよめ

御空みそらに輝かがやく日月じつげつの

清きよきを保たもちて相あひま待たむ

ああかむながらかむながら惟神々々

萬里まの島根しまねを永とこしへ久へに

守まもらせ給たまへと久方ひさかたの

天津あまつた高宮かみやに在おはします

主スの大神おほかみを始はじめとし

從したがへ給たまふ百千ももちぢ々の

畏かしこき神かみの御前おんまへに

畏み畏み願ぎまつる

謹み敬ひ請ひまつる

山跡比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 天晴れ天晴れ今日の生日の目出度さよ

總ての生物伊寄り集へば

わが公の御稜威畏し國原は

擧りて御前に壽ぎ言宣るも

雲を抜く白馬ヶ嶽の頂に

紫雲棚引き天津日てらふ

晝月の光は東の高空に

白く冴えつつ昇りましけり

月も日も今日の慶事を壽ぐか

相あひなら竝ばして昇のぼりましけり

千ちは早はや振ぶる神かみよ世よもきかぬ今日けふの日ひの

壽ことば言ことば葉く國くに土にに充みちつる

地つち稚わかき國くに土にとは言いへどかくの如ごと

數あまた多たの生いき物ものあるは樂たのしき

野のに出いでて田た畑はたを耕たがす蛙かはまで

この齋い場みに集つどひて踊をどれる

上うへも下したも心こころ合あせて曲ま津か神かみの

亡ほろびし今日けふを祝いはふ宴うたげなり

山やまも野のも皆みなおしなべて蘇よみがへり

命いのちの露つゆを照てらして果はてなし

限かぎりなき萬ま里での海うな原ばらに浮うかびたる

この稚わ國かぐ土にの榮さかえ果はてなき

女め神がみわれも曲ま津がの征き途ため

に立たち向むかひ

今日の樂しき宴に會ひぬる』

千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

果てしなき喜びにわれも満されて

手の舞ひ足の踏み所を知らず

月も日も豊に光をなげ給ひ

百の草木の露を照らせり

この島に生きとし生けるもの皆は

今日のよき日を祝はぬはなし

眞鶴の永久に治めし稚國土も

御樋代神の神世となりける

丹頂の鶴は千歳の常磐樹の

松を飾りて千代をうたはむ

かくならば國魂神を生みまして

國土の司と定めますべし

そよと吹く風も壽ぐかさやかなる

音色放ちて森を過ぎゆく

高殿に御樋代神は上らして

歌はす御歌の聲朗らなる

わが公の冴えに冴えたる言靈に

總てのものは蘇るなり

仰ぎ見れば御空の海は限りなく

いやふかぶかに青みたるかな

大空の青き海原渡りゆく

月讀の舟は波きり進むも

大空に漂ふ魚鱗の雲見れば

宛然海の波に似しかも

湯結比女の神は御歌詠ませ給ふ。

天地の開けし時ゆかくの如

目出度きためしは聞かざりにけり

もろもろを日に夜になやめ苦しめし

曲津の滅びし今日ぞ目出度き

みはるかす萬里の丘邊のほとり皆

伊寄り集へる喜びの聲

昨日まで歎きの聲と聞えしは

うら吹く風となりにけらしな

喜びの聲は天地にみちみちて

國土の榮えを物語るなり

御樋代の神の功に地稚き

萬里の國原蘇りたり

この島しまに生いきとし生いける物もの等ら皆みな

御み樋ひ代しろ神がみの功いさををうたへり

わが公きみは尊たふとき御おん身みを起おこしつ

曲ま津がの征き途ために上のぼらせ給たまひぬ

健け氣なげなる公きみの雄をと健たけびに勵はげまされ

女め神がみのわれも征き途ために向むかひし

わが公きみの生いく言こと靈たまの御み光ひかりに

曲ま津がの軍いくさを逐おひやりにけり

今け日ふよりは慶よろこ事びごとの重かさなりて

榮さかえ果はてなし萬ま里での國くに原はらは

馬うまも牛うしも今け日ふより初はじめて新あたらしき

水みづも飲のむべし草くさも食はむべし

鳥とり獸けもの蟲むしけらまでも澄すみきらふ

水い火きに萬よろづ世よを蘇よみがへるべき

御樋代の神に仕へてわれは今

この喜びを目のあたり見るも

かく歌ひ給ふ折しも、群衆の歡ぎ喜ぶ聲は刻々に高まり、萬里の島根の天地は覆へらむかと思ふばかりの有様を現出したるこそ目出度けれ。

（昭和八・一二・一六 舊一〇・二九 於大坂分院蒼雲閣 林彌生謹録）

本卷第二十二章を口述し終りたる昭和八年十二月十六日の夕刻なりき。冷雨は大坂分院の廣庭に沛然として臻り、時ならぬ雷鳴は深夜の二時轟き渡りて、大地震の勃發せしかと疑ふばかり凄まじき光景を現じたりける。

口述者識

第二三章 歡聲滿天（二）（一九五五）

對^{たい}して御歌詠^{みうたよ}ませ給^{たま}ふ。
田^た族^{からひ}比^ひ女^めの神^{かみ}は再^{ふた}び高^{たか}殿^{どの}にのぼらせ給^{たま}ひ、
歡^{くわん}喜^きのあま^り雀^{じゃく}躍^{やく}せる數^{すう}萬^{まん}の生^{いき}物^{もの}に

主^すの神^{かみ}の水^い火^きに生^うれし萬^ま里^での島^{しま}に

御^み槌^{ひしろ}代^{ろが}神^{がみ}となりて臨^{のぞ}みぬ

今^け日^ふまでは荒^あぶる神^{かみ}の世^よなりけり

鶴^{つる}の守^{まも}れる國^{くに}土^ににしあれば

大^{おほ}空^{ぞら}を自^じ由^{いう}にかけりめぐるとも

生^{いく}言^{こと}靈^{たま}の力^{ちから}なき鶴^{つる}なり

今^け日^ふよりは真^ま鶴^{なづる}國^{くに}土^にの名^{めい}物^{ぶつ}と

守^{まも}り育^{そだ}てむ松^{まつ}の梢^{こずえ}に

こ^この島^{しま}に生^いきとし生^いける物^{もの}皆^{みな}を

今^け日^ふより吾^{われ}は領^{うし}有^はぎ守^{まも}らむ

鳥^{とり}獸^{けもの}木^き草^{ぐさ}のはしに至^{いた}るまで

永久とこしへに守まもらむ嚴いづの力ちからに

この島しまは紫微しびてんかい天界まなごの愛兒まなごなり

造つくり固かためて神かみに報むくいむ

この島しまを造つくり固かためて永久とこしへの

松まつの緑みどりのよき國くに土にとせむ

諸々もろもろの歡よろこぎ喜よろこぶさま見みつつ

この稚國わかくに土にの榮さかえを祝いはふ

足引あしびきの山やまの尾包をつつみし雲霧くもぎりも

隈くまなく晴はれし今日けふぞ清すがしき

黑雲くろくもの影かげは隈くまなく空そらに消きえて

あした夕ゆふべを紫雲しうん棚引たなびけ

海うみを出いで海うみに入いるてふ日月じつげつの

光ひかりさやけく神國みくにを生いかさむ

永久とこしへの命保いのちたもちて此島このしまは

地震なぬふるもあるな嵐あらしも吹ふくな

諸々もろもろのいより集つどひて動うごくさまは

打ち寄うす波なみの秀ほに見みゆるかな

御樋代みひしろの神かみと仕つかへて此この島しまに

天降あもりし吾われは國くに土にの親おやなり

生うみの子このいやつぎつぎに榮さかえませと

萬里まの島根しまねの生おひ立たち祈いのるも

瑞御靈みづみたま天降あもり給たまひて國魂くにたまの

御子みこ生うますまで吾われは動うごかじ

この丘をかに瑞みづの御靈みたまの御舍みあらかを

つくりて天てんの時ときを待またなむ

平たひらけく安やすらけくあれ永久とこしへに

吾司わがつかさどる萬里まの島根しまねは

天地あめつちと共に榮さかえて遠永とほながに

この生島いくしまの命いのちあれかし

若返りわかがへ若返りわかがへつつ幾千代いくちよも

生きてい守らまもむ萬里まの島根しまねを

萬世よろづよに動うごかぬ國魂くにたまかみ神すゑの裔すゑは

この生島いくしまを司つかさどるらむ

吾わが宣のりし生言靈いくことたまは幾代いくよ經ふるも

動うごかざるべし主神すしんの依よさしなれば
』

輪守わもり比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 吾われはしもワ聲こゑの言靈ことたまに生なり出いでし

地上ちじやうを開ひらく輪守わもり比古ひこはや

荒金あらがねの地つちのことごと生いかせつつ

森羅萬象すべてのものの命いのちを守まもらむ

この島は紫微天界の中心なるか

大海原の波に浮べる

波の音風のうなりも新しく

響かひ来るも今日のよき日は

この島の生きとし生ける数の限り

いより集へる聖所めでたし

天も地も新たに開けし此よき日に

堅磐常磐の礎固めばや

御樋代の神は今日より萬里の島の

眞言の親と仰ぎまつらむ

もろもろの百姓よ御樋代神は

吾等が眞言の親と崇めよ

靈山比古の神は御歌詠ませ給ふ。

この島を開き初めたる百蛙

百の鼠の功は尊き

主の神の水火に生れし百蛙

鼠は神國を守る神はや

御樋代の神現れませる今日よりは

安けく生きよ蛙よ鼠よ

馬も牛も山を下りて廣野原に

安き命を保ちつ働け

國津神數多この國土に植ゑ移し

鼠蛙を守り神とせむ

國津神を知食さむと主の神は

御樋代神を天降らせ給ひぬ

國魂の神を生まむと御樋代の

神はこの土に天降りましける

吾^{わが}公^{きみ}の御^み供^{とも}に仕^{つか}へて靈^{たま}山^{やま}比^ひ古^この

神^{かみ}もこの土^どに降^{くだ}り來^きつるよ

萬^ま里^でヶ島^{がしま}のすべての生^{いき}物^{もの}を安^{やす}らかに

守^{まも}り育^{そだ}つと吾^{わが}公^{きみ}天^あ降^もらせり

百^{もも}蛙^{かはす}百^{もも}の鼠^{ねずみ}よ今^け日^ふよりは

まこと捧^{ささ}げて公^{きみ}に仕^{つか}へよ

若^わ春^{かは}比^ひ古^この神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

濛^も々^もと雲^{くも}霧^{きり}たちて曲^ま津^が見^みの

猛^{たけ}り狂^{くる}ひし島^{しま}は晴^はれたり

吾^{わが}公^{きみ}の生^{いく}言^{こと}靈^{たま}の御^み光^{ひかり}に

照^てらされ曲^ま津^が見^みは亡^{ほろ}び失^うせけり

春^{はる}夏^{なつ}秋^{あき}冬^{ふゆ}とつぎつぎ天地^{あめつち}は

めぐりて神國の榮えはてなき

青雲の棚引く極み白雲の

向伏す限りは公の國土なり

この國土に命を保つものみなは

公の恵みに浴せざるなし

保宗比古の神は御歌詠ませ給ふ。

めでたさの限りなるかも天地の

水火清まりて曲津は失せぬ

國津神の姿見えねど鳥獸

蛙の聲は地上に満ちたり

八十日はあれども今日の生ける日は

天の足日よ世の創めなるよ

貴身きみと小身を親子おやこの道みちを永久とこしへに

定さだむる今日けふの言祝ことほぎ尊たふとし

高たか殿どのは天あめの浮橋うきはしよ浮橋うきはしに

立たたせて千代ちよの固かためを宣のらす公きみ

右みぎ上ひだりと下したとの差別けぢめをたてて

正ただしく清きよく國くに土に開ひらくべし

高たかき低ひくきの差別けぢめなければ神かみの國くには

また亂みだるべし曲津まがわき出いでで

直道なほ比古みちひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

鳥とりの尾をのいやながながと包つつみたる

雲霧くもきりはれて新國にひくに土に生うまれぬ

新あたららしき國くに土にのはじめの言祝ことほぎの

庭にはにかたむむ貴身きみ小身をの道みち
貴身きみ大身おほみ小身を田身たみの道みちを明あきらかに

たてて拓ひらかむ萬里まの島根しまねを

今日けよりは萬里まの島根しまねを改あらためて

萬里まの神國みくにと永久とほに讚たたへむ

萬里まの海うみに浮うかべる百ももの島々しまじまは

この新國にひくに土にの御子みこなりにけり

國魂くにたまの神かみ生あれまししあかつきは

萬世よろづよ變かはらぬ貴身きみと仕つかへむ〚

正道まさみち比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㌿
天地あめつちの神かみの心こころを心こころとし

貴身きみ小身を親おや子の正道まさみち開ひらかむ

貴身きみ大身おほみ小身をみと田身たみとのことごととは

主スの大神おほかみを親おやとし仕つかへよ

田族たから比ひ女神めかみは吾等われらが親おやにして

萬世よろづよ動うごかぬ貴身きみにましける

吾公わがきみの御稜威みいづは天地てんちに輝かがきて

萬里まの神國みくにに荒あぶる神かみなし

牛馬うしうまは田畑たはたを耕たがし蛙鼠かはねずみは

穀物たなつものらの命いのちを守まもれ

永久とこしへに蛙かはずは田たを守もり鼠等ねずみらは

木草きぐさを守もりて安やすらかに住すめよ

雲川くもかは比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦
ありがたき神世かみよとなりけり萬世よろづよに

動かぬ貴身と親あれませり

貴身と讚へ親と尊み師とたのみ

永久に生きなむ生きの命を

水清く風澄みきりて日月の

光明るき萬里の神國よ

限りなき廣き荒野をまつぶさに

開きて命の神苑となさばや

うごなはるすべての生物の祝ふ聲

この新しき國原に満てり

もろもろの言祝ぐ聲は牛頭ヶ峰

白馬ヶ嶽に高き木靈す

かく神々は、各自祝歌をうたひ高殿を下らせ給ひければ、あらゆる生物は心安
らけく何の憚りもなく各自が得手々々をつくして、踊り狂ひ歌ひさへづり、その

歡聲は天地も震ぐばかりなりけり。

（昭和八・一二・一七 舊一一・一 於大坂分院蒼雲閣 白石恵子謹録）

第二四章 會者定離（一九五六）

萬里ヶ島の天地を塞ぎたる邪神の潛みし雲霧はくまなく晴れて、日月は清く光を地上に投げ萬物蘇生の思ひして、茲に新しく國名を萬里の神國と稱へ、總ての基礎を萬世に固め給ひ、生きとし生けるものを悉く萬里ヶ島の聖所に集めて、壽ぎの宴を開き給ひしが、七日七夜の後、總ての生きとし生けるものは各自常住の地に歸り、水を打ちたる如く、御樋代神の御舎は靜寂に歸したり。

かかる所に西に聳ゆる白馬ヶ嶽の背後にあたる夕暮の空は、一種異様の光に満ちぬれば、田族比女の神は高殿に立ちて、この様を覽はし、尊き御樋代神の降臨なりとして、直に輪守比古の神、若春比古の神をして御樋代神を迎へ奉るべく、

黄昏たそがれの月下げつかを鞭むちうたせ給たまひける。

茲ここに二柱ふたはしらの神かみは神言みことのまにまに、白馬はくばヶ嶽がだけの西にしに當あたる御來矢みくりやの濱邊はまべに馳かけつげ給たまへば、常磐とぎはの森もりに憩いこはせ給たまふ五柱いつはしらの天津神等あまつかみたちに出會であひまし、恭うやうやしく言葉ことばを交かはし、萬里ヶ丘までがをかの聖所すがどに神々かみがみを導みちびきつつ、翌日あくるひの黄昏頃たそがれごろやうやくに復命かへりごたま申し給たまひける。輪守比古わもりひこの神かみは八柱やはしらの尊たふとき御樋代神みひしろがみ一行いっかうを導みちびき、無事ぶじに歸かへりたることを田族比女たからひめの神かみの大前おほまへに奏上そうじやうし給たまひぬ。

わが公きみの神言みこと畏かしこみ二柱ふたはしらは

御來矢みくりやの濱邊はまに急いそぎ着つきけり

御來矢みくりやの濱邊はまべに着つけば森蔭もりかげに

朝香比女あさかひめの神かみ休やすらひ給たまひぬ

恐おそる恐おそる吾御前われみまへに跪ひざまづきて

公きみの眞言まことを宣のり傳つたへける

御樋代神みひしろがみ朝香あさかの比女ひめは領うなづきて

諸神を従へ此處に來ませり」

田族比女の神はこれに答へて御歌詠ませ給ふ。

久方の高地秀山より降りましし

御樋代神をよくも迎へ來しよ

兔も角もこれの大殿に導けよ

吾も階段を下りて迎へむ」

茲に輪守比古の神、若春比古の神の二柱は「オー」と一聲畏まりつつ、御庭に待たせ給へる朝香比女の神一行の前に言葉も恭しく、

いざさらば御樋代神の朝香比女

進ませ給へこれの大殿へ

四柱よはしらの神かみも後あとよりつづきませ

吾われも御後みあとに従したがひまつらむ

朝香比女あさかひめの神かみは軽かるく目禮もくれいしながら、静々しづしづと高殿たかどのさして進すすみたまふ。茲ここに田族比たからひ女めの神かみは高殿たかどのの階段かいたんを降おりて恭うやうやしく朝香比女あさかひめの神かみの一行いっかうを待またせ給たまひけるが、比女ひめの御姿みすがた目前もくぜんに迫せまりけるより、

□ あらたふと御樋代神みひしろがみの天降あもりましし

尊たふとさに吾われは迎むかへ奉まつるも

いざさらばこの高殿たかどのに案内あないせむ

のぼらせ給たまへ五柱いつはしらの神かみ□

茲ここに朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

音おとに聞きく田た族からの比ひ女めの御み樋ひ代しろは
汝なれなりしかも愛めくしと思おもふら

斯かく歌うたひ終をはり、悠いう然ぜんとして田た族から比ひ女めの神かみの後しりへより、
朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。
朝あさ香か比ひ女めの神かみは高たか殿どのさして

所ところ々に御み樋ひ代しろ神がみは八や十そ柱はしら

いますと聞ききしを今け日ふ會あひにけり

地つち稚わかき國くに土にを固かたむる御み樋ひ代しろ神がみの

苦くるしき神み業わざを思おもひやらるる

國くに土には未まだ定さだまらずして曲まが津つ見みの

猛たける國くに原はら拓ひらくは苦くるしき

諸もろ々の艱なやみに堪たへて萬ま里でヶ島しまを

拓ひらき給たまひし公きみの功いさをを思おもふ

吾われは今いま西方にしかたの國土くにに進すすまむと

その道みちすがらを立たち寄よりしはや

この島しまに八十やそ比ひ女神がみのましますと

かねて聞ききしゆ立たち寄よりて見みし

まめやかに在おはせる公きみの御姿みすがたに

吾われは嬉うれしさ堪たへやらぬかも

永とこ久しへの命いのち保たもちて若わか々わかしく

國魂くにたま神がみを生うませ給たまはれ
□

田族たから比ひ女めの神かみは感かん激げきに堪たへず、御歌みうたもて答こたへ給たまふ。

□
ありがたし尊たふとし朝香あさか比ひ女めの神かみの

優やさしき言こと葉はに蘇よみがへりける

八柱やはしらが神み尊たふとき比ひ女めの御み自づから

吾われを訪とはせし今日けふの畏かしこさ

顯あきつ津男をの神かみの出いでまし待まちまちて

今いまはやうやく年としさびにけり

眺ながめよきこの高たか殿どのに安やすらかに

光ひかり放はなちて在おはしましませ

朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

吾われもまた同おなじ思おもひの御み樋ひ代しろよ

背せの岐き美みに會あふと求まぎて來きたれり

背せの岐き美みは西にし方かたあたり曲まが津つ見みの

百ももの軍いくさと戰たたかひ給たまはむ

一ひと水い火きの契ちぎりなれども主すの神かみの

依よさしなりせば忘わすれ難がたく思おもふ

田族比女の神は御歌詠ませ給ふ。

愛くしき朝香の比女の言の葉に

吾はおもはず涙しにけり

背の岐美を戀ふる心の苦しさを

味はひ給ふ女神いとしも

茲に二柱の御樋代神は百年の知己の如く、互に心の底より解け合ひ、同情の涙にくれ給ひつつ思はず知らず日を重ね給ひける。田族比女の神は、白馬ヶ嶽の魔棲ヶ谷にて神々の戦利品として持ち歸りたる數多のダイヤモンドを取出し、朝香比女の神に奉りければ、實に珍しき物よと賞め讃へながら、田族比女の神の奉るままに、こころよく受け取らせ給ひぬ。田族比女の神の奉りたる寶石は、最も光り眩く、最も大いなるダイヤモンドにして稀なる珍しき物なりける。

朝香比女の神は其の謝禮として、懷中より燧石を取出し、火を切り出で四邊の

枯^{かれ}芝^{しば}を^{あつ}集^{あつ}めて^ひ火^ひを^も燃^もし^{たま}給^{たま}ひ^{けれ}ば、
眞^ま火^ひの^も燃^もゆる^を見^み給^{たま}ひ^しこと^とて、
何^{いづ}れ^も感^{かん}嘆^{たん}の^こ聲^{こゑ}を^は放^{はな}ち^給ひ^{ける}が、
朝^あ香^さ比^か女^{ひめ}の^か神^{かみ}を^は始^{はじ}め^とし^と十^と柱^{じゅう}の^か神^{かみ}々^々は^は初^{はじ}めて
の^か神^{かみ}は^{ほう}寶^{ほう}石^{せき}の^し謝^{しゃ}禮^{らい}と^{して}手^てづ^{から}の^{この}燧^{ひうち}石^{せき}を^た田^た族^{から}比^ひ女^めの^か神^{かみ}に^お贈^{おく}り^給ひ^{ける}。

田^た族^{から}比^ひ女^めの^か神^{かみ}は^み御^み歌^{うた}詠^よま^せ給^{たま}ふ。

あ^ら尊^{たふ}明^{とあ}る^き熱^{あつ}き^火は^燃え^ぬ

闇^{やみ}夜^よを^照ら^す神^{かみ}な^るよ^眞火^ひは

こ^の國^{くに}土^にに^眞火^ひの^い功^{いさを}の^ある^限り

曲^ま津^が見^つの^か神^{かみ}は^あ荒^{すさ}ば^ざる^べし

曲^ま神^がの^ひ潜^{ひそ}む^や山^{やま}野^ぬを^や焼^やき^は拂^{はら}ひ

清^{きよ}む^るに^よき^眞火^まな^りに^ける

朝^あ香^さ比^か女^{ひめ}の^か神^{かみ}の^た給^{たま}ひ^し燧^{ひうち}石^{いし}は

萬^ま里^での^み神^{くに}國^にの^う貴^{うづ}の^た寶^{から}よ

石^い打^しち^て眞^ま火^ひ出^いづ^{ると}は^け今^け日^ふの^ひ日^ひまで

愚おろかしき吾われはさとらざりけり
この寶たから賜たまひし上うへは萬ま里での國くに土にの
總すべての曲ま津がを燒やき滅ほろぼさむむ』

朝あさ香か比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 銳う敏なり鳴り出づの神かみの賜たまひし燧ひうち石ちなれば

國くに土にの鎮しづめと公きみに贈おくるも

この燧ひうち石ち一つありせば稚わか國くに土にも

忽たちまち固かたらに榮さかえゆくべし

穀たなつもの物ものその外ほかすべての食を物ものを

眞ま火ひにてあぶれば味あじはひよろしも

眞ま清しみ水づも眞ま火ひの力ちからに湯ゆとなりて

神かみに捧ささぐる代しろとなるべしし』

田族比女の神は又もや御歌詠ませ給ふ。

☞ 朝香比女神に捧げし寶石は

光あれども熱からず燃えず

命なき光を公に奉り

命ある光を賜はりしはや

茲に二柱の神はダイヤモンド、燧石の贈答終り、再び寛ぎて歡談に耽けらせ給ふ。

初頭比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☞ 波の秀を渡りて萬里の神國に

求ぎて來つるも公を守りて

珍しく輝く玉を見たりけり

この新國土に着きし間もなく

起立比古の神は御歌詠ませ給ふ。

高山と高山の中に斯くの如

聖所のあるは珍しきかな

御樋代神と御樋代神の出會ひませる

この神國は永久に榮えむ

立世比女の神は御歌詠ませ給ふ。

わが公に従ひ奉りて萬里の國土に

夜光の玉を拜みけるかも

夜光の玉は美しかれども命なし

燧石の眞火の眞言にしかざり
□

天晴比女の神は御歌詠ませ給ふ。
□

諸々の曲津をやらひし燧石を
□

贈らせ給ひしわが公畏し

貴寶數多あれども眞火出づる

燧石にまさる寶なきかな
□

輪守比古の神は御歌詠ませ給ふ。
□

朝香比女神の賜ひし燧石こそ
□

この新國土の生ける寶よ

寶石の光は如何に輝くも

邪神まがみの持もちし寶たからなりける」

靈山たまやま比古まひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

畏かしこしや天降あもりましたる八柱やはしらの

比女ひめ神がみの言葉ことば直ただに聞きく吾われは

顯津男あきつをの神かみに出會であふと數萬里すまんりの

海山うみやま渡わたらす比女ひめぞ雄を々をしき」

若春わかはる比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

やうやく」に雲霧くもぎり晴はれし萬里までの國土くにに

二柱ふたはしらの御樋代みひしろ神かみ天降あもらせり

わが公きみは尊たふとしされど八柱やはしらの

比ひ女めの功いさをはひとしほ高たかし
」

保宗もちむね比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

珍めづしや御樋みひしろ代神がみは二柱ふたはしらまで

この神國かみくにに天降あもり給たまひぬ

西方にしかたの國土くにに出いでます朝香あさか比女ひめの

神かみの心こころを雄々をしとおもふ
」

直道なほみち比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

一柱ひとはしらの瑞みづの御靈みたまを戀こひ戀こひて

ねたみ給たまはぬ御樋みひしろ代神がみたち等らよ

惟かむ神なの依よさしの御樋みひしろ代らなれば

清くすがしく在しましけるよ』

山跡比女の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の二柱神の御面は

月日の如くかがよひませり

拜むもまばゆきばかり御樋代の

神のおもざし輝き強し』

千貝比女の神は御歌詠ませ給ふ。

はろばると瑞の御靈を慕ひまして

出でます朝香比女の神雄々しも

雲霧をいぶきわたりて海原の

波なみの秀ほふみて來きませし公きみはも
㊦

湯ゆ結むす比ひ女めの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。
。

㊦ ためしなき雄を々をしき御樋みひ代しろ神が等みたちの

赤あかき心こころに照てらされしはや

歸かへりまさむ日は近ちかづきぬ美うるはしき

神かみに別わかるとおもへばかなしも
㊦

正まさ道みち比ち古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。
。

㊦ 御樋みひ代しろ神がみこれの神國みくにに賜たまひたる

燧ひうち石いしは千ち代よの寶たからと仰あふがむ

斯かくの如ごと尊たふとき生いける力ちからあらば

萬里の神國におそるるものなし』

雲川比古の神は御歌詠ませ給ふ。

新しく國土は生れぬ新しき

眞火輝きぬ神の恵に

身を清め心清めて燧石の

神靈を永久に齋かむとおもふ』

斯く神々は各自御歌詠ませつつ、朝香比女の神の訪問や、燧石を國寶として賜
ひしことなどの嬉しさに國土の前途を祝し給ひけるが、御樋代神の朝香比女の神
は長らくこの國土に留まるを得ず、以前の四柱の神を従へまし諸神に別れを告げ、
御來矢の濱邊より磐楠舟に乗り萬里の海原を東南の空さして靜かに靜かに進ませ
給ひける。

(昭和八・一二・一七 舊一一・一 於大坂分院蒼雲閣 内崎照代謹録)

）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第七七卷 天祥地瑞 辰の巻

終り